
ふわふわ

猫梟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふわふわ

【Nコード】

N2123K

【作者名】

猫梟

【あらすじ】

その世界で暮らすのは人間に近いが人間ではない。彼等はまるで機械のような日々を繰り返す。

浪人生の神海優貴が落ちた世界では、趣味も娯楽も大きな文化も無い無機質な街で、それでも満ち足りた人々が毎日の労働を行っていた。

そんな街の、一人の少女と同居をするはめになる。彼女は草木を、太陽を、風を心から愛する常にハイテンションな街でも変わり者の少女だ。

街人は人間である優貴を恐れた。

「この世界において、人間は破壊をもたらす存在と信じられている」
無論、優貴は何の変哲もないただの浪人生である。

破壊をもたらす存在であるらしい優貴と、世界をこよなく愛する少女との奇妙な共同生活が始まった。

第一話（前書き）

初めましての方、始めまして。

お久しぶりの方、ご無沙汰しております。

猫梟です。

執筆中の小説が8割方完成したのでボチボチアップしていこうと思います。

いつもの通り、おそらく全部で10話前後になるかと思われます。

毎度拙い文章ですが、最後までお付き合い頂ければ幸いです。m（

ー）m

第一話

序章

目覚めと共にまず感じたのは温かな浮遊感だった。すぐにそれは有り得ないと気づく。なぜなら自分の体は仰向けになっており、背中では包容力に似たベッドの温もりに包まれていたからだ。

奇妙な空気が自分の肺に流れ込んでくる。何が奇妙なのかと問われても答えを返せない。だが……いつも自分が意識もせずに吸い込んでいる春夏秋冬の空気とは異なる気がした。

優貴^{ゆき}は上半身を起こす。

目は完全に覚めていた。

肌を感じる外界の違和感は、もしかしたら知らず風邪でもこじらせた結果なのかもしれない。そう思い額に手を当てたり、何となしに手のひらを眺めてみる。問題は特に見当たらない。十八年と慣れ親しんだ自分の体だ。全くの健康体。

気づけば私服のまま眠っていたらしい。グレーのインナーとその上に羽織っている紺のポロシャツの組み合わせは、街を歩く時のお気に入りの格好の一つだ。ズボンのポケットには携帯電話の感触が生地越しに収まっている。

時計を確認しようと壁へ視線を這わせる途中で――

「……いつ!？」

陸に打ち上げられた魚のようにその上半身が跳ねた。鳥肌が全身を覆い、意味の成さない言葉が口から漏れる。見開いた瞳は元の形状に戻るまで時間を要した。

まず目に付いたのは、視線の先にある剥げかけた煉瓦で組まれたかまぐらのような造形物。暖炉だ。右へ、左へと慌てて顔を向ける。自分の隣には安っぽそうな木材を加工して作られた質素なベッドがあった。壁も、素材はコンクリートではなく木材だ。隅には木製チ

エスト。部屋の中央には二人分の椅子と、やはり木材のテーブルが置かれている。いずれも意匠や彫り物は一切ないシンプルな道具だ。「どこだよ……ここ……!？」

明らかに見覚えのない部屋。自分の部屋のわけがない。テレビもパソコンも、本棚もバッグも、壁に掛かっているはずのアーティストのポスターも何もない部屋。

誘拐。監禁。

物騒な言葉が優貴の頭の中で踊る。起きたら見覚えのない部屋で寝かされていた、などまるで小説の世界だ。だが不思議と優貴はパニックに陥ることはなかった。

イメージが違うのだ。薄暗い光が差し込むかび臭い廃屋で目覚めれば納得したかもしれないが、どうにも自分が目覚めたこの部屋は温もりに満ちている感じがした。よく見ると壁も床も埃なく清潔に手入れされており、窓からは一日を祝福するかのように眩しい日差しが差し込んできている。部屋は住む人間を表すというが、このような朗らかな気持ちでいられる自分を鑑みれば、この部屋の主が悪い人間であるとは思えなかった。

だが用心に越したことはない。とにかく優貴は記憶を思い返し、自分がここにくるまでに至った経緯を思い出そうとした。

霞がかっている。

昨日今日の記憶を思い出すだけなのに、なぜか頭の中には霧が立ち込め、回想の邪魔をする。それでもぼんやりと、水の中に浮かぶ水泡のようにそれは記憶の中に上がってきた。

高校のブレザーを着ている。都内の私立××大学。張り出された掲示板。呪文のように規則正しく並ぶ番号。自分はそれを見ている。愕然としている。周りで沸く歓声と涙。携帯で捲くし立てる友人、抱き合う女友達。

その時、世界は孤立した。

六人で受験し、落ちたのは自分だけ。

——追想を終える。もう十分だった。それだけ思い出せばあとは

連想できる。一度開いた蛇口からは嫌な物がドボドボと溢れ出てきていた。

予備校。無気力にノートを開く。友人達から気遣う電話がたまにかかってくる。何となくバイト。後ろめたさから両親達とは、何となく目を合わせられなくなった。一週間前、二年間付き合っていた彼女にフラれる。受かった五人の内の一人だ。何でも大学のサークルで好きな人ができたらしい。

とにかく。

いつものように。怠惰に、昨日という日を終えて自分は眠りについたはずだ。無論自分の部屋で。浪人生としてあるまじき態度で形だけの勉強に励み、世界が減じる夢でも見ながら眠ったのだろう。

と、下らないことを思い返しているうちに気持ちが落ち着いてきた。依然として違和感とは体に付きまとっているが、どうやらここは夢の中ではないらしい。

「ま、別にいいんじゃないか？」

意味の成していない一言を口にする。不可解さへ対する鼓舞が半分、もう半分は状況把握への諦念だ。嫌な記憶をほじくり返してしまったせいか、鉛色の霧が心を染め上げてしまった。だがその一見開き直りとも取れるようなふてぶてしい内面は、突如開いたドアの音と共に一挙に霧散する。

「ただい……ああああああああ！！！」

一瞬優貴は我を忘れた。開いたドアから鳴り響いた耳をつんざく濁音にではない。

——その金の髪が醸し出す美しさに目を奪われる。染め上げた粉い物ではない、かと言って外人の持つ純真なる金髪とも違う。日の光を浴びて透き通った二つのお下げが、絹のように滑らかに垂れている。物語に登場する女神のように神々しい、と思うのは大袈裟だろうか。慎ましげな桃色と白のブラウスと、褐色の絹のドレスは西欧の民族衣装のようだ。小さな花瓶を三つ両腕に抱え登場したその少女は、エメラルドの双眸を見開いて固まっている。

——人——なのか？

不躰ながらそんなことを思ってしまう。外人とも異なる雰囲気。言葉は全て聞き取れた。だがやはり何かが違う。自分が起きた時から感じているそれと同様、目の前の少女も、自分の言葉では一括りにできない不可思議な空気をまとっているのだ。いうならば最近のテレビゲームに似ているかもしれない。綺麗なグラフィック、綺麗な人。だがそれはどう見ても現実には存在しない、電脳空間ならではの美。

「すいません、もういらしてたなんて！ 初めまして、今日から一緒に宜しくお願いします！ 私はこの家に前から住んで——」

花瓶を置き、慌てて頭を下げ、慌てて顔を上げ……と、そこまできびきび体が動いたところで少女が再度固まった。自分を凝視している。必然と優貴も少女を真正面から見るとはめになる。小さな鼻と可愛らしい唇。先のエネルギーに満ちた元気な声の主とは思えない可憐な相貌。

「あの……」

「……はい」

「もしかして……人間の方……ですか？」

「……はい？」

自分が少女に不可思議な感覚を抱いたのと同様、少女も自分に何かを感じ取っていたのかもしれない。十八年の人生で初めて受ける質問だが、それでも優貴は落ち着いていた。無様に醜態を晒すようなことはせず淡々と答える。相手の優しい風貌のおかげで心が静かなのかもしれない。

「人間です。かみうみ神海優貴です、宜しくお願いします。すいませんけど、ここはどこでしょうか？」

「人間の方……。どうしよう……。どうしよう。ああ、どうしよう！」

両手が頬、頭、胸、と矢継ぎに自らの体を移動している。その場でウロウロとターンを何度か決め、言葉の内容を全身を使って表現してくれているようだった。

——とりあえず、見て面白い子であることは理解する。

「えっと、私もう仕事に行かなくてはならないんです。絶対付いてこないで下さいね！ 帰りは遅くなってしまうですけど、その後でお話しましょう。絶対に付いてきては駄目ですからね！ 失礼なと言っでごめんなさい！」

「え？……あ、うん」

一体何なのだろうか？

結局自分の質問に返答はなく、加え名乗ったのに相手は名乗らずじまいだ。自分が学んだ常識など、ここでは通用しないのだろうか。少女は「ひー」とか「あー」とか謎の言葉を連呼しつつ、部屋をバタバタと往復する。気になるのか、時々こちらを振り返っては、また「あー！」と頭を抱える。そして部屋の隅に置いてあった、ひょうたん型の水筒と思わしき物を三つ手に取ると、取っ手に掛けられていた紐を肩にかける。そのままドアへと向かい、最後にもう一度だけ振り返った。

困惑顔。同時にこちらを気遣うかのような優しさの欠片も見え隠れする。

「ごめんなさい。何もない所ですけど、どうか家を出ないで私が帰るまでじっとしていて下さい！ あとそれから、絶対に付いてこないで下さいね」

彼女の天然のような顔を見る限り、おそらく何度も同じ言葉を連呼していることに気づいていないのだろう。悪い子ではないと思う。だから優貴は、会釈と共に閉ざされたドアを見て心の中で少女に詫びる。

空虚に日々を過ごしていた自分にとって、目の前で閉じたばかりの扉はパンドラの箱以上の誘惑に満ちていたからだ。

小学校の遠足を思わせた。ドアを開けた先に見えたのは人の群れだったのだ。見つかつてはまずいのだろう、ドアを閉じてすぐさま窓に駆け寄る。

人、人、人……

そこには一定の方向へ向かって歩く人の流れができあがっていた。男も女も老人も子供もいる。見ると皆手ぶらだ。バッグ一つ持っている様子はない。先程の少女と同様、西欧の民族衣装のような格好でぞろぞろと行進している。いずれも日本人とは異なる顔立ち。おそらく少女もこの流れに乗って仕事とやらに行ったのだろう。

「どんな仕事だよ……」

老人も子供も駆り出されるような内容なのだろうか。そう考えると背筋に薄ら寒いものが這い上がってきた。まともな内容とは思えない。妙齢の女性も当たり前のように交じっている。家事はどうするのだろうか？ 先程から自分の常識がことごとく碎かれていく。一体彼等は何者なのか、姿形は自分と同じ人以外には見えない。

列の最後尾が遠ざかろうとしていた。どうやらこれ以上行列に加わろうとする者はいないらしい。優貴は今度こそと玄関を開け放つと、一定の間隔を維持しつつ後をつけることにする。

そこで初めて外の世界を目の当たりにした。

瞬時、足を止め心を奪われた。

木を組み立てて作られた簡素な家。煉瓦建築も見えるが木造建築が圧倒的に多い。最初優貴はそれを家と思えなかった。自分の知る日本のそれと比較すると、圧倒的に小規模な、どちらかといえば家でなく小屋に近い造り。二階建ての家は一軒もない。庭も車もなく、辺りを見渡してもネオンも外灯も、それどころかお店の看板さえもない。田舎。それも相当な。地面は土を固めただけの単純なものでアスファルトなどという単語は存在しないかのように見える。頭上を仰いだ。そこには見知った青空と白い雲、太陽もきちんと一つだけ存在している。

どこかの国、いつかの時代。自分は神隠しにでもあってワープしてしまったのだろうか？

驚くことに携帯電話はしっかりと時を刻んでいた。朝の八時半。当然のように圏外の文字が映っているが時計としては機能できるら

しい。

静かだ。犬も馬も人もいない。やや暑い日差しを受けて足早に集団を追いかけることにした。

街（？）は二十分ほどでその影を潜め、代わりに我が物顔で姿を現したのは果てなき草原と丘だ。目が痛くなるほどの緑で埋め尽くされた壮大な景色の中、大小の丘陵が波のように幾つも続いている。人々（結局呼び名が分からないので人と呼ぶことした）はそこをバラバラな足取りで進んでいく。何人かは隣の人間と小声で喋ったりしているようだが、基本的に和気藹々としたお喋りは行われていないようだ。少なくとも優貴には楽しい雰囲気は伝わってこない。かといって、絶望し、暗雲の中を無気力で行進しているような様子でもない。やはりただの仕事——なのだろうか。

牧場の丘のような道を進むことさらに十分。集団が二手に別れ始めた。だが彼等が盆地のような場所にいたのが幸いし、優貴の側からは何百人という頭を見下ろすことができた。そして唯一の知り合いであるお下げの金髪を発見。迷うことなくそちらの集団の尾行を続ける。

そこからもう十分。集団は更に何組かに分かれていき、三十人ほどの単位となってしまうていた。いい加減歩くことにも億劫になつてきた頃、ようやく集団はその足を止める。

戦争でも起きたのかと思わせる風景。

巨人がその拳を地面に叩きつけたのだろうか。それとも巨大なアリジゴクでも潜んでいるのか。草原には無残にもその緑を散らし、土をほじくり返したような小型のクレーターが至る所に見受けられた。暴力的なる破壊が風光明媚を陵辱した跡は見るに耐えないほどだ。

大柄な男性が荷物を下ろすと、無数のスコップが地面に散らばった。それに群がる老若男女。当然あの少女もいる。遠巻きに優貴が見守る中、皆が思い思いに道具を手に取ると、休憩を挟む間もなく

手近に山になっていた土をすくい、穴の中に放っていく。

どうやらそれが仕事らしい。

損なわれた景觀を修復するのだろう。ショベルカーなど機械の類は一切ないようだ。全て手作業で地道に行われている。だが……

どうして女子供、老人まで参加しているのか？

ボランティア活動には見えない。釈然としない思いのまま優貴は黙って作業を見守り続けた。

一時間が限界だった。見ているうちに違和感が心の中に沸き起こり、それはとある理由の元に僅かな腹立たしさへと変わっていく。少女から釘は刺されている。だが、どう鼻屑目に見ても目の前で黙々と働く人達が悪人には見えなかった。取って食われるようなこともないだろうし、仮に食われても——と、自嘲気味に鼻を鳴らすと優貴は丘を降りて行く。

肉眼で顔が確認できるほど近づく、いかにして彼等が熱心に働いているかがより伝わってきた。力の有無に関わらず、皆が皆、無駄口を一切叩かずに作業に没頭している。それでも、さすがに異国の服装が目の前を通れば注意は引いてしまうようだ。優貴が作業場を進むにつれ、周りからざわめきが起こり始める。

目標のお下げを確認する。

そして……刮目してしまった。

周りの群集に埋もれても尚、彼女は輝いていた。今度はその髪だけではない。スコップで土を持ち上げ、それを放る。ただそれだけの繰り返しなのに、優貴には少女がいやに楽しげに映った。集中し、熱中し、それでもその目は温かな光が宿っている。口元には僅かな笑み。絵画で見た、我が子に乳を与える母は確かこのような顔をしていた気がする。

ようやく、といった感じでざわめきが彼女の耳にも入ったようだ。手を止め顔を上げ――

「あああああああああ！！！」
叫んだ。

この少女は自分と出会う時は叫ばずにはいられないのだろうか。
「や。悪い」

片手をあげて挨拶、軽く謝罪。言いつけを破ったことを詫びる。
「どうして、どうしてここにいますか!!」

驚愕は焦燥へ、焦燥はたじろぎへと変わっていく。ころころと変化するその表情は、彼女が裏表ない人であることを表している気がした。

「何だい？ その方の服装……もしかして、人間かい!？」
誰かがいった。

途端に周りのどよめきに熱がこもる。にんげん、と何度も復唱されるが、その中に慄きに近い情も込められていることを優貴は機敏にも察知した。

少女の忠告はきつと正しかったのだろう。どうやら自分は招かれざる客のようだ。だが優貴の予想通り、彼等は手に持ったスコップで自分へ襲い掛かったり——などの様子はない。

とにかく——

「貸してみな。人手が足りないなら遠慮なく呼んでくれればいいのに」

「ああ!」

半ば強引に少女からスコップを奪い取ると、手近にあった土の山をさっさと消化させていく。

歓声が上がった。

優貴は別に大したことをしているわけではない。急いで手を進めてもへばるだけなので、適度に両手の動きを反復させているだけだ。彼等の動きと何ら変わることない動作。

たったそれだけの動きで、周りから賞賛の声が漏れる。

「凄い……! どうしてそんなに早いんですか!？」

少女が目と口を大きく開いて驚いている。

——先程、腹に溜まっていったストレスの原因はこれだ。
違うのだ。

自分が早いのではない。

彼等が遅いのだ。

女子供だけでなく壮年の男性まで、なぜか皆非常に手が遅いのだ。遅々として進まない作業。それを上から一時間も見ていれば気がどうにかなくなってしまふ。とことんこの世界は不思議だ。誰も手を抜いているようには見えない。それはここまで下りてきて改めて分かった。なのに皆、不自然なほどに動きが遅い。歩くスピードは優貴と同等のものだったのに、いざ作業にかかる速度が半減している。たったこれだけのことでヒーローを気取るつもりはないが、他にやることもないのでスコップに意識を預けようと、上着を脱いで本格的に取り組もうする。

「あの……駄目です！ お気持ちは本当に嬉しいですけど、これは私達の仕事ですから」

客人（かどうか分からない）には働かせられないということだろう。これから精一杯汗を流そうとする寸前に水を差された。

「何でだよ、別にいいじゃないか。はつきりいって俺は暇なんだ」

「でも駄目なんです。これは私達だけでやらなくてはいけないんです。人間の方の手助けに甘えてしまふわけにはいきません」

温和な雰囲気とは逆に少女の意思は頑なだ。芯の強さを見ている気がする。柔和ながらも決して折れない雑草のような逞しさ。

直感で悟る。幾度言葉を投げかけようが、目の前の少女は決して揺るがないだろうと。

だから口でなく行動で先手を取ることにした。

再び、優貴は無言で土の山をスコップで切り崩し、穴の中に投げ入れる。

「だから！ 駄目ですって！ 私の話を聞いて下さい」

「俺の身にもなってくれよ。勝手にここまでできたことは謝るけど、ずっとここでボケーッてしながら皆の作業を見てろっていいのか？ 逆にその方が酷いぞ」

屁理屈。そして優貴の手は往復をやめない。その背中に少女の恨

めしげな視線が刺さるが、行動した者勝ちの裁定は通用したようだ。諦めたような溜息が背後で漏れる。

それに触発されたわけでもないのだろうが、周りで作業を一時停止していた人達は、やがて各々の仕事に戻り始めた。露骨な視線や恐怖の眼差しこそは飛んでこないが、それでもどこか遠巻きで遠慮がちな目を向けられる。途中気になって背後を振り返ると、苦虫を噛み潰したような少女と目が合ってしまったので即座に作業に集中する。

休憩時間にでも詳しく事情を聞いておかなくてはならないだろう。街全体で一体何をやっているのか。自分の存在は何なのか。だが。

一時間、二時間、三時間と経っても休憩時間はなかった。それどころか水を飲む者さえいない。

四時間、五時間、六時間と経つ。ようやく優貴は気づく。

自分がただの一滴も汗をかいていないことに。それ以前に疲労さえも感じないことに。

更に二時間後に確信を持ったのは、空腹感を感じないこと。

そして、太陽が落ちてその日の作業が終わろうとする頃には——このねじれた世界に馴染みかけている自分に僅かな戦慄と納得を覚えていた。

「悪かった。でも一体どうして俺が作業したら駄目なんだよ」

朱色の空はこの世界でも共通らしい。帰路、優貴は少女の隣に並び話しかける。

「駄目なものは駄目なんです！ でも、お礼はいわせて下さい。今日は本当にありがとうございました。おかげで作業がとてもはかどりました」

叱りと礼を同時に受ける。その頃には優貴は少女の真っ直ぐさに内心微笑むようになっていた。隠し事や嘘の類と正反対に位置し、何事にも全力で真正面から向き合う性格が見て取れる。

「あ、見て下さい見て下さい、あれ!!」

会話の流れを真つ二つに切り、突如として指し示した方向に映るは――

山の谷間に沈み行く眩い夕日。労働作業をぶっ通しで行っていたせいか、その一日の終わりを告げる、輝く円環から放たれる光には感慨深いものがあった。

「綺麗――！！！！」

妖精は存在するのかもしれない。

可憐で無邪気な相貌に、斜陽を受けて煌く金の髪はまるで空想世界の住人だ。

見惚れたことを誤魔化すかのように優貴は少女から水筒をふんだくった。だが持ってあげようとの善意は、その重さを前に一瞬へし折れそうになる。

「あ、何するんですか!」

「おい……これ、中身減ってないんじゃないのか!?!」

「そりゃそうですよ。私しか飲んでませんもの。あ、飲みますか!」

「中身、何だよ」

「水です!」

その純粹なる笑顔はどこからくるのか、冷えてもいないであろう水になぜそこまで自信が持てるのだろう。

「喉渴いてないからさ。てか、他の皆さんもそうだから減ってないんじゃないのか?」

「私だって喉渴いていませんよ? でも仕事の後に飲むと風情がありますから、とりあえず飲んでます! こういうのって、味じゃないと思うんです!」

妖精はやっぱり存在しないのかもしれない。

この少女は……多分、変なヤツだ。

三つも水筒を持ってきているということは、おそらく自分以外の人の分を考えてのことだろう。だが、今日初めて仕事をした自分な

らいざ知らず、おそろくずっと共に仕事をしている仲間の好みなど本当ならば知っているはずではないのだろうか？　なぜここまで壮絶に水が余るのだ。

優貴の胡散臭げな目から心中を理解したのか、少女は誤魔化すかのようにあははと笑う。

「あの……今日こそは皆さん……飲んでくれるかなあ……て。初めて組む方もいましたし」

この世界に空腹と乾きは存在しない。

自分でも順応性が高いと思う。だが自他を見る限りそれは真実であろうことはほぼ間違いない。昼食は出ず、飲食類を持ってきている人間も彼女を除いて一人もないのだ。

ともあれ、横から不満げに口を出す少女をなだめ水筒を肩に掛ける。理由はよく分からないが、この少女は自分をずっと気遣ってくれている。そのお礼くらいはしたかった。

ふと視線を感じた。

周りの人達は皆無言だが、それでも今日という一日の作業を終えたからか、どこか満足気な目でゆっくりと帰路へついている。先から騒いでいるのは隣の少女だけだ。視線は真横。少女とは反対の位置から二つの顔が自分を覗き込むように見つめていることに気づく。自分と同じ年ほどの少年と、それより四つ五つほど下であろうか、少女の二人組みだった。

——その前に。

「いい加減名前教えてくれよ。実は先から呼び辛い」

「え？　ないですよ？」

水筒少女（優貴の中で咄嗟にあだ名をつける）はあっけらかんと口にした。さも当然であるといわんばかりの態度。息をのむ。

「ね。私達名前なんてないもんね？」

尋ねた先は、新登場した少年少女だ。

「ないね」

「……」

感情を乗せず頷く少年。無言で頷く少女。

面喰らったのは優貴だけのようだ。思わず少年に詰め寄る。

「じゃあ、お互いのこと何て呼んでいるだよ!？」

「お互いのこと? んー……、ねえ、とかあの、とか……?」

訂正しなくてはならない。順応性が早いのだと思っていた自分に、「ここ」はまだ早すぎるようだ。混乱を御し冷静を保とうと必死になる自分の横で、少年が水筒少女の横顔を無言で見つめていることに気づく。何気なく目に入った、との感じではない。不自然なまでに長い間、少年は瞳の先を固定させていた。

ここでピンとこなければ男でないだろう。

「おっと、ごめん。……どうぞ?」

考えてもいなかった。今朝から自分は水筒少女に馴れ馴れしくし過ぎていたかもしれない。性格は若干斜めを走っているが、彼女の眩しい笑顔に好意を抱く人は少なからず存在するに違いない。

少年にポジションを譲る。水筒少女とも顔見知りであるようだし、ゆっくり話をしてほしかった。

だが。

「――? え、何?」

優貴の意図は少年に伝わらなかったようだ。

出会って間もないのに、他人の色事を無粋に口にするのも失礼なので、必死にジェスチャーで促す。

「だからほら……どうぞ。ごめん、気づかなくて。ゆっくり話してくれ」

「――すまん。いっていることがよく分からん」

無然とした面持ちで少年から返される。照れているわけでもなく、無理をしているわけでもなく、どうやら本当に自分が何をいつているのか分からない、との感じだ。

首を捻る。水筒少女へ思慕を寄せる少年の図、にしか見えなかったのだが……

突然、横から伸びてきた小さな手に頬を掴まれる。

「んえ!？」

視線を下ろした先には栗色の髪と、その左右に結われている団子のような塊。あどけない青の瞳が両手で優貴の頬を優しく引っ張っていた。無言。少年の妹だろうか。反応に困っている優貴の眼前で、彼女は頬を粘土でも捏ねるかのように四方八方にぐりぐりと曲げる。「こら、やめるんだ。人間さんが困っているだろう」

少年の言葉に耳を貸さず、鼻、唇、顔中を無邪気に突いたり触ったりしてくるその様は、まるで珍獣にでも出くわしたかのようだ。

——ああ、そうか。自分はこちらでは珍獣扱いなのかもしれない。強めに腕を引かれ、ようやく少女の攻撃がとまる。……依然として無表情を貫いている。

「どうやら人間が珍しいみたいだ。すまん」

「構わないけど。……それより、その子や君は人間じゃないのか?」「うん、違う」

あっさりと、何でもないことのように頷く少年。だが人でなければ一体何だというのか。

「いずれあの子から説明があるだろう。それより……失礼になるけど、これから君はあまり出歩かない方がいいかもしれないぞ?」

視線の先には、両手両足を元気に振りながら楽しげに歩く水筒少女。……奇しくも今朝彼女からいわれたばかりである。家の中に行くと。

声のトーンが下がる。辺りに視線を油断なく這わせ、少年は答えを口にした。

「ここではね。人間は……破滅をもたらす存在として信じられている」

冗談。

そう吹き出そうとする優貴を、少年の純真なる青い双眸が射抜く。茶化せなかった。

風が吹く。

心地良いそれが去った後に感じたのは、作業中は集中し過ぎて気

にもならなかった視線の数々だ。

敵意ではなく悪意でもない。

それでも。

猜疑心と警戒が混じったような、黒ではないのだがグレーに近いような。

露骨に拒否はされないが、両手を広げて歓迎されるわけでもなく、罪の疑いをかけられた人間が感じるようなむず痒いもどかしさ。

個人差はあるのか、少年と団子頭の少女からはそのような視線は感じない。

ぽつりと思った。

今朝出会ったばかりだというのに、その時優貴は突如として大きく意識した。

あの水筒少女は内心では自分のことをどう思っているのだろうか？
自分の存在のせいで奇妙な空気に包まれている三十人ほどの集団。

そんな中――

一人鼻歌を歌いだした水筒少女は酷く場違いで、特異な存在としてして優貴には映った。

「あ！」

何となしに目で追っていたその背中が立ち止まる。元気に歩くその先に何かを見つけたのだろうか。勢いよく振り返り、二人の視線が交じる。

「見て下さい、あの夕日……！」

「……？」

「綺麗……！！！」

「……さっきと何が違うんだ？」

「この角度から見ると……ほら、あの丘の辺りにかかる光の具合が全く違いますよ！ 橙色と黒が溶け合って絶妙の凄さを生み出しています！」

どうせならもっと格好のいい言葉で締めてほしい。絶妙の凄さとはどの程度凄いのだろう。

白く……

不純物のない純粹なる白。

泥で汚れたその肌は、無邪気な子供。無垢なる存在だ。

自分とさほど変わらぬ年齢に見える水筒少女は、しかし心だけは昔へ置いてきてしまったかのように、家に着くまではしやぎ続けるのだった。

一日が終わる。

そこで優貴はようやく気づく。

どうすれば元の家へ戻れるのだろうか？

「ま、いいや」

地球の中に点在する日本という国、東京、××区を思い返す。取り立てて戻りたいと思わない自分がいた。別に「ここ」が気に入ったわけではない。眠って目が覚めたら全部夢でした、でも構わない。つまりは。

どちらでもよかったのだ。

一日二十四時間はこちらでも変わらないらしい。そしてどうやら一週間は七日、曜日も優貴の知るそれ同様に存在していた。

「明日は日曜日なので、ピクニックに行きましょう！　そこで色々お話しませんか！？」

夜九時。山ほどの質問を用意している優貴をよそに、そう告げると水筒少女はさっさとベッドに潜ってしまった。ピクニックの前日の晩はワクワクして眠れないから、早めに眠った方がいいじゃないですか、とは水筒少女の談だ。

やや暑い気温。おまけに疲労を感じていない体。それでも目を閉じると意識がすぐに遠のいていくのを感じた。精神的には疲れていたのかもしれない。隣では呆れるほどあっさりと寝息が始まっていた。意識が落ちる寸前に思う。そういえば一応自分は男なのだが……どうして同じ部屋で眠っているのだろうか。そもそも、この家に大人はいないのだろうか。

疑問は闇の中に吸い込まれていった。

第一話（後書き）

誤字脱字をはじめ、ご指摘等ございましたら、ご遠慮なくお願いします。

こちらで書き込みして頂いても結構ですし、大っぴらには言い辛い事でしたらメールでも結構です。

念のためメアド…pirrot2226@yahoo.co.jp
更新ほぼ停止中のHP…http://tobiryu.hp.i
nfoseek.co.jp／

宜しくお願い致します。

第二話

夢を見た。

バイトをしている。店内を回り客のグラスに水が満たされているかを注視している。空いた皿を発見したら下げ、客に呼ばれたらすぐに向かい、オーダーを受けて端末に注文を入力していく。

予備校で勉強をしている。ほとんど機械的に、だ。最近、友達からも連絡が少なくなった。皆今頃大学生活を満喫しているのだろう。数学の図形が無機質に自分を睨んでいるが、それを解く意欲が全く沸いてこない。

新聞を見ている。テレビを見ている。風呂に入る。

そしてまた一日が終わる――

「さあ、行きましょうピクニック!!」

「……その前に、まず君に名前をつけようと思う」

目が覚めてまず飛び込んだきたのは現実だった。目覚めはイコール現実の世界を受け入れること、である。自分の脳が覚醒した先に見えたのは、眠る前と何ら変わらない景色。木造の家と金髪の不思議系少女。その肩には二つの水筒が掛けられている。

どうやら自分にとっての現実はこちららしい。

「あの、どうして名前が必要なのでしょうか？」

「呼びにくいからだ。俺は神海優貴。優貴と呼んでくれ。君は……そうだな……」

寝起きと共に外出を要求され、優貴はそこへ反射的に自分の要求を重ねる。何となく、主導権を握りたいという子供じみた考えがあった。水筒少女は目を丸くして首を傾げている。どうやら本当にここでは皆名前を持たないらしい。

「ナチュラル。……いや、長いな。ナチュラ……ナユラ……よし、ナチルにしよう」

「ナチル??」

「そう。今から君をナチルと呼ぶことにする。それとも何か希望する名前があるか？」

「ナチル……」

水筒少女はロボットののようにその言葉を反復させていた。小さく、呟くように。舌の上に転がし、噛み締めるかのように。

「ナチル……ああ……何だかとても素敵な響きですね!!」

少女は両手を重ね合わせ、眩しいものでも見たかのように目を閉じる。その可愛らしさを前に、変に照れてしまう自分が恥ずかしく、何となく乱暴に布団を跳ね除けた。時刻は……八時半。見ると服装は昨日のままだ。ナチルの服装も同じく変わっていない。

「昨日と同じ服でいいのか？ 俺はこれしか持ってないから変えようがないけど」

「へ？ えっと……私、着替えた方がいいでしょうか？ でもこの家には、私のサイズに合う服って、これの他には一着しか用意されていないんですよ」

するとナチルは壁に鎮座していたダンスを何やらごそごそ漁り始めた。そして何の躊躇いもなく自らのブラウスのボタンを外していく。

「うおい!! 何やってるの!!?」

「えっと？ あの……何か間違えました？ 着替えた方がいいのですよね?？」

文化の違い——もとい、世界の違いなのだろうか。心臓が跳ね上がった優貴とは対称的に、花も恥らう年頃であるはずのナチルは疑問符で顔を埋め尽くし、自らの行動に何の違和感も持っていないらしい。その問いに逐一説明をしてやるのも馬鹿らしいので話を切り上げることにした。

「分かった。すまない。別に服はそのまま構わないから、もう行こう」

「あ、大丈夫です大丈夫です。すぐに着替え終わりますから。そこで待っていて下さい」

「いや、本当に大丈夫だから！俺が間違えたから！！」

「大丈夫です、私着替えるの早いです！嘘だと思うならそこで見ていて下さい！」

「くっ……！俺、その服の方が好きだなあ！」

何かに遠慮したことを嗅ぎつけたナチルは意地でも着替えようと主張する。優貴は少しずつ学んでいく。それをいなすにはどうすればいいのか。実戦で覚えたのは新たな口上。対ナチルのやり取りだ。すると案の定、彼女は張り巡らせていた防壁をあっさりと引っ込める。

「そうですか！？嬉しいです、私も本当はこっちの服の方が好きなんです！」

一切の不純物のない笑顔。少し心が痛みつつも、優貴は胸を撫で下ろす。

——興味がないわけではない。
でも。

惰性で塗れた心と、虚ろな瞳で自分が形作られているとしても。
神海優貴は下衆にはなりたくないとの根底が深く心に根付いていた。

あまり外に出ない方がいい、との忠告は昨日貰っている。おそらくナチルも同じことは考えたことだろう。その上での誘い。ならば断る理由はない。そこで色々話す約束にもなっている。

そういえば久しぶりだ。

自分が何かに興味を持つのは。

「この世界はですね。ゆ……きさん？ 優貴さん達のいる世界とは全く異なる世界です」

「そのわりには日付や時間の概念は同じだな。言葉も通じるし、建物も景色も人の造る物と似ている」

相変わらずのやや暑い日差し。ナチルは時々こちらを振り返りながら上機嫌に歩いて行く。両手を目いっぱい広げて深呼吸したり、

空を仰いだり、何というか——幸せそうだ。色々。

「この世界のどこかには人の世界へ通じる道があるそうです。私達の家も文化も、そこから流れ込んできたものを元にして作られた、と聞きます」

「そうなのか。何か名前はあるのか？ 俺の住む世界は地球、日本、東京だけど？」

「名前？ ないですって。私達には不要ですもの」

ひと気がゼロの街をナチルに連れられ歩く。比喻ではない。本当に自分達以外に誰も歩いていないのだ。もっとも時折、家の窓から寄せられる視線が自分に吸い込まれるのを感じてはいるが。

「じゃあ、ナチルが何かつければいいじゃないか。……お、これ考えようによっては凄いことだぞ？ ナチル、世界に名前をつけるんだぜ！？」

「えー！ 私がつけるんですか！？ 凄いです！ でも凄いけど無理ですよ、私そんなのやったことないですもん！！」

「やってみなっ。何でも構わない。あ、でも変なのつけるなよ？ この全人類を敵に回すからな」

「えー！！！！！」

会話が完全に中断され、ナチルはうんうんと唸り始めた。真剣にそれが五分と続く。先程まではとても気持ちよさそうに道を歩いていただけあって、さすがに優貴も少し罪悪感を覚える。

「……分かった。今すぐじゃなくていい。とりあえず話してくれ。人間じゃなければお前は何だ？」

思った以上に奇想天外な話のようだ。しばらく話題には事欠かないだろう。優貴の言葉を受け、萎れていた花が突如息吹きを吹き返したかのように、金色の蕾が花開く。

「私達の仕事は世界の修復です。優貴さんも見ましたよね？ 昨日の、沢山の大きな穴。……私達は歩いたり走ったりはできませんが、手や足を使った作業になると、その速度はとても遅く、苦手です。それでも皆で、丸一日かけて取り組めば結構な量になります」

「修復作業以外にも、何かやっていることはないのか？ 何ていうか……趣味みたいなものは。さきから歩いてても、店一つないぞ」
「基本的には皆何もしないです。日曜日は、ほとんどの方が寝ていますし、作業が私達の人生みたいなものですから。それでも軽い散歩くらいなら、する方はちらほらいるようですけど」

——なるほど。

それならば腹が減らなかったり、街人がいやに静かなのも頷ける。人に余分な機能が備わっていないのと同じ、彼女達も自らに必要な能力しか付いていないのだろう。正直……そのロボットのような生活に突っ込みたいことは沢山あるが、元の世界で腑抜けている自分如きがとやかくいうような話でもないし、よその国、よその世界の人間が口出しする問題でもないだろう。

それにしても、と優貴は思う。せめてこの世界の神様は、ブルドーザーやショベルカーを与えてやらなかったのだろうか。

歩く街景色は変わらない。仮設住宅とまではいかないが、基本的に似た造りの木造建築が駒のように並べられている。無機質だ。まれに二階建ての家、石造りの家なども見るが、何となくこの世界には電気や燃料、お金の類が存在しないことが分かってしまった。

ちなみに。

神海優貴は今の話を全て鵜呑みにしている。

突拍子もない話を信じない人間もいるだろうが、この目の前の少女が嘘をつく器用さを持ち合わせていないことは、何となしに伝わってきていたのだ。

「それで、どうして俺が疫病神扱いされているんだ？ そもそも、破壊をもたらす存在って何だよ」

「それは……」

初めて少女の顔が翳る。先程までの幸せそうな表情が一変してしまった。

「私達が生まれ落ちた時から浸透しているんです。別に誰がいい出したか、などではなくて。根拠も別に何もないんです。ただこれは

……そうですね、言い伝えのようなものです」

つまりは、姿形のないただの噂に踊らされているということだろうか。

当たり前だが、優貴には、この世界を壊してやるなどと大それた意思はない。

「俺が元の世界に帰る方法とか、既に解明されてたりするのか？」

「ごめんなさい！ 私には分かりません。私が知らないということは、他の方も知らないと思います。皆同じ量の知識を持っているので」

手段を渴望しているわけではない。それなのにナチルはお下げを勢いよく揺らし、頭を下げた。

暗くなってしまった。

少し鬱陶しいくらいにまとわりつく太陽の輝きは肌にちりちりと突き刺さる。

何となく無言。打破する為に口を開く。少々不躰だが、ナチル相手になればある程度の質問は許されるような気がした。

「ナチルは彼氏とかいるのか？」

「へ？ いるわけないじゃないですか」

それで話が終わる。

後悔。恋人の有無に関わらず、大概はここで笑いや苦笑いの表情になり、色恋的な会話でコミュニケーションをはかれるのだが。一刀両断、まさか一秒で切り捨てられるとは。

それでも取っ掛かりは得ることができた。

「作ればいいじゃないか」

「えー！ 必要ないですよー！」

「……できない、でなく必要ない、とは……お前また余裕だな……」
他愛もない話が始まる。その内容は多少ズレているが、それはそれで優貴にとっては面白い。

ピクニックが再開される。

少しだけワクワクしてきた。

「見て下さい、見て下さいよ優貴さんーーーー!!」
もう見ない。

大地はいつの間にか草木で埋め尽くされていた。鬱蒼と生い茂る木々が日の光を隠す。それでもそこに不吉さはない。朽ちた樹木や息吹く色とりどりの花が森という母の胎内で優しく寝かされていた。太陽は遮断されようと、慈しみの温かな空間で満ちている。緩やかな丘を登っていくことに辛さは感じない優貴だが、十秒に一回ほどのペースではしゃぐ連れのおかげでげんがり感が病のように体内で侵攻していた。

「川ですよ、川ーーーー!!」 水がキラキラしています! 綺麗で
ーすよーーーー!!」

なぜナチルは常にハイテンションなのだろう。

仕方なく声の方に顔を向けると、なるほど、そこには自然特有の透き通るような川が慎み深いせせらぎ音と共にゆつたりと流れていた。魚もかなりいるようだ。群れとなって泳ぐ影が見える。

「あの魚、食ったら美味しいのかなあ……」

何気ない優貴の呟きに、ヒツと喉から搾り出すような怯えで返答が返ってきた。先を歩くナチルに顔を向けると、何やら……泣きそうなの、それでも気丈に笑おうとしているような、そんな痛々しい表情が向けられる。

「……そ、そうですよね。人間の方、ですものね。お魚……食べてしまってくださいね」

「何だよ。……お前も食っちゃまうぞ、コノヤロウ」

「イヤーアアアアアアアーーーー!!!!」

「あ、待って!!」

一目散に駆けて行くナチル。「冗談だ!!」と叫びつつも、それが彼女に届いている様子はない。両手をバンザイさせて走るナチルは滑稽だが、意外に足は速い。

彼女は見たところ、優貴の知る知識はほとんど持っている。人が

人を食べる古代の文化も知っていたのかもしれない。しかし冗談が通じない人間を相手にするのは非常にやり辛い。既にナチルは道なき道を走っており、彼女を見失ったら一人で帰れる自信もない。必死で追いかけて行く。

優貴は気づいていなかった。

当然前を走るナチルがそれに気づくはずもない。

草木を掻き分ける。腐葉土の大地を踏みしめる。花の庭園を駆け抜ける。

清廉な印象を持つ紫のキキョウが優貴の肌に触れた。

元氣いっぱいに咲き誇る黄色いスマイレが腕に擦れた。

「ナチル！ 悪かった、冗談だ！ 待ってくれ！！」

騒がしくもどこか微笑ましい一組の男女が通り抜ける。周りの花々は最初、破顔一笑でそれを見守り、祝福していた。

突然、名もなき花が声なく泣いた。

あれよあれよという間に、その隣の花も泣きじゃくった。

キキョウが、スマイレが、鎌首をもたげるように、その顔を力なく空から大地へと移した。

人の声が遙か彼方へ遠ざかる頃。

花々は枯れていた。

「ここが天辺です！！」

胸を広げ、天真爛漫に言い放つナチルはとても幸せそうだ。

開かれた丘だった。木々の中を通ってきただけに、突如として注がれる光の歓迎にしばし面食らう。

些細なトラブルはあったものの、家を出てここまでおよそ二時間。疲労も感じないこの世界においては手頃なピクニックだ。

「さ！ それじゃあ色々お話ししようか！ あ、でもその前にお水どうぞ？」

さんさんと照らすお天道様の余波は、時折通り抜けていく気持ちいい風と相俟って絶妙のバランスとなっていた。喉は渴いていない

が、こういうのは気分の問題らしいので水を胃に流し込んでみる。
美味かった。

冷えているわけでもなく、ミネラルウォーターでもないただの水
(井戸水らしい)が、驚くほどの清涼さをもって全身を駆け抜けて
いく。しばし呆けた。

気づくとナチルが太陽のような明るさを伴ってこちらを見つめて
いた。何となく今の心境を見抜かれたようで悔しい。草原の絨毯に
身を投げ出して仰向けに転がる。

「月曜から土曜は、昨日のようにずっと働いているのか？」

「はい」

「お喋りを楽しんでいるわけでもなく、娯楽もなく、ただ働くだけ
の毎日なのか？」

「はい！ あ、でも人間の方と違って、私達にとってはあの仕事が
娯楽みたいなものですよ？ この世界の傷を修復するために私達は
ここにいます。ですから、その存在意義を全うすることは、私達に
とってかけがえのない幸せです」

確かに、昨日の作業を思い起こす限りでは誰もが熱心に精を出し
ていたようだった。帰り道も、誰も喋りはしなかったが、それでも
皆どこことなく満足気だったように思う。

隣でもナチルが寝転び始めた。……自分のそれと違い、両手両足
を大の字に広げている。

「……趣味娯楽なしなのに、どうしてナチルはピクニックに来たん
だ」

「私、ピクニック大好きなんです！ すっごく綺麗でしたよね！？

ここに来るまでの自然！」

優貴には大体分かってきた。

きつと、他の街人が普通なのだ。おそらくナチルが……少し変わ
っている。

いつの時代にも変なヤツというのは存在する。それでもナチルの
それは、前向きな変なヤツなので、口にこそ出さないが優貴は嫌い

ではなかった。

「優貴さんの世界の自然は、美しいですか？」

「ん……」

答えに詰まる。地球が美しいか否かなど考えたこともなかった。こちらに顔だけを向けるナチルを見れない。綺麗な自然はあるが……それは今破壊されつつある。彼女は既に答えを知っているのではないだろうか。どのみちロクでもない回答なので口に出さずに飲み込んでしまう。

「私はこの世界、大好きです」

手のひらをかざし、まるで青い空を掴もうといわんばかりにそっと閉じた。

満更おかしなたとえではない。

彼女は本当に……その空さえも抱いて生きている気がした。

愛しくて愛しく仕方がない。ここにくるまでの道程を思い出す。ナチルは全てを愛していた。

光と影だ。

ふと、自虐的な笑みが優貴に浮かぶ。彼女は輝いている。人が見落としてしまう些細な光さえも見つけ出し、その美しさと向き合い、愛でて慈しむ。それに対し自分には何があるのだろうか。

夢で見たおぼろげな映像を思い出す。

テレビもパソコンも、街へ出れば街灯も車のヘッドライトも、携帯の明かりも、ありとあらゆる所で何かが光っていた。だが自分はそこへどんな意味を見出していただろうか。

「お前はいいな。将来のことも何も考えず、優劣のない世界でのんびり生きて行けるんだから」

反吐のように下らない言葉が吐き出された。ただの八つ当たりだった。受験に失敗したことで全てが切り離されたような無力感に襲われた自分。

分かってはいた。浪人する学生なんてゴマンという。むしろ、適当な大学に入るわけではなく、夢のため、目標のために何年も浪人を

続ける人達には敬意さえ覚えている。なのに。小・中・高と義務教育で淡々と上がり、そこから先へ繋がる人生へ一步を踏み出すそのスタートに。

自分は出遅れた。

何だか周りと、人生に差がついた気がしたのだ。教師や両親はいう。大人になって振り返れば、ああ、あの頃は凄く焦ってたな、と笑い話に変わるのだと。

ナチル達の人生にはそれはない。勝者は存在せず、しかし敗者もない。

考えると、羨ましかった。

「優貴さんの世界ではのんびりできないのですか？　ピクニックしないんですか？」

「人生に線路が敷かれているわけじゃないからな。こつちと違って、努力を続けて自分で線路を作っていかないと何もできない」

そう。本当ならこうやって日向に寝転がっている時間さえも浪人生としては惜しいのかもしれない。と、そんな自分の皮肉は手近な太陽にあっさりと溶かされる。

「でもほら！　優貴さんは凄く大変な日々を送っていらつしゃると思いますけど、休憩は誰にでも必要だと思っんです。せめてこつちにいる間は、のんびり過ごして下さい！」

「……滞在日数が不明だ。帰国方法も分からない。俺がもうちょつと精神病んでいれば、今頃暴れている所だぞ。大体、どうして俺はこの世界にいるんだ？」

「きっと神様が呼んだんですよ。何か意味があるんです。あ、優貴さんに休め、ていつているのかもしれないよ？」

今まで読んだ小説のパターンに当てはめるなら、もしかしたら自分は、本当は今頃病院で昏睡状態にでも陥っていて死の淵を彷徨っているのかもしれない。そしてこれは自分が見ている夢なのだ。

——自殺でもしたのだろうか？　自分にそんな勇気があるとも思えないが。

「う~~~~っん!!」

立ち上がり、両手を天にかざし背伸びをするナチル。全くの自然体であるその姿は、混じり気のない純白なる空気で満ち溢れている。と、一つだけ忘れていた。

彼女はとことん変なヤツだったのだ。

「ひゃあ!!?」

ただの背伸びでこの筋肉を使えばそうなるのか、ナチルの体は不自然な体勢に揺れ動き、バランスを崩した彼女は間の抜けた声と共に地面に倒れ落ちようとする。

その下にいるのは自分だ。

「い!？」

完全無防備で寝転んでいた優貴にそれを受け止める手段はない。迫り来るピンクと白に対し、反射的に両手を眼前にかかげてシルドを張るだけだ。思わず目を閉じる。軽い衝撃。腕に馴染むふくよかな弾力。おそろおそろ目を開ける。

象芸細工のような端正な顔立ちが目の前にあった。倒れた衝撃か、ナチルは眉を八の字に広げ眉間にシワを寄せている。片側の瞼だけが開かれ、そこから宝石のような煌きを宿す緑が困ったように自分を見つめていた。ブラウス越しに二つの乳房が腕に押し付けられていることを知る。

ナチルに押し掛かれている奇妙な状況。

改めて間近で見るとその顔はやはり端麗だ。そんな美しさを持つ少女が微笑ましいドジを踏む。そのギャップは計算づくとは思えず、十八の心は易々と跳ね上がってしまった。

心臓の音が相手に伝わる前に離れなくてはならない。

その前に。

ナチルを殺してしまえばいいのかもしれない。

その柔らかな首を自分の両手で握り、そっと力を込めるだけだ。周りに人はいない。同じ年程度の少女一人なら簡単にできることだろう。

「――は？」

間の抜けた声を上げる第二号は自分だ。

脳に直接冷や水をぶっかけたかのように、頭が急激に冷え渡っていく。

その凍えは全身に伝わった。

今自分は何を考えた？

「す、すう、す、すいません！！！」

飛び退くように身を離すナチル。優貴の声を不機嫌なそれと勘違いでもしたのか、必要以上に両手を振って慌てふためいている。だが、その小動物のような仕草でさえ、今の優貴には何も思う所がない。一瞬沸き起こった闇の情は既になりを潜めていた。

――恐ろしい何かを自分は思った。

――どす黒い考えで何かを望んだ。

気持ちを切り替える。

とにかく、これ以上沈黙をしてもナチルの不信感を買うだけだ。

今ならまだ間に合う。適当な言葉を返して彼女を安心させてやろう。

「大胆なヤツだな。何だ、異国から突如として訪れた旅人に惚れたか？」

「え？　惚れるわけじゃないですか」

失敗した。

自分でいっておいて何だが、無垢なる顔であっさりと返されたその言葉は自分の胸に突き刺さる。恥らうわけでもなく、笑って流されるわけでもなく、真顔で返されては敵わない。

だが、彼女から放たれた弓矢は自分の中にあつた変なモノを射抜いてくれたようだ。先程までの霧が完全に晴れたのを感じる。

あとはナチルにデコピンを放って完了する。

「痛い！　何するんですか優貴さん！」

「うるさい。俺は失恋して日が浅いんだよ。制裁だ、コノヤロウ」
デコピン攻撃は帰りの道でもしばらくやむことはなかった。

第三話

街は、行くと比べれば幾分かは人の流れがあった。とはいっても家の数を比較すれば外出している人の数は一割以下なのは確実だ。慣れつつある遠巻きな視線は気にしなければ何てことはない。特に誰も自分に話しかけてくるわけではなく、相変わらず大きく振り子のように手を動かしながら歩くナチルとのんびり家まで向かう。

だからこそ油断していた。まさか自分の前に堂々とした佇まいで姿を現す人がいるなど思っていなかったのだ。硬直した隙に、両頬を引っ張られる。痛くはない。ただ恥ずかしい。

目の前には、昨日帰り道を共にした少女が相変わらずの無言で自分を見つめていた。

「あ、こんにちわ」

ナチルからすれば、優貴の頬と少女への挨拶では後者の方が重みがあるらしい。注意を促すわけでもなく、ただニコニコと笑顔を浮かべてこちらの惨状を温かく見守っている。

頭の左右に団子を持つ少女はそれに対し無言で首を縦に振ると、再び優貴へと視線を戻す。

「別に人間の頬なんて面白いものじゃないぞ? ……えっと……えー……」

はたと思いつく。この世界に名前が存在しないことを。やはり、どう考えても不便だ。

「兄貴はどうした。……んー……と、シスター。いや、スター……。……いや、シス」

兎のように可愛らしく小首を傾げる少女。もといシス。やはりその名称がたった今自分に与えられたものであるとの認識はないようだ。

「名前なんだって。可愛いし、つけるの上手だよね人間の方って! あ、私ナチルっていうらしいよ!」

補足されてようやく理解したらしい。シスの手が優貴の頬から離れる。表情は読めないが、それでも自分が貰ったものに何らかの感慨を受けたらしい。瞼をパチパチと閉じたり開いたり、頭の中で反芻させているのだろうか、そんな都合のいい考えが浮かぶ。

「ナチル。もしかして、この子……その……口が、利けないのか？」
言いよどむ。この世界の神様は何を考えているのか今一つ分からない。気まぐれで口の利けない子供を産み落としていても何ら不思議がない気がしたのだ。

「あははは、そんなことないですよ。私と違ってあまりうるさくないだけです。二週間に一度くらいできちんと喋ってくださいよ」

「……ああ……そう」

嫌味ではない。そんな器用なことナチルにはできないだろう。単純に彼女は、シスが喋る割合を数学の答えのように口にしたただけだ。「きつと、昨日の優貴さんの登場があまりに鮮烈だったので興味を持ちちゃったんでしょうね」

「……頬しか興味を持っていないようだけどな」
他愛無い会話。そこに新たな風が通る。

「何、またピクニック？ 相変わらず日曜になると遠出するんだね」

優貴の肩に掛かる二つの水筒から推測したのだろう。登場と共に正解をいい当てたのは昨日会話した——名無しの少年。

「もちろん！ 優貴さんも一緒ですよ。今度は私一人ではありませんせん！」

えへんと胸を張るナチルをよそに、優貴は頭を絞る。

短く整えられたブロンドの短髪。青い瞳。クールな物腰。兄貴。

「……えつと……ごめん。今度からジエンって呼んでいいか？」

「意味が分からんか？」

「だから……君の名前。あ、俺は優貴。それで……ナチルとシスだ。……どうだろう？」

どうだろう、と尋ねるのも何だかおかしな話だ。

三人の名前を決め、優貴はようやく、親が子に名前をつける時の大変さの片鱗を垣間見た気がした。自分が彼等につけているのは渾名のようなものでまだ幾分かは気が楽だ。

「ちなみに何か由来はあるのか？」

「ジェントルメンを略してジェン。何か希望があったら受け付けるけど？」

——いつから自分は家庭裁判所になったのだろう。

「好きに呼んで構わんど。せつかくで悪いが、別に必要ないと思うけどな」

不快には感じてなさそうなので安堵する。シスもジェンも、ナチルほど露骨に喜びを表現するわけではないが、名前を拒絶するわけでもなく、とりあえず呼び名に困ることはなくなったみたいだ。

自分達のやり取りを、何が楽しいのか優貴には分からないが、ナチルがほんわかとした顔で声もなく眺めていた。ジェンもそれに対し真っ向から視線を向ける。何か二人で話すのか——と思いきや、どうやらそうでもないらしい。笑顔のナチル。真顔のジェン。二人の視線が交差する。

一体この二人は何をやっているのだろうか？

「あの……どうかしましたか？ えっと、ジェンさん」

「うん？ ああ、別に構わないで。ただ君を見てようと思ったただだから」

自分の疑問はナチルも同様のものだったらしい。そこへ臆面もなく言葉を返すジェン。おそらくこの場で、青臭い感情で心臓が跳ねたのは自分だけに違いない。

昨日の、ジェンとの会話が思い出される。

優貴にはどう見ても、ジェンがナチルに恋心を寄せているようにしか見えなかった。

笑顔と真顔が再び対角上で結ばれる。無粋に邪魔していいのか優貴は悩み——

悲鳴。

一つだけではない。呼応するように二つ三つと増えていく。途端、慌しく駆け出す街人達。その表情は恐怖一色に染まりきっている。皮肉なものだ、淡々と仕事をこなし、あまり感情を表に出さない街人達の、優貴が初めて見る人間らしい表情が純粹なる負の感情になるとは。

優貴達の背後を駆け抜けて行く人。その正反対に走って行く人。蜘蛛の子を散らすように皆が散らばっていく。

疑問を口に出す寸前。

影が落ちた。

人と自然を心地よく照らしてくれる光のシャワーを巨大な黒いカーテンが遮った。晴れの最中に予告なく訪れる夕立のように、一瞬にして辺りが薄闇に包まれる。それは動き――降り立った。

意味不明な、人を不快にさせるだけのやかましい金切り声を天高く発する。優貴は生理的な嫌悪感を覚えた。呪詛のようなそれは耳から侵入して脳を揺さぶり吐き気を呼び起こす。

ハゲタカだった。そしてコンマ一秒でそれを否定する。

全長六〜七メートルもあるハゲタカなど優貴は知らない。何よりその色が、記憶にあるハゲタカと比べ酷く毒々しい。紫と黒の縞模様、鋭く尖った鉛色の口ばしは人の体など容易く裂けるであろうことが想像できた。どろりとした灰色の瞳が獲物を探するように辺りを見渡している。首と頭の毛が剥がれ落ち、薄緑色の肌を露出させていた。

一羽だけではない。次々と街中に、屋根の上に、その醜惡で不気味な姿が空から現れる。立ち込めるは鼻を塞ぎたくなるような腐臭だ。生ゴミを辺りいっばいにぶちまけたかのようなむかつく臭い。

視覚も嗅覚も聴覚も閉ざしてしまいたい。

完全なる不愉快な象徴が街を覆っていく。

「こっち！ 急いで下さい！！」

腕を掴まれる。ナチルの顔は緊張で強張っていた。先程までの無

邪気な顔はどこへ、いつものドジっぷりが嘘のような鋭い動き。家と家の間を走る彼女に必死でついていく優貴。

息が吸えない。

目いっぱい開いた瞳孔は収束せず、肺はまともに機能しない。

告白するなら、優貴は自分のことを死を恐れない人間であると思っていた。それは勇ましい意味ではなく、単に生への興味が人より薄れているという後ろ向きな意味ではあるが。

それが霧散した。

化け物が十羽、二十羽と増えていく街を見て。

死の概念はいとも容易く神海優貴を喰らう。その証拠に足が竦み、何度も転びそうになる。

生きていることに心から安堵している。自分の腕を掴む温かな手がとても愛しい。

地獄の住人が一斉に吠えた。

路地裏を走る二人の頭上にて、何羽かのハゲタカが天高く飛び立っていく。

優貴は見た。

見えてしまった。

彼等の鉤爪はしっかりと折り曲げられていた。

その中には――

確かなる獲物が収まっていたのだ。

獲物は両手両足をバタつかせ、必死に叫んでいた。

腐った風がそれを遮断する。

それが収まる頃には、大空へ浮かぶ黒い豆粒と化している。

直感する。

もう二度とここへ戻ることはできないのだろうか。

「優貴さん、頑張って!!」

同じものを見て、それでもナチルはしたたかだった。確かな足取りで路地裏を駆けて行く。

優貴の頭はミキサーで掻き混ぜられていた。

まとまらない。

自分はこの世界にきて余裕でいられた。安物の、見せかけだけの屈強な仮面をつけていられた。

ここがおかしな世界なのは分かっている。

なぜ考えつかなかったのか。心構えをせず、たまたま綺麗なものばかりを感受していた。

ファンタジーに悪魔や死霊、鬼の類がいてもそれは至極当たり前だ。

ハゲタカの鳴き声に混じり、叩きつけるように家々のドアが閉じられていく。断末魔のような叫び。絶望を心の底から搾り出したような呻きが時折空から腐臭と共に降ってくる。

自分のことで手一杯の優貴が、ここにきてようやく気づいた。

「ナチル！ ジェンとシスがいらない！！」

いつからか、忙しない足音は二つ分しかなかった。振り返るがそこには誰もいない。

背筋が凍りつく。息を継ぐ間もなく再び遠くで慟哭が木霊した。

「大丈夫です、きっと違う道で家へ帰っています。固まると、鳥達の注意を引きやすいので皆バラバラに逃げるんです！」

「……家？ 家なんかであいつ等の攻撃を防げるのか！？」

「はい！ 家の中には攻撃してきません。鳥達の行動はパターン化していますから！」

ミキサーの中に更なるクエスションが投げ込まれる。街人達がレールの上を歩いているように、ハゲタカ達にも同じようなものが課せられているのだろうか。

「だったら、そこらの家に入れてもらえばいいんじゃないのか？」

「そんなことは絶対にしては駄目なんです！ 他人を自分の家に入れたら、自分達の生活のバランスが崩れてしまいますから！ 異物が混入するようなものです！」

暴論だ。

優貴の世界では生命は何にもおいて遵守された。失ったら二度と

戻らない唯一無二の魂。だがナチルはたった今さらりと口にした。自分達の生活の方が、他人の命よりも大切であると。ならばおそらくこの街の住人は、誰に聞いても同じことをいうのだろう。

……バカげている。

少しだけ……

優貴の心に嫌な音をたてて何かが侵入した。その一瞬恐怖を忘れ、場違いな怒りをお下げの後姿に覚えてしまった。

「もうすぐです！」

小道を抜ける。ナチルの向かった先は行きに通った大通りだ。鼻がひん曲がりそうなほどの異臭、咄嗟に咳き込んで臭いをごまかす。優貴は疑問は挟まない。通りに出るのはあまりに危険だが、おそらくそこを通らなければ家にはたどり着けないのだろう。何とか一人でも走れるくらいの気概を取り戻した優貴はナチルの腕を離す。その方が断然速度が増す。

素早く左右に視線を張り巡らすだけで十羽。地面の上で地団駄を踏むようにしているハゲタカは、おそらく獲物を押さえつけているのだろう。屋根の上にも何羽かが止まっている。

救出という単語は一切頭に浮かばなかった。

不可能だからだ。

試すまでもなく分かる。

己の可愛さのあまりに逃げる非道だ、と誹る人もいるかもしれない。

それでも優貴にできるのは一目散に駆け抜けることだけだった。

見覚えのある家が視界に入る。どう見ても頑強には見えない、茶で統一されたあばら屋だ。まだ二日間しか世話になっていない、こちらの世界での優貴の家。

羽が降る。

既に二人はハゲタカ達のターゲットに定められていた。眼下を見下ろしていた捕食者が大空を一斉に舞う。

空は闇に閉ざされた。

唸る轟音は死神の羽。渦巻く大気は意味不明な金切り声で満たされる。

唯一の救いは、鳥達に大した知能が備わっていなかったこと。背後で一羽が鳴いた。

それを合図にできた。

半ば勘任せに優貴は地面へ横っ飛びに体を投げ出す。

途端、大気が刃のように頬を掠めた。獲物を捕らえそこなったハゲタカが優貴が立っていた場所の全てを搔っ攫うかのように鉤爪を閉じる。固い物がぶつかり合い、鋼を叩いたような音が鳴った。

それに怯えている暇はない。震える脚を叱咤し、噛み合わない歯は食い縛って何とか黙らせる。全身を鼓舞し、立ち上がる。第二第三の攻撃の予備動作が上空の至る所で見て取れた。

「優貴さん！ 頑張って下さい！！」

数メートル先で、既にナチルは玄関を開けてこちらへ呼びかけていた。

悲痛な声がその可憐な顔を歪ませる。優貴は弾丸のように全力疾走で駆け出した。

一羽が吼えた。

上空を旋回し、風に乗り渾身の意の元に真正面から飛び込んでくるのが見えた。羽を広げたその姿は翼を持つ悪魔そのものだ。右へ飛ぶか左へ飛ぶか、迫りくる絶望に対し、どちらも自分の未来が閉ざされているような悪夢に襲われる。

あと残り五歩、四歩――

二本の足でやかましく地を駆ける者と、風に乗り悠然と空を舞う者。その速度差は歴然だった。

悟ってしまった。この競争の結末を。

神海優貴の短い人生が。

終わる――

諦念は、その瞳を閉ざすことで示された。

胸糞悪い歓喜の雄叫びが前方から解き放たれ――優貴の背後へと

流れた。

真横で風が鳴いた。

頭が認識したのは、開かれた玄関と両手を伸ばしているナチル。ハゲタカが視界から消えていた。

自分の足は地に着いている。

まだ――走っていた。

駆け込む。

玄関が荒々しく閉ざされる。即座にかんぬきを下ろすナチル。

破裂するかのような心臓。両手両膝を床につき、頭を垂らして息を整える。

何が起こったのか？

恐怖のあまり体は硬直しており、一度切れた糸は簡単には戻らない。脳の命令を筋肉が受け付けず、優貴にできるのは引きつった顔で息を吸い込み、吐き出すことだけだ。呼吸をする人形。

絶叫が大気を震わせた。

体の隅々まで行き渡った恐怖が、激しいくらいに状況の認識を求めている。

人知を超えた戦慄が優貴の体を動かした。自分の命令では体は動かない。震えが、悪夢が、優貴の体を突き動かした。

無様に転びながら窓へと駆け寄る。

真正面の家。そこでは恰幅のよい中年男性がハゲタカに捕われた所だった。

瞬時に悟る。絶叫の主と、先程自分を襲ったはずのハゲタカが真横を通り抜けて行った理由を。

UFOキャッチャーのクレーンのように悪魔は、無慈悲に無造作に人を掴み、地上から空へと強制連行する。機械のそれと違うのは、連中は獲物を決して落とさないとこだ。

男性の家なのだろう、玄関は開かれていた。自分と同じように外の悪夢に視線が釘付けになって離れないであろう女性の姿があった。中年女性だ。両手で口元を覆い、泣き出しそうな瞳でその光景を凝

視している。——夫婦なのだろう。

ナチルの話した通り、ハゲタカ達は本当に建物を攻撃することはなかった。あくまで外にいる人間のみを獲物として襲っている。優貴が家に駆け込んでから数分。元々外へ出ている人の数が少なかったこともあってか、やがてハゲタカ達は一羽また一羽と空へ去って行った。当然その頃には、あれだけ不協和音を奏でていた悲鳴と絶叫は終わりを告げ、物音一つない閑散とした街の姿を取り戻している。変わらぬ外見でも、その中身の幾つかは失われているわけではあるが。

しばらく窓から視線を離せなかった。外から目を逸らすのが怖かったのだ。

やがて開きっぱなしになっていた向かいの家の玄関が閉じられる。女性の顔は見えなかった。

優貴が窓から離れるまでには更なる時間を要した。

数日が経過した。

相変わらず優貴はこの世界に居座り続けていた。毎晩夢を見る。それは予備校とバイトをただ無機質に、交互に繰り返して一日を終える浪人生の夢だ。そこまできると優貴にも仮説が立てられた。きっと、今この瞬間にも自分は現実世界で代わり映えのない日々を送っている。向こうの現実の中に自分は存在し、時も流れているのではないか。そして同時に——この世界にも自分は存在している。

どちらが夢か。どちらが現実か。

どちらも夢だ。そしてどちらも現実なのだと思う。

初日に見た巨大なクレーターの犯人はハゲタカ達らしい。他にも、森の木々を倒したり、橋を壊したり、岩山の岩石を崩したりと、たまにきては悪事を働いていく。街人は分散してそれを毎日修復に当たっているのだ。

優貴は家に閉じこもっていた。人間である自分が、彼等の仕事を手伝うことをナチルが執拗に反対したためだ。毎朝ナチルを見送り、

夕方過ぎにその帰りを出迎える。

勉強用具は当然として、本もテレビもパソコンもお店もない。暇だ。

夢の中で（現実世界の東京で）予備校に行っているのなら、おそらく……こっちの自分はそのままで念入りに勉強に取り組む必要はないのだと思う。その考え自体が怠惰に近いのかもしれないが、どのみちこの奇妙な世界で受験勉強をするというのもバカバカしく、きっと集中できないことだろう。

外には出れない。聞けばあのハゲタカ達は予告なしに現れるので、外出は控えるようにと強く念を押されたためだ。元々携帯を多用する方でもない。仕方なく、何か時間を潰せるような物はないかと家捜しを開始すると、戸棚の中に大量のA4サイズの白紙と鉛筆、消しゴムが見つかった。

本のない世界で紙と鉛筆が存在するとは意外だった。それでも多くの人が住む街であることに変わりはない。もしかしたらナチルも何らかの理由でたまに使用しているのかもしれない。

机に置く。

真っ白な紙と鉛筆が無言で自分を見つめてくる。

腕を組んだ逡巡は一瞬。

優貴は鉛筆を動かした――

そのまま没頭し、日が暮れる。

「ただいま」

「おう、お帰り」

その日もナチルは元気いっぱい、笑顔全開で玄関を開けた。すぐにその顔が呆けたものに変わる。能天気な印象が強い彼女には、その間の抜けた表情がよく似合っていてさえない。

……当然、優貴は口に出してまではいわないが。

「あれ？ 何書いているんですか、優貴さん！ お手紙ですか！？」

「何でもない」

「私、お手紙って書いたことないんですよ！ どなた宛ですか！？」

「人の話を聞け。何でもないって」

騒がしくなってきたので鉛筆を置いて片づけを始める。瞳を輝かせながら詰め寄るナチルの額を左手一本で制し、何気なく窓の外へ視線を向けた。

今日も変わらず、夕日を浴びた老若男女が満足気な顔で帰宅している。

——恐ろしいことに、仕事への行き帰りにも、たまにあのハゲタカ達が現れると聞いた。

啞然とそれを聞く優貴を前に、ナチルは口にした。それでも自分達は行くのだと。

これは使命。自分達の生きる理由。

高潔にて高尚。

それは、確固たる信念を元に自らを戒め、雪舞う中で滝に打たれるような修行僧の如き不屈の意思だ。自らの命と誇りを天秤にかけた時、果たして彼等はどちらに手を伸ばすのだろうか——

「あれ？」

優貴にしては珍しい甲高い声を前に、ナチルの額ありきの行進が止まる。

窓の外では一組の男女が歩いていた。女性の方は見覚えがある。

この家の向かい側に住む奥さんだ。苦い記憶が蘇る。つい数日前のハゲタカ襲撃時に旦那さんをなくした人である。目の前で伴侶を攫われていった時の、あの悲愴に満ちた表情は優貴には忘れられない。

その人が——

ほぼ笑みながら隣の中年男性と共に歩いている。兄弟か親戚だろうか。とても仲がよさそうに見える。

二人は、とても仲睦まじく見えた。そしてそのまま家の中へと消えて行く。

「誰だ？ あの人？」

「——ああ、お向かいさん。新しい人がきたんですね」

「新しい人？」

「はい。この間、男の方が鳥に連れ去られてしまったじゃないですか。その代わりの人です」

——心の中で得体の知れない汚らしいものが蠢くを感じた。ナチルのいった言葉が完全に理解できたわけではない。ただ、それでも、不吉な推測が無意識に組み立てられようとしていたのだ。

ナチルは笑う。

無邪気に。

「よかったですよね。あの女性の方、ここしばらく一人でしたから。またこれで二人になりました」

冷静さを装って優貴はナチルの顔を真正面から見る。

一つ、一つ、丁寧な、編み物のように。優貴は言葉を紡いでいく。「代わり、て何だ？ 連れ去られた人は、旦那さんだったんじゃないのか？」

「違います違います！ ただの同居人ですよ。あ、優貴さん。ここには夫婦や兄弟、親子はいません。皆何の縁もない人同士なんです」
錆び付いた歯車のように、ゆっくりと優貴の脳は稼動する。

——とりあえず——ああ、この家にナチルの両親と思われる人物がいないことは理解できた。

そもそも「親」が存在しない世界。
道理だ。

「じゃあ……どうやって子供が生まれるんだよ」

「子供とは少し異なりますが、家に住む住人が消えた場合、その人数分は数日中に足されることになっています。きつと、この世界を壊さないために神様がそうしているんでしょう。年齢も性別も、まったくのランダムですけど、仕事を終えて家に帰ったら、ひょっこり次の人がベッドで寝てたりします。ほら、優貴さんだって——」
開いた優貴の瞳孔が、毎日自分が眠りにつくベッドへと吸い寄せられた。

その顔の勢いに押されてナチルは思わず口を噤んでしまう。
では……なにか。つまり……

自分が眠っているあのベッドには、前の所有者がいて——その人は——いなくなったというのか？　その前にも、きっとその前にも所有者はいて、皆、消えて——

自分も——消えるのか？

恐ろしくなった。

悲劇的な惨状の舞台となった、戦争中の強制労働収容所を思った。死ぬまで働かされ、人が死んだら「代わり」の人間がまた入ってくる。その繰り返し。死のリズム。

「優貴さん……！」

身を震わせた。気がつくとなチルが自分の顔を覗き込むようにして見つめている。

「優貴さんはきつと違いますよ。人間の方ですから。私達と道は異なると思うんです！」

その美しい深緑には死人のような顔をした自分が映っていることだろう。

ナチルは優貴の心を半分しか汲み取れなかったようだ。

もう一つ、優貴には耐え難い恐れがあったのだ。

中年女性は……数日前のことなど、まるでなかったかのように振舞っていた。見せかけではない。沈痛なる心をさも気丈に見えるかのように取り繕ったような様子は見えなかった。

つまり、ハゲタカ達の襲撃は既にただの過去と化したのだ。

今のナチルの説明も淡々としていた。何のよどみもなく、まるで生徒手帳の校則を読み上げるかのように説明された。ならばおそらく、それはこの街全員の共通認識。

人が消え、生まれ、消え、生まれ、消え、生まれ、消え……

機械のように正確に、無機質に、物事が遂行していく流れ作業。そうだ。趣味も娯楽もなければ店も存在しない。

そんな世界なのだ。

この少女も——

自分が消えたら——

忘れる。

「優貴さん？　どうかしましたか??」

「あ、いや……」

怒りは沸いてこなかった。心を埋め尽くすは圧倒的な闇だ。ナチルの、ファンタジー小説の登場人物のような可愛い顔が、急に魔性をおびた魔女に見えてくるようで思わず目を逸らす。

少女は自分を憂いていた。苦し紛れに優貴は何か話題を探す。さも軽快そうに声を出した。

「そういえばさ！　今週もまた行くのか？　ピクニック」

「はい！　勿論です!!」

今度は目を合わせられた。元気な返事、いつもの温かな空気が戻ってきた。優貴は安堵に包まれる。

「前の人は、結局最後まで一度も一緒にお出かけしてくれませんでしたけど、私、やっぱり休日は外に出た方がいいと思うんです！」

自然は綺麗ですし、あ！　鳥がきても狭い場所に隠れさえすればきつと平気ですから！　だからまた行きましょうね優貴さん!!」

仏像のように両手を合わせ、体全身から興奮を醸し意気揚々と自分を誘うナチル。

こんな風に。

話すらしい。

——「前の人」のことを。

ナチルはあの日のピクニックを思い出したのか、楽しそうに笑っていた。

初めてその笑顔が怖いと思った。

子供の教育だ。命は蘇らない。だから尊い。物は壊れたら元通りにはならない。だから悲しい。

ナチルは変なヤツだ。

自然への愛情が伝わってくるとき、いつだって彼女は輝いていたように思う。

街人を変える、などと大それたことをいうつもりはない。ただ：優貴は悲しく、そして寂しかったのだ。あのような無邪気な笑顔を広げた子が、喪失と悲哀の心を理解してくれないことに。

目の前で震えている少女を、自分は友達として好きになりかけているのかもしれない。

「あの、優貴さん！ 私痛いのは嫌です……」

その時、水筒以外の物がナチルの腕に収まっていることに注意を引かれた。窓際に置かれていたはずの群青色の円柱型花瓶が二つ。しかし、その口から咲き誇っていたはずの花々は見ると影もなく萎れている。水分も養分も根こそぎ失われ、枯れ木を思わせるような色となって俯いていた。

「あれ？ それって……」

「ひゃあああああ！！！！ よ、寄らないで下さい！！ やめてー
ーーーーー！！！！」

「ああうるさいな！ お前じゃない！！ 花瓶だ花瓶！！」

ささやかな復讐のためにあえて無視していたのが裏目に出てしまい、ナチルを落ち着かせるのに無意味な時間と労力を費やすはめとなった。息を荒げるような、しかし価値のない攻防を繰り返した後、ようやくナチルは語る。

「理由はよく分からないんです。私、この家にきて長いですけど、お花が枯れてしまうなんて初めてです。……可哀想ですけど、ピクニックの途中に花だけ捨ててこようかと」

「ん……そうか」

日頃優しそうに自然を愛でているとはいっても、さすがに花の一つ二つでは、残念ながら彼女の心に大きな隆起を起こすには至らな

いようだ。ナチルは少し残念そうな顔をしているが……あくまでその程度らしい。

天啓が脳で閃いた。

昨日の段階である程度の作戦は練っていた。だがそこに、思わぬアイテムが転がり込んできてくれたおかげで、よりその作戦が膨れ上がった。

散ってしまった花達には申し訳ないが、おかげで、もしかしたらナチルに大切なものを一つプレゼントできるかもしれない。

「よし！　じゃあナチル、ピクニックに行くか！」

「はい！」

依然として世界への恐れは心にこびりついている。

だがそれだけの感情に身を任せるつもりはない。怖いことも楽しいこともある。それは自分が生まれた世界でも同じことだ。

先週よりも更にワクワク感が募ってきている。この世界に楽しみが見当たらないのなら、自分で作ってしまえばよかったのだ。

あっぱれ、と言葉を送りたいほどの青空。やはり少し暑い。天気予報ならびにナチル予報では、鳥の襲撃はしばらくないらしい。連中の頻度は二週間に一度あるかどうか。最も、恐ろしいことに優貴の前を歩く少女は鳥注意報であろうが鳥警報であろうが、それでもピクニックを強行するといいい放った。

「だって、せっかくの休日をもったいないじゃないですか！　それに凄く綺麗なんですよ！？」　あの森の中で息づく自然は！　優貴さんも先週見ましたよね！」

「……だからあの襲撃時にもあれだけ冷静だったのか。慣れてるな、お前……」

朽ちた花は腐葉土の上に並べられた。今度はこれが良土の養分となり他の花々の成長の手助けとなるのだろう。生命の、自然の循環である。ナチルは少し眉を落とし、花瓶の住人達にお別れを告げていた。

丘まで行き、水を飲んで寝転ぶ。

その帰り。きれー、きれー、と耳にタコができるほど相方の叫びを聞き、いい加減げんなりしてきた頃、優貴は携帯で時計を確認して満足気にほくそ笑む。二人は街まで戻ってきていた。時刻は先週とほとんど同じ。

いた。

今度は優貴の方から彼等を見つけることができた。

予想通り、先週ばったり出会った時と同じ場所でジェン、シスと顔を合わせる。

「よ」

「やあ」

「……」

片手をあげて挨拶する優貴に、一人は端的に言葉を返し、もう一人はやはり無言で眼差しを寄せる。シスが足早に近づいてきたので、優貴は頬を守るため両手で彼女を牽制した。

「あー、こんにちわー。ジェンさんと、シスさんです！」

「ナチル。悪いんだが先に帰っていてくれ」

「はい？」

「俺は今からジェンと内緒話をしなくちゃならない。誰にも聞かれるわけにはいかないんだ」

やや遅れて登場したナチルに退場を促す。作戦の概要を知られては元も子もない。

「そうなんですか？ ……分かりました、だったら私先に戻っていただきますね！ 優貴さん、後で私にもお話教えて下さいね！！」

優貴のいった言葉が伝わったのか伝わっていないのか、何にせよ特に気分を害するわけでもなく素直にこの場を離れてくれたことに胸を撫で下ろした。

ジェンはただ一人、去っていくナチルの後姿を無表情で見つめている。

ゾンビのように手を伸ばして近づいてくるシスを防ぎながら優貴

はいった。

「ナチルのことが好きなんだろう？ ジェン」

「ん？ 嫌いではないね」

「小学生みたいな避け方するなよ。好きなんだろう？ いつも目で追ってるじゃないか」

「……実は自分でもよく分からない。どうしてあの子を見たがるのか」

——苦しみを与える。

ナチルに恋人ができればいいのだ。優貴はその相手にジェンを選んでいた。そして、もしも……二人が結ばれたとしたら、そこから先の道は喜怒哀楽で埋め尽くされた感情の橋を渡らざるをえない。二人は喧嘩を繰り返すだろう。ナチルは泣く時もあるかもしれない。そして長いトンネルを潜り抜けた時にはお互いが尊い存在となり得ているのではないだろうか。

ナチルのこともジェンのことも、まだそこまで深く理解しているわけではない。それでもこの二人なら、上手くいきそうな気がしてならない。

「実はナチルは今困っている。花瓶に生けてた花が二つも枯れちゃってさ。で、だ。ジェン、あいつが喜びそうな綺麗——な花を取ってきてほしい。そうすればもっとナチルと近づけるぞ」

「すまん、もう少ししたら、今日はもう眠ろうと思っているんだ」
「まだ三時にもなってないだろうが！ よく考えろって！ あいつと仲よくなれば、もっと近くで、ずっとあいつの顔を見ることもできるんだぞ！？」

そこまでいって、ようやくジェンが何やら考え始めた。優貴にも何となしに分かっていた。きっとこの世界の人々は恋を知らない。子供が必要ないなら夫婦も必要ない。だから……恋を覚える必要もなかったのかもしれない。

「……分かった。綺麗な花だな」

「やってくれるか！ できれば今日中に頼みたいんだ。ナチルのこ

とだから、きつとすぐに新しい花を持ってきたと思う。家は分かるよな？　夜遅くなってもいいから、是非きてくれイイ!？」
針で刺されたような痛み。一瞬頭に生じたそれは、口を通じて言葉となって飛び出る。

……防御を掻い潜り、シスが優貴の髪の毛を引っかいた瞬間だった。

「こら、いい加減にするんだ。困っているじゃないか」

ジェンの、やや語気を強めた注意も何のその、茶と黒が同等の比率で混じったそれを、シスはまじまじと見つめた後に何を思ったのか、躊躇いなく口の中に入れてしまった。

「おい!!」

思わず突っ込む優貴の前で、まるで飴玉の味を噛み締めるかのように、シスは閉じた口の中で舌を動かしている。その結果に満足したのか、やがてその小さい喉が震えた。――嚥下したのだろう。

残ったのは大きな青い瞳と閉じられた桃色の唇。呆然としている優貴を不思議に思ったのか、小首を傾げられる。自らの行動に何の疑問も抱いてないことは明白だった。

「……いいや……もう。そうだよな、髪の毛食べるのが普通の文化なんだよな、ここ。そうしておこう」

疲労のない世界で、どっと疲れが押し寄せてきたような錯覚。優貴はジェンに別れを告げると踵を返そうとし――その背中に声がかかったので振り返る。

「あ。そういえば、君はもうこないのか？　仕事。結構皆気にしているようだったぞ」

「ナチルに止められているんだよ。あいつあれで結構頑固だからさ。逆らえない」

当初と比べると、奇異の視線は少しずつ薄れてきていた。だからこそ尚更、皆と同じことを毎日繰り返し、自分という存在を受け入れてもらおうと考えていたのだが……相変わらずナチルは、人である自分が働くのをよしとしなかったのだ。

のんびりいこうと思った。

どうせ時間は腐るほどあるのだ。

ナチルとジエンの恋を見守り、いずれは他の街人とも会話を
して親睦を図っていききたい。

その頃には帰る方法の手掛かりも掴めているのではないだろうか。
——後悔はすぐにやってきた。

「どうしたんですか優貴さん？　ずっとそわそわしていますけど……
：何だか変な人みたいで——あ、痛いッ！」

ベッドで眠る体勢を取っていたナチルまで歩いて行きデコピンを
食らわす。……手加減はしてある。

既に日は落ちた。

この家に、この街に「明かり」などという上等な物はない。強い
というならば天に浮かぶお月様くらいなものだ。よって家の中は薄
暗く、目をこらさなくてはお互いの顔が確認できないほど、既に暗
がりはその幅を利かせていた。

いうまでもなく優貴はジエンをずっと待っているのだが、未だ玄
関は静まり返っている。きっと、どんな花を選べばいいのか苦労し
ているのだろう。

お節介かもしれないが、やっぱりジエンはナチルのことが好きな
のだと思う。そして、大袈裟かもしれないが今頃、生きてきた中で
一番頭を悩ませているのかもしれない。優貴は決めていた。たとえ
どれだけ小さく汚い花を持ってこようとも、それだけ心がこもって
いるのなら自分が徹底的にフォローをして認めてやろうと。ナチル
とてジエンは嫌いでないはずだ。顔見知りで仲もいい。

「あれ？　今何か聞こえませんでしたか？」

最初にそれに気がついたのはナチルの方だった。優貴は椅子から
立ち上がる。拍子に膝を机に打ちつけたが問題ない。玄関まで駆け
寄ろうとして——

全身に鳥肌が立つのを感じた。

悪夢が這い上がる。あの日自分の心を殺した恐怖が再び鎌首をもたげる。

嗤う。

大空を我が物顔で跋扈し、矮小で小さい人間達を。

胸を掻き毟りたくなるような不快な金切り声が大気を突き抜けた。

「何で……？」

ナチルの予報では——ああ、仕方ない。日本の天気予報だってしよっちゅう外れている。

ハゲタカ達の声が近づいてくる。

まるで昔話だ。丑三つ時、街中を行く百鬼夜行。決して窓を開けてはならない。決して目を向けてはならない。亡者の鳴き声がしゅうとも、物の怪が吠えようとも、布団を被って外の行進が終わるまで震えていなければならない。

大丈夫だ。家の中にいれば安全であると——

「おかしいですね。この時間に外を出歩く人なんていないはずなのに。ハゲタカ達は誰を追っているんでしょうか？？」

金槌で思い切り頭を叩かれたようだった。

一瞬視界がぼやける。気が遠くなりかけた。

自分は——昼間——彼に——何といった？

追っている。ハゲタカ達は誰かを追っている。

そして近づいてくる。ハゲタカの腐った声が近づいてくる。

「優貴さん！！？」

布団の中に隠れている場合ではない！ 怯えて縮こまっている場合ではない！

誰の——誰の言葉を受けて、その男は夜の街を駆けているのか！！
ナチルの制止を振り切り、かんぬきを開けて乱暴にドアを開け放った。

押し寄せる腐臭。

そして——

闇の中に断続的に鳴り響く人の荒い吐息と乾いた足音。

近づいてくる。

無数の死神をその空に舞わせ、一目散にこの家に向かって駆けてくる男が一人。

「ジェン！！！」

きたのだ。遂に。

夜も更け、ナチルのために時間をかけて花を選び、きっと無意識に彼女の笑顔を求め、喜んでほしくて——ただ一人の女のために全身全霊を費やして——！

ナチルは——背後からそれを見ていた。

全力で駆けてくるジェンの姿を。よく見るとその手には、紙で巻かれた色とりどりの花束が握られている。優貴は恐怖と焦りに気圧されそうになりながらも、かろうじて冷静さを保ち続ける。自分がけしかけたのだ。見届けなくてどうするのか！

まさにここはファンタジー。

怪物に追われながらも、王女のために危険な橋を駆ける勇者のよう。

その苦労は必ず報われる。

いや、報われなくてはならない。

ジェンの姿が迫る。相変わらず表情はない。残りは十メートル足らずか。ハゲタカ達との距離も、僅かとはいえど引き離している。

優貴は玄関から一步身を引く。

ジェンは駆け込み、そしてナチルに花束を贈るのだ。

本当に……何という男だろう。あのような怪物に追われながらも、ここまで駆け抜けたのだ。

そして、死のレースの勝者がゴールテープを切る瞬間——

ナチルが目の前で勢いよくドアを閉ざし、即座にかんぬきをかけた。

……

……

……え？

時が凍りつく。

扉一枚隔てた向こう側で怪物達が吼えている。

一羽、二羽、三羽……。ハゲタカ達の宴。たった一人の獲物を皆で奪い合っているのだろうか。

体が動かなかった。心は深い海の底に沈んでいくかのように徐々に光を閉ざす。頭には耳障りな鳴き声だけが飛び込み、一層に掻き混ぜられる。

停止する。

停止する。動けない。

ロボットの真似事をしているうちに外からは潮が引くように物音が遠ざかっていった。

鳥が鳴く。

遠くで鳴いている。

それは、もはや——獲物がこの近辺から消えたことを意味している。

何を冷静に思っているのか。

自分は馬鹿だ。

金縛りが解けたかのように、ふいに行動機能が系統を取り戻した。かんぬきを開き、玄関を乱暴に開ける。

そこには一片の肉片すらなかった。全てを丸ごと持っていかれた。服の欠片さえ見えない。

優貴は知る。理解する。

この街から。この世界から。一人の男が存在を消されたことを。

——その時。

街灯一つない道の真ん中に、場違いな鮮やかな色が落ちているのが目に留まり、駆け寄る。

花だった。

花の残骸だった。

踏まれ、弾かれ、引き千切られ、濃厚な瘴気を浴びて物悲しげに散った花々達。

優貴は見る。看取る。

ジエンが時間をかけ、ナチルのために集めたであろうその結晶達を。

——白と橙色の花びらからは微かに甘酸っぱい香りが漂っていた。

「あ……花、ですか？」

いつの間に背後にきていたのか。

いつもより低い声で、遠慮がちに少女は口にした。

「……残念でしたね」

崩壊した。

理性が、ココロが、神海優貴が壊れた。

「残念でした……じゃねエエエエエエエエ……！！！！！！」

首根っこを右手で握り締める。

そのまま押し潰すように頭ごと地面に叩きつけた。

花の香りが舞った。

「——ああッッ！！？」

息が詰まり、息が吸えず、ナチルは眼球が飛び出そうなくらいに目を見開き、喉を詰まらせて喘ぐ。言葉は口にできない。両足をバタつかせ、首を締めつける優貴の右腕に力なき両腕が重ねられた。

「何やってんだよ！！ 何やってんだよお前！！！！」

本当は自分を罵るつもりだった。家の中で感じていたのは重すぎる悔恨。自分がジエンに発破をかけた。夜遅くになってもいいからこいと告げた。ハゲタカ達にジエンが追われていると気づいた時、元凶となった自分を抹消したい衝動にさえ駆られていた。

それよりも優先すべき怒りが存在してしまった。

罪の意識を一瞬にして消し去ってしまえるほどの激昂。

獣のように猛り、甘美なる熱に意識を任せ、少女を見るも無残に砕いてしまいたい欲求。

業だ。

優貴の中に、いつの間にかあの得体の知れない殺意が忍び込み、舵を取り始めていた。名称を持たないその暗黒が、内なる自分の欲

求を発散してくれる。言い訳などいくらでもできる。悪魔に支配された、そういうえば誰にでも通じる。

激情は狂気に塗り替えられていく。

人も悪魔も全会一致で意見が統一している。

今なら——殺せる。誰も反対する者はいない。

ナチルがまな板の上に乗せられた鯉のように跳ね——
ひとひら。

それは雪のように、そつと優貴の鼻の上に落ちた。

たったそれだけで熱なる脈動が止まる。

花びらだ。

——そんな瑣末な欠片に意識が向いたということは、もはや自分に自分が戻ってきたということ。

マジシャンが、杖を一振りするだけで観客の度肝を抜き、あつといわせるように——

一枚の白い欠片は、稚拙な舞い一差しで優貴の心をぎ止め、その色に染め上げた。

手を離す。

咳き込む音が地面から聞こえるが、優貴はそれには目もくれず空を見上げていた。

「……俺を口説いてどうするんだよ、バカヤロウ」

月明かりが照らすのは二つの影。しばらく待ったが、もう花びらは落ちてこなかった。ナチルの苦しげな咳も、段々と収まってくる。

頃合を見計らって優貴は口にした。無感情に。色々な意味でナチルの表情を見たくなかったので夜空を見上げたまま。ただしかし——まだ謝罪を口にする気にはなれない。

「……仮にナチルが追われていたとして、やっぱりジエンも同じようにドアを閉ざしたのかな？」

「……はい。おそらく……」

即答しなかったのは、もしかしたらナチルの自分への気遣いだったのかもしれない。意図的な間を置いてだろう、彼女は漏らした。

「ジェンが——死んで、悲しいか？」

はつきりとその単語を舌の上に乗せる。取り繕ったりするのは性に合わず、何よりナチルに対し現実を確認させたかったのだ。

「ん……悲しいというより……残念です……」

視線を落とす。ナチルは——

嘘をついてはいなかった。

泣いてはいない。苦しんでもいない。

辛そうだった。

眉を落とし、目を細め、いつもの半分の元気で、静かに、寂しく、佇む。

「あの……ごめんなさい」

お下げが垂れる。何に対しての謝罪かは分かっていた。そして、謝られる筋合いもないことに。

ならば自分は怒る筋合いもなかったのかもしれない。首を絞めるなど持っての他だ。

一人だけ異なるルールで歩いている。世界を侵しているのは自分なのだろう。

「そういうモンなんだろ。……なら仕方ないさ。無理やり悲しめななんていわない。俺こそ悪かった。どう考えてもやり過ぎたよ」

「……ごめんなさい。何ていえばいいのか、分からなくて」

ナチルは……ただ困っていた。

自分の零した一言で優貴が怒り狂ったのを知り、どの状況でどんな顔をし、何と言葉を発せばいいのか分からなくなってしまったのだらう。そんなことは考えて行うものではない。だが有りのまま行った結果が「不正解」とあらば、考えざるを得ない。

それでも、首を絞めた自分に対し恐れより謝罪が出る所は、やはり地なのだろう。

ナチルに対しての怒りはもう湧き起こらなかった。

彼等は道一つ踏み外していない。

唆したのは自分だ。ジェンを間接的に殺したのは自分なのだ。

「これ、花瓶の中でまだ生けることってできるか？」

全ての花が駄目になったわけではなかった。よく見ると、茎も花も綺麗に残っているものが、片手で数える程度ではあるが紙束の中に残っていることに気づき、ナチルに見せる。

「はい。これなら……うん、大丈夫です」

「これ、さ。もう分かっていると思うけど、ジエンがナチルのために集めたものなんだ。貰ってやってくれないか？」

「はい」

そつと、包み込むようにナチルは数本の茎を受け取った。白と橙色の花々が、この残酷理不尽なる世界でより一層輝いて見えた。彼女は慈しむようにそつと彼等を撫でた。

「ありがとうございます。……ジエンさん」

……喪失。

涼しい夜風を浴びて、頭が冴え渡っていく。何もない。心に穴がぽっかり開いたような気分。

この場をどう締めよう。

明日からどんな顔をして過ごせばいい？

ナチルも自分への接し方が分からなくなっていることだろう。虚無感の子供じみた、ご都合主義の考えを運んでくる。

元の世界に帰った方がいい。

結局自分は一人で空回りしてただけだった。自分がジエンを殺したようなものなのだ。

ナチルはそのことに気づいているのか気づいていないのか、何もいってこない。罵詈雑言を受けて自分を罵ってもらいたい。

償う術も知らない。

何もできない。

彼等は誰よりも厳格なる教徒達だ。食の制限、婚儀の制限どころではない。永遠と続く一本道を疑問に思うことなく歩き、その道が崖下に通じていると知ったら迷わず飛び降りる。ここでは命はシャボン玉のように軽い。

異文化にもほどがある。

「……ナチル。笑え。不謹慎だなんて思わなくていいから全力で笑え。ジエンは絶対、お前が無表情でいるより笑っている方を望むはずだ」

ナチルに笑顔の手本をお願いする。彼女が戸惑っているのは百も承知だ。何しろ言葉と感情を間違えただけで首を絞められたのだから。……思えば、それすらも彼女は深く突っ込んでこない。

「ゆ……優貴さん！ 優貴さんから……笑ってくれませんか？ 私、それを真似します！」

「俺が笑えないからお前に頼んでいるんだよ。俺がお前を真似したいんだ。いつもみたいに頼む」

——どうやら、両者共に笑顔を手にするには時間がかかるらしい。腹立たしさとやり切れなさで無念さを噛み締めて、優貴は大の字に寝転び、無様な体たらくを晒した。勝手に一人で盛り上がり、勝手に一人で盛り下がる。救いようのない自分。

何かが落ちた。

土の上にバウンドして固い音を立てる。

そちらへ意識を向ける前に、ナチルが拾い上げた。

日本では一人一台は持つ、いわば自分の分身。中身を見れば、大体人となりが分かる機械。

銀のボディで形作られた携帯電話だ。

「落ちましたよ？ 優貴さん」

「んー」

「あ……」

夢心地に呆けていた優貴は、ナチルの空気が止まったことに気づくのが遅れる。待てども自分に携帯が戻らず、ようやく疑問を覚えてナチルの方へと気だるげに振り向いた。

彼女は開かれた携帯を凝視していた。喜びでも驚きでもなく、まるで初めて未知なるものに遭遇してしまい、そこに抱く感情を持ち合わせていないかのように。

優貴に——ようやく活力が戻りだす。開かれた携帯に映る絵を自分だけは知っている。

「おい、ちょっと！返せって！！」

「……優貴さん……」

——遅かった。

見られてしまった。

ナチルは笑った。芽吹いた元気いっぱいの一輪の花。よどみなく、一片の曇りもなく、純真にて無垢な温かな笑顔。その元となる物が、彼女の手の中に握られているのだから小恥ずかしい。

「優貴さんは、こんな風に笑うんですね！！」

狭い画面の中には、ぎゅうぎゅうに詰め込まれた六人の顔があった。

男女三人ずつ。

自分の——

押し合いへし合いし、潰れかけたその顔はナチルに負けないくらいの喜色満面。

この数ヶ月間で自分が一度も形成していない顔。

皮肉にもほどがある。

本当に別世界の自分を見ているようだった。

「私、優貴さんの笑顔を初めて見ました！私はよく笑うし、変わっている、ていわれるんですけど……今はちょっと誇らしくなりました。だって優貴さんのこの顔、見ていると気持ちいいんですもん！やっぱり笑顔っていいですね！！」

——罪悪感がまた一つ。

確かに、ついさっき笑えとはいった。不謹慎だろうが何だろうが笑顔になれ、と。

それでもここまで全力で破顔されると、いきすぎたようで逆にジエンに申し訳ない気がする。

心が空っぽになってしまったせいだろうか、ナチルの笑顔がいつも以上に美しく見えてしまう。殺風景な部屋に花が次々と届き、押

し込められていく。

恥ずかしいものを見られた、などと思っているのはきっと自分だけだ。

上体を起こす。

暗い部屋で閉じこもる人間にとって、眩しい光は直視し辛い。

「あ痛ッ!？」

だからとりあえずデコピンを食らわした。……強度は中だ。

「何するんですか、優貴さん! ……あ……やっぱりまだ……怒……」

「どうしていつの間にか、俺がお前に慰められているんだよ。……行こうぜ。戻ろう」

ナチルの顔が沈み込んでいこうとしたので、慌てて吊り上げた。どこまでが素で、どの程度までこちらの心情を把握しているのか分からないが、それでもナチルは自分とジエンの為を思ってくれていることは何となしに感じる。

「は、はい! そうだ、これお返ししますね」

差し出された携帯は、この世界に似つかわしくない輝きを宿している。

優貴は——逡巡し、ナチルはそれを不思議そうに眺める。

「あげる。もう必要ないし、その……さっきは悪かった。俺、これくらいしか持つてる物ないから」

「えええええ!!? 駄目ですよ、これ携帯電話ですよね!? ……とても大切な物ですよね!？」

「いいよ別に。どうせこっちじゃ電波も何もないし、俺、元々そんなに携帯使わないし」

後ろ向きな理由から携帯を手放すのではない。

単に——

「では……遠慮なく頂いちゃいますね!! ……ありがとうございます、優貴さん!!」

無機質な銀の輝きより、もっと綺麗なものが見たかったただけだ。

「宝物にします！ 優貴さん、凄く楽しそうに笑っています！ 毎日見ますね！！」

「いや、見るなよ……」

はしゃぐナチルは玩具を買ってもらった子供のようなだ。優貴は、ようやく自分の口元が少し柔らかくなるのを感じていた。

風が吹いて、地面に散った花びらが空へと舞い上がっていく。目を細めて昇天を見守る。

人差し指一本で、慎重に携帯のボタンを操作していたナチルも手を止めてそれを見守った。

花吹雪く。

誰からの贈り物かはいうまでもない。

だから優貴は家へ向かってのんびりと歩き出した。僅かな時間だけの黙祷を薄情とも思わなかった。

いつかあの世で会えたら土下座しよう。

本当ならこんな軽やかな気持ちになってはいけないのだろう。

その答えを先回りするかのように穏やかな風が吹く。

背中を押された。

ならば自分にできることは――

隣にいる少女の輝きを曇らせないようにすることだけ。

「優貴さん！ この……えっと、つきな、いくこって誰ですか！？

一番最初に登録――痛いっ！！」

大のデコピンを放つ。

……早速、その笑顔を消すこととなってしまうたがこればかりは仕方ない。

花達は夜空の彼方へと消えていった――

第五話

夢を見る。

毎晩毎晩繰り返される。

勉強とバイトを軸とした自分の生活。新聞を見てテレビを見て終わる一日。

大きなニュースはないようだった。いつもの日常。

高速道路の玉突き事故で三人が亡くなったらしい。

それはいつもの有り触れた記事。

テレビ内では遺族が泣き崩れていた。

死者と悲しみ。

こちらでは記事にもニュースにもなることはない――

咳をするナチルに気づいたのは、ジエンの件があってから数日経つてのことだった。

どうやったら元の世界に戻れるのか、ぼんやりとそんなことを考えつつ、同時に白紙に文字を綴っていく毎日を送っていた日々の中の出来事だ。

「寝てればいいじゃないか」

「大丈夫です！ 別に体が重いわけではないんです。だから行かせて下さい！」

この奇妙な共同生活にもすっかり慣れてしまった。当初感じていた浮遊感のようなものは今では一切消え去り、地に足がつくように馴染んでいる。

ナチルを見送った後、考えるべき事柄が一つ増えてしまった。

殺意についてだ。

ピクニックの丘で、ハゲタカ達の去った夜の街で、優貴は二度に渡り、言い様のないどす黒い感情にとらわれてしまったことを思い出す。あの夜の件で、それはナチルにも気づかれてしまったのでは

ないだろうか。彼女の喉に食い込んだ指の力は、脅しや怒りの範疇を明らかに越えていた。

神様がここへ優貴さんと呼んだのですよ。

彼女らしいいい方だ。

自分は一体何のためにこの世界に落とされたのか。いつまでもこのままというわけにはいかない。殺意は徐々に膨れ上がっているような気がした。あの夜はジェンのこともあったが、それを差っ引いても異常なる激情に自分は包まれた。

もしあのまま勢いに任せてナチルを――

頭を振る。本当ならもっと焦らなくてはならないのかもしれない。取り返しのつかないことが起こる前に、自分の成すべきことを行い、元の世界に帰るべきだ。

好きになりかけている世界だからこそ、一定のラインで自分は身を引かなくてはならないのだ。

――翌日、変化は自分だけに起きているのではないことを知る。

いつもの朝。ナチルが家を出る前の時間にその異変は起きた。

「あれ?? 誰でしょう」

早朝。控え目なノックが玄関から発せられる。優貴がこちらの世界にきて、この家のドアがノックされるなど初めてのことだった。

「凄い! こんな初めてのことで……コ——ホッ!」

「あー、俺出るから」

「いえいえ、私が出ますから!」

相変わらず軽い咳を繰り返すナチルは、問答を繰り返す前に玄関まで駆けて行くと、かんぬきを外して元気な声と共に玄関を開いた。朝日は差し込まれなかった。

七人ほどの男女が、光を遮って外に立っていたのだ。

ナチルに挨拶を交わし、うち何人かが家の中にいる優貴に視線を寄せた。

……何だろう?

「ああ、すまないね朝早くに」

「いえいえ！ どうしたんですか皆さん？ これから私もお仕事に行く所でしたけど」

代表格と思われるその老人は優貴にも見覚えがあった。横には、髭で頬が覆われた大柄な男が。他にも、ナチル以上に細い腕をした華奢な若い女性……。初日、強引に仕事に参加した時に見かけた顔ぶれだった。随分前のことであるとはいえ、印象的な街人だけは優貴の記憶にも僅かに残っている。ナチルの属するグループ、仕事仲間が皆一様にして搾り出したような笑みと、繕ったような困惑を浮かべ、何ともいえない表情を顔に張り付けている。

どことなく気持ちの悪い顔。生理的な拒否反応を優貴は覚えていた。

ナチルは——影差す玄関において、当たり前のように輝いている。

「今日の仕事なんだけどね……。その……。そちらの方にもきてもらうわけにはいかないかな」

「優貴さんですか？？」

——自分の名前など街人は知る由もないだろうが、それだけでも伝わったようだ。

「うん。……。昨日の仕事もまだ残っているのに、どうやら更にまた穴が増えたようなんだ。……。勿論、本来なら私達だけで行わなくてはならない仕事だけど、聞けば、そちらの方はずっと家に籠り切りと聞いているよ。だから、いつか見せてくれたような、人間さんのあの手際の下さがあれば、私達としても非常に助かるんだがね……」

構わなかった。卑屈に感じる彼等の態度と、あまり好感を覚えることのできない表情はともかく、優貴としても本当ならば書き物よりも皆と一緒に仕事をしたかったのだ。

「駄目ですよ。この仕事は、私達が私達であるためのお仕事じゃないですか。それを人間の方にやってもらうなんておかしいです。確かにちょっと大変ですけど、それを皆で協力して埋めていくことに私達の、この世界における存在意義があるんですから」

「いや、誤解しないでくれ。私達とて仕事は楽しい。本当にやりがいもあるし、毎日穴を埋め続けることは決して苦痛ではない。君と同じ、喜びを感じている。それでも、だ」

わざとらしい咳払いをし、老人は眩しいものから目を背ける様に視線を逸らした。

「その方が手伝ってくれたあの日は仕事も皆早く終わることができてね。その……仕事後に皆、じっくり過ごすこともできた。決して楽をしようとしているわけじゃないが、早く終わった分、私達も翌日の仕事に精力をより出すことができた。だから……もしその方が時間を持て余しているようなら、私達と一緒に――」

「駄目ですよ！ どうしてそんなことをいうのですか!？」

優貴が返答を彼等に告げる前に、ナチルが一蹴した。

珍しく見せるその熱を前に、優貴は開きかけた口を閉ざす。彼女がいわんとしていることは、どうやら自分を氣遣うだけでなく別の意味も含んでいることを察したからだ。

迫力に押されてか、街人達にもたじろぎの波が起こる。

「皆さんの仰っていることは正しいけど間違っていますよ！ 何だか、ちよつと目的がズレてしまっているじゃないですか。一日働いてぐっすり眠って、翌日また働いて。……それでいいじゃないですか。どうして楽をしようとするんですか？」

……そう。結局はそこに集約されるのだろう。優貴も人のことはいえた義理ではないが、彼等はただ楽をしたいだけなのだ。彼等とて本心では分かっているのだろう。どろどろした雰囲気は心の鏡だ。この世界の神様は、彼等が誘惑に惑わされることがないようにと、趣味と娯楽を街人に与えなかったのかもしれない。

「優貴さんがどうの、といった問題じゃありません。ずるいですよ。そんないい方は。これは私達の、ここに生まれ落ちた者同士の問題です」

それきり攻防が覆ることはなかった。

ナチルの真っ白な正当性は、街人達の灰色のこじつけを染め上げ

ていく。

彼等は無念の表情で散って行き、静かになった後、ナチルは優貴に申し訳なさそうに一礼をするとやがて仕事に向かった。

でも――

何かが変わり始めていた。

たった一滴落ちた滴が地盤の色に染まろうとも、決してその成分が消えることのないように。比率が一对百で他のものに塗り潰されようとも、人の目の見えない、針の穴よりも小さな空間で確かにそれが息づいているように。

その日の仕事はいつもよりやや遅くに終わったようだ。

ナチルは満足気に玄関を開けて、ただいまを告げた――

翌日、懲りもせずに街人が早朝の玄関に訪れる。人数が昨日よりも増えていた。優貴の記憶によれば、確か三十人ほどのチームだったはずである。既にその三分の一以上の数がそこには揃っていたのだ。

それでもいくら頭数を揃えようと家の入り口は一つ。対話するのは昨日の老人のみ。

結局その日も彼等は結果を変えることができずに去って行く。

曇った空だった。彼等の背中が妙に空の色に似合っていた。

その日、いつもの帰宅時間、窓を見ると一日の労働を終えてどことなく満ち足りた老若男女が帰路についている。更に時間がたち、昨日と同じ時間になってもまだナチルは戻ってこなかった。

玄関のドアが開いたのは、空から光が完全に消えてしばらく経ってからだった。

「ただいまー」

「おう」

いつものようにナチルは笑顔と共に帰宅した。

だが優貴とて馬鹿ではない。

笑顔こそは本物だが、周りにまわりついているきな臭い雰囲気を感じ取る。

その日は机の上の白紙はほとんど埋まらなかった。
眠る前。

隣のベッドから聞こえた咳は、いつも以上に印象的に耳に残る。
おかげで決意が一つ固まった。

「今日は俺も行く」

「はい？」

夢を振り払い、目覚め一番に優貴はいい放つ。

……もしかしたら喧嘩になるかもしれない。それくらいの覚悟を
携えての一言だった。

「あの……え？ ……あの……駄目に決まっているじゃないですか
！」

「大丈夫だよ。一人くらい増えたって何も問題ないだろう？」

「優貴さん……昨日一昨日の、私の言葉、聞いていましたよね？」

勿論だった。ついでに、ナチルが街人相手に断固として譲らない
粘り強さも知っている。いつものおちゃらけた態度が彼女から消え
た。優貴もそれに倣う。

「どうして昨日一昨日と、帰るのが遅いんだ？」

まるで娘にいい聞かせる父親のようだ。内心で自分の台詞をせせ
ら笑う。本来ならば自分如きにこのようなことを突っ込まれるいわ
れはナチルにはないのだから。

それでも。馬鹿正直に彼女は答えてくれた。

「ちよっと仕事が長引いているだけです」

「皆と上手くやれているのか？」

「……はい」

とことん馬鹿正直だった。

丘を駆け抜け、高大から飛び跳ね、空を仰ぎ、太陽に叫ぶ。

そんな少女が欲に塗れた人間社会でつく嘘は、採点されたテスト
の赤いバツ印のようによく映る。赤点もいい所だ。

笑っててほしかった。

しよげた唇と泣き出しそうな目、蚊の鳴くような声でつかれる嘘

は、指摘する方が心が痛む。

ナチルの志を思うために見て見ぬフリを続けてきたが、これ以上続けると今度は優貴の志（と呼ぶほど大層なものでもないが）がどうにかなくなってしまふ。

何もいわなかった。

優貴は猛る心を抑え、開きたくて仕方ない口を、氣力を振り絞って閉ざす。

どのみち口喧嘩でナチルを制しようなど思っていない。

外は——雨だ。

今日は来客はなかった。逆にそれが優貴の心を不安に駆り立てていた。彼等が納得をしてくれたとは到底思えない。何かが……自分の知らない所で一步前進してしまったような、煙のように掴み所のない不安が心を圧迫していく。

驚いたことに傘を差す風習はこちらにはないようだ。雨合羽もない。

窓から見るナチルの後姿は精彩を欠く。雨の滴が金の髪を掻き消していくようだ。見ると、ナチルだけでなく街人皆が当たり前のように濡れながら「出勤」していた。

咳をしている者の行動とは思えない。

数時間の後に玄関を開けた。

悪いとは思っている。一端の大人ならば相手を尊重し、もっと上手なやり方を取れるのだろう。

だが我慢も限界がきている。非常に自己中心的ではあるが、誰かを助けることに間違いがあるとも思いたくない。

平日に外の空気を吸うのは最初の日以来だ。どこことなく、よどんだ空気。

地面はぬかるんでおり、閑静な街並により一層の寒々とした印象を植えつけていた。控え目に降り注ぐ雨は不思議と冷たさを感じない。風邪を引かないことを願う。

優貴は歩き出した。

ナチルの頑固さは既に知っている。自分が仕事場にきたことを知ったら今度こそ怒るだろう。

言い争いになる。

帰っても家は同じ。お互い逃げ場などない。

最悪、世界を股にかけて飛び越えるしかないのかもしれない――

愕然とした。

そして、「やはり」と納得する自分がいた。

いつかの時と同じ、見下ろした盆地には相変わらず無数のクレーターが穿たれている。修復している傍から鳥達に破壊されていくのだろう。

街人達は固まっていた。前回と同じ、少人数のグループに別れ、降り注ぐ小雨をもつとせずに作業に没頭している。

――それが許せなかった。

仕事場の隅にぼつんと映る一つの人影。

まるで群れから逸れた子羊のように、あまりに孤独に、儚げにその少女は動いていた。

ナチルと街人との間には歩幅数十歩分の距離がありありと見える。方や集団で、方や個人で行うその作業。穴の大きさは同じ程度。

そこには明確なる意思があった。

仲間はずれ、という名の。

自分の思い違いかもしれないという、最後の一縷の望みを託して優貴は適当な岩の上に腰掛けた。相変わらず、本来ならば冷たいはずであろう岩の感触は肌には届かない。

ナチルの傍で影が動いていることに気づく。最初小さくて見落としていたが、その特徴的な頭に一度気づいてしまえば後は見間違えるはずもない。

シスだった。

猛る思いから切り離され、ジエンのことが即座に頭に思い浮かぶ。結局あれからシスとは会えていない。謝罪一つ済ませていない。

少女達は、たった二人で巨大なクレーターに向かって土をかけ続けていた。

時折ナチルが水筒を取り出して水を飲む。どうやらシスにも勧めているようだが、団子が二つくっついた頭は左右に振られているようだ。……肩を落とすナチル。

——一時間は経っただろうか。

街人達の一つ、また一つと穴を閉ざしていく。

少女達は——未だ一つの穴と向き合っていた。

確定した。街人達は誰一人としてその手を貸すつもりはない。見事なまでの無視。完全に自分達の世界から少女達を排除している。

沸き起こる熱を腹の中に閉じ込めるのも限界がきた。黒々とした感情が脳に魔手を伸ばす。

帰りが遅い理由も嫌になるくらい分かった。

立ち上がる。

八つ当たりで、靴の裏で岩を蹴飛ばした。

優貴はゆっくりと丘を下る。豆粒共が蛆のように蠢く醜悪なる巢に。

視線は固定。鼻は胸糞悪い瘴気を嗅ぐ。耳は閉ざされた。静かな雨音と——背後で起きていた、時間差で卵のように罅割れた岩の破砕音は聞こえない。

最初その姿に気づいたのはシスだった。

無表情で見上げ——見えない手でそっと押されたかのように、その身が後退する。

そして気づかれる。

ナチルに。

「優貴さ……」

「貸せよ」

強引にスコップを奪い取った。彼女の表情は見ない。見る必要もない。

水を吸い込み重みを増した泥に刃を突き立てる。無言で穴へと放

り投げた。どうせ疲労はおとずれない。体内の靄を晴らすように、怒りをぶつけるように、できる限りのスピードで両手を往復させていく。

優貴は知る由もないが、周りでは驚嘆の溜息が上がっていた。

街人達は一時手を止め、その速さに目を奪われる。ナチルに交渉した老人が、十数人が、皆が優貴の力を褒め称える。

悲しげな顔をしていたのはナチルだけだ。

飢えを修行とする僧に食物を与えてはならない。

数十キロの山道を歩いてお参りをする教徒達に車を与えてはならない。

優貴はその時、確かにナチルを冒した。

何度も何度も土をすくっても気が晴れない。心が、何より——隣から寄せられる眼差しが優貴の手足を重くした。

それでも。頭にきたので可能な限りのスピードで穴を埋めてやった。

「……」

意識が落ち着く頃、シスがそっと自分の隣に忍び寄り手を伸ばすのが見えた。また頬を引っ張られるのか——と思いきや、その手は優貴の頭上に添えられた。

撫でられる。

頭から水が散った。

「ずっとコイツに付き添っていてくれたのか？ ……ありがとうな」

シスの頭に手を置く。

——まだ大切なことを伝えていない。

ジエンが消えた理由を今こそ告白しなくてはならない。

視線を下ろす。

何事かと瞬いた青の瞳と向き合う。

口を開こうとし——

「すいません。もし宜しければ……こちらも手伝っていただけますでしょうか？」

咄嗟に顔そのものを地面へと向けた。シスに顔を見られたくなかった。

背後から自分へと寄せられたそれは老人の声。
心臓が一際大きく跳ね上がる。

「いや、本当にありがとうございます。おかげさまでとても助かります」

振り返った。

雷鳴が轟いた。

何も考えられないままに老人の胸倉を掴み上げる。

そのまま——力任せに吹き飛ばす。

かろうじて理性が働いた。あのままだったら首を締め上げていたかもしれないのだ。

だが当然そんなことは街人には伝わらない。

慄きと悲鳴が上がり、それを嘲笑うかのように雨が増して降り注ぎ始めた。

「いい加減にしろよお前等!!」

遂に優貴は吠えた。

悲愴なナチルの声が背中にぶつかる。

それは溶けた。

独りよがりの勝手な正義を振りかざす。それでも……もう我慢ならなかった。

「ナチルにばかり苦勞させてんじゃねえよ!　こんな下らないイジメ、お前等ガキか!!」

手が疼く。

誰構わず殴ってやりたい衝動に駆られる。
抑える。

それでも漏れる。

まず瞳が剣呑な輝きに染まり果てた。全身の毛穴からは野蛮で暴虐に満ちた興奮が溢れ始めていた。

それは確かに皆に伝わったようだ。

肉食獣を前にでもしたかのような怯えが、その瞳に、体に宿る。

それは——正しかったのかもしれない。

日に日に増していく優貴の中の魔物は、その獲物を求めて牙を鳴らしていた。きつと自分はこの中の全員を皆殺しにできる。

手頃な岩を思い切り蹴飛ばしてみた。自身へ返るダメージは考えない。

水飛沫を蹴り上げたように——岩の破片がつぶてとなって飛散した。

放たれた女性の甲高き絶叫は、優貴にとっては甘美なる音色だ。

その喉を潰してやりたい。歯軋りと共に、拳を握り締め、震えが止まらない腕を制御する。

止まらなくてはいけない。これ以上の誘惑に身を委ねてはいけない。

でも許せない。

見ると、投げ捨てた老人の双眸は恐怖で見開かれ、口をだらしく弛緩させている。

一步、優貴はその足を進めた。

老人は地面から立ち上がることもできないのか、尻を泥に着けてこちらを凝視したまま手だけで後ずさる。

もう一步進むと、更に素早く、ゴキブリのようにその身を後退させていく。

追いついてどうするのか。最後の一線を越えてしまうのか。

だがもはや、優貴の意識は混濁した何かに引き込まれて水面に顔を上げることさえ許されない。いかに雨粒がその頬を強くノックし呼びかけようとも、返す返事さえも忘れてしまった。

突如として大量の水が鼻の中に投げ込まれた。

「……う!!!?」

状況把握がままならず僅かに怯んだその隙に、今度は両目に水の柱が勢いよくぶち当たる。それが雨の類でないことは明白だ。意思を持ってその水は優貴の体内に侵入したのだ。

鼻の奥に、痛みに似た不快感が湧き起こる。それは咳となって口から飛び出た。

目の周辺に飛び散った水は乱暴に手で散らした。

「誰——っ」

開かれた携帯の待ち受け画面が目飛び込んできた。

六人が笑っていた。

忘れもしない、高校三年生の時、皆で初詣に行った帰りに撮ったものだった。

いい——笑顔だった。画面の中の自分は、何と元気に笑っているのだろう。

携帯を掴み、眼前に晒しているその手を視線で辿っていく。

水筒を手にし、慥然とした態度で立ち尽くすナチルの姿があった。

「駄目です優貴さん！ 優貴さんはこんな素晴らしい笑顔を持っている人じゃないですか！ だったら暴力とか、そういうの絶対いけませんよ！！」

……どんな理屈なのか。この時ばかりはその奇妙な理論も優貴の障害となる。

「どけよ……。そいつ等どうせ、お前が俺を連れ出さないことに腹を立てて、代わりにお前一人に膨大な量の作業を押し付けているんだろ！？」

ナチルは答えない。

肯定の意だった。だが。

「私はこのお仕事大好きです。だから構わないです」

「皆で平等にやっているならまだしも、押しつけられているのに見て見ぬフリできるかよ！」

「……私はこの世界が大好きです。傷があるのなら治してあげたいんです」

「おかしいだろ！！」

ナチルは頑なに譲ろうとしない。……かろうじて思考を取り戻した優貴の目には、彼女の在り方は自然に映った。取り立てて無理を

しているのではなく——小さな針が刺さっているのは明白なのに、そのような些細なものは見えていない愛すべきほどの愚鈍さ。

感じていないわけがない。村八分のこの状況を。

ナチルはただ——

本当に気にしていないだけなのだ。

喧嘩にさえならない。取っ掛かりさえも掴めないのだから。

ナチルの境界に土足で足を踏み入れているのは知っていたが、目の前の不条理に簡単に納得できるほど優貴は物分りいい頭はしていなかった。

「そこ、どけよ……」

動かない。

街人達はナチルに守られていた。そしてその防壁には傷一つつけることは叶わない。

ナチルの口は閉ざされたままだ。

「俺はそいつ等に我慢ならないんだよ!!」

響いた声は、降り注ぐ雨の中で虚しく掻き消されていく。

その必死の呼びかけさえも、彼女の心を動かすにはまるで力が足りない。

もう分かっていた。一方的に怒声を飛ばしているだけの人間がいかに滑稽な絵か。誰も何もいわない中でただ怒鳴り続けることがいかに恥ずかしいか。

戦う前から勝敗が決した。

あっさり負けた。

十八にもなって——

子供じみた感情が沸々と腹の中に溜まっていく。汚い言葉が脳裏を掠めては口から吐き出されるのを心待ちにしている。さも勇ましげに抜いた刀は斬る相手はおらず——かといって大口叩いておきながら何も斬らずに鞘に収めるのだ。

ナチルは何もいわない。いつもより眉を寄せ、携帯と水筒を手に立ちはだかる。

羞恥が、憤懣が、声なく見つめてくる無数の瞳が、全てが心を砕いていく。

いつの間にか孤独になっていたのは自分の方であった。

「……お前等ナチルに——！！」

堪りかねず、器の知れた最低の言葉がいよいよ口から飛び出そうになった。

それを制したのは——画面の中から自分を見つめる眼差し——よりも遅しく、凜としつつもその奥はどこか頼りなく揺れているナチルの双眸だった。

格好悪かった。

惨めだった。

一秒ごとにその重圧は増していく。

遂には優貴はその場へ背を向ける。

この場を静め、自分をも静める方法はもはや一つしかなかった。

優貴はそのまま背中を丸め、両ポケットに手を突っ込んで元きた道を足早に歩き始めた。

嘲笑うかのように雨が頭を叩いていく。

やるせない思いが心の中で荒れ狂う。一重にそれが爆発しなかったのは、力の限り振りかざした自分がいかに矮小な存在に堕ちるかを理解していたからだ。理性の欠片だった。

背後の群集から一刻も早く遠ざかりたくて更に足を早める。

咳が聞こえた。

耳の中で延々と踊り続ける雨音の中で、飛来するように訪れたそれは鼓膜を震わせる。

優貴は何事もなかったかのように歩き続けた。

第六話

どのような仕組みになっているのか、家の中に入った途端、服にへばり付いていた水分が一挙に霧散した。同時に、服を汚し染みと なっていた泥達も、まるで存在その物がなかったかのように消えて 去っていく。今更ながらに、ナチルの服がいつも綺麗に整えられて いた理由を知ったが、今はそんな不可思議な出来事はどうでもよか った。

ベッドに転がる。

でしゃばった自分の行動は厄介な種を蒔いた。

外に降る雨を栄養とするかのように芽は勢いよく育つ。

悲しさではない。孤独となった悔しさからでもない。

それでも胸を掻き毟りたくなるような暗い靄が心を覆っていた。

そのまま——瞳が閉じ、やがては意識もがそっと遠ざかっていく のを微かに感じていた。

——夢だ。

珍しく「本当の夢」を見ているらしい。

夢の中の夢。それは過去の記憶だった。

自分は携帯に向かって声を荒げている。それでもその感情は決して やましいものではない。相手を思っているが故に意見し、なのに 真正面から否定されてしまっている。

その人を心から大切に思っているのに。何よりも大事に思っている のに。

どうしていつも上手くいかないのだろう——

玄関の開いた音に体が反応し、それを起爆剤として一気に脳が覚 醒する。

目覚めだ。

「あ……優貴さん」

静かだ。

雨の音は聞こえない。

自分はどれほど眠っていたのだろう。

——ああ、そうか。少なくとも、ナチルが帰宅するまでの数時間をずっとベッドの上で過ごしていたのだ。

「優貴さん、今日は……ごめんなさい。優貴さんが私のために怒ってくれているのは分かっていました。それなのに、私、それを無碍にするようなことをして……」

「……いいよ。仕方ないだろ。勝手に俺がナチルのやり方を踏みにじっただけだ」

本心は違った。それでも優貴は事を荒立てたくないのです、それっぽいや言葉で体裁を取り繕う。自分は全く気にしていないことを暗に強調した。これしかやり方を知らない。結果……いい出せない本音がしこりのように心に溜まっていき、息苦しくなるのに。

「嬉しかったんです！ それは本当ですから！ 私、優貴さんがきてくれた時、困りましたけど……それでも嬉しかったです！ 信じてくださいか？」

「信じるよ。そんな申し訳なさそうにするなよ。俺も悪かったと思ってる」

ナチルの表情は見れない。眠いフリをして、優貴はベッドの上から降りようとしなからだ。横たえたその体は静かな窓の外を見つめている。

騙せたのか、それとも騙されたフリをしてくれて——いや、彼女はそんな迂回はいしない。常に道は真っ直ぐなのだ。それでも玄関から聞こえる声には僅かに明るみが増した。

「私、これしか生き方を知らないんです。この世界が大好きですから、だから、毎日代わり映えしなくても、修復に関われる日々は幸せです。その……いつだったか優貴さんから、楽でいいな、てからかわれちゃいましたけど。でも私はあまり頭よくありませんし、人間の方のように上手にお仕事はできませんから、だからこの仕事は私の天命です」

咳込む。

反射的に優貴はナチルの顔を向いた。彼女の表情は明るくも——苦しげだ。

「あ、大丈夫です。この世界で、病気とか、病の類に、かかった話は、まず聞かないので」

息継ぎが難しいのか、区切り区切りで言葉を発する。だが……

「……？ 何いつているんだよ。じゃあ……どうして咳しているんだ？ ナチル」

「えっと、んー……えーっと……どうしてでしょう？」

困惑顔で笑う。その、どこことなく痛々しい表情は優貴の戸惑いを加速させた。

「それより、たまには優貴さんの世界のお話を聞かせて下さい！」
優しく手を叩き、水筒を棚の中に仕舞うと自分のベッドに腰掛けるナチル。

「……え？」

「優貴さんは、元の世界ではどんなことをやっているんですか？？
いつも教えてくれないですけど、今日こそは全部喋ってもらいますよ！」

吸い込まれるような無垢なる瞳。

物語をねだる子供のように輝く緑の双眸は、優貴には直視し難いものだ。

咄嗟に顔を背ける。

自分は——ナチルにいった。

悩みも何もなく、楽でいいなど。上から目線で。

では自分は何を語れるというのか。

受験に失敗し、彼女にもフラれ、精彩を欠いた日々。

友達からの連絡は日を追うごとに少なくなっていたが——本当は分かっていた。

皆と一緒にいることに、楽しさと同時に——苦痛を覚え始めたのだ。

いいヤツだ。どいつもこいつも皆いいヤツなのだ。優貴のために旅行に行く計画を練ってくれたり、落ち込んでいることを誰もが気づいていたから、勉強も遊びも、全員でフォローしてくれようとしていた。

それに耐え切れなくなったのは自分なのだ。

「優貴さん？」

気がつく顔と顔を覗き込まれていた。

「優貴さんはいつも、どんなことをやっているんですか？」

聞こえなかったと思ったのか、もう一度同じ質問を繰り返してくる。

それは——耐え難い拷問だった。

ナチルはただ、今日のことを仲直りしたいから世間話をふつてくれているに過ぎない。もしかしたら、ここで自分に自慢話の一つでもさせて機嫌をよくしてもらいたいのかもしれない。

何を躊躇うのか。

ただ有りのままをいえばいいのだ。

親友がいる大学を目指して勉強している、と。自分は一人取り残されたが、必死に頑張っている、と。別に何も恥ずかしい要素はない。普通の浪人生なのだから。

——ナチルは——常に全力だった。

たとえ敷かれたレールの上であろうと、彼女はそこを全力で駆け抜け、両手を伸ばしてあらん限りの物を掴もうとし、飛び跳ねて雲にまで触れようとしていた。

急に自分が恥ずかしくなった。

瞬間、心で何かが蠢いた。

いたたまれなくなってベッドから降りる。

「優貴さん？ どこへ行くんですか優貴さん??」

「悪い、ちょっと外の風に当たってくる」

逃げた。居た堪れなくなつて夜の街へと駆け出して行く。ナチルが何かを叫んでいたが振り返らず、優貴はゴーストタウンのような

街並みの中に自らを投げ出した。

逃げ出した理由は言葉に詰まったこと以外にもあったのだ。

それはもはや確信めいた予感。

あのままだと自分は……再びあの禍々しい情に支配されそうな気がしたのだ。全てを壊してしまいたい誘惑。破壊の意思。

「一体、何なんだよ……」

心の奥底を探ると——僅かに心臓が反応した。

人を殺したい。異常とも思えるその衝動は血液に取って代わったかのように全身で波打つ。

これだけはナチルに知られたくなかった。

街人を脅そうが、岩を破壊しようが、それでも——人を殺すという、この悪魔じみた妄動だけは抑えたい。

ナチルはこの世界を心底愛していた。

自分はその世界を滅茶苦茶に陵辱したいと望んでいる。

……

大きく息を吐く。

戻ろう。

質問には偽りなく答えればいい。勉強への意欲が落ちていることも正直に話そう。

変に取り繕おうとしたから、自分で自分を追い詰める結果となったのだ。心を穏やかに、自然体にしていれば殺意も脈動することはないに違いない。

優貴は踵を返す。

その時、靴底が柔らかな感触を伝えてきた。

カジュアルな服装にも違和感のない、一見革靴を思わせるような紐のないタイトな革張りの黒い靴。どけると、地面から根強く逞しく生えている、菜の花のような可憐な黄色の輝きが暗がりの中で見て取れた。殺風景な街の片隅にも花は咲くらしい。それを思うと、何となく心が暖かくなれた。

そしてその心は一拳に氷点下まで落ちる。

目を疑った。

光の射さない薄暗い闇の中で、力強く息づいていた名も知れぬ花が、まるでビデオの早送りのように変化を見せ始めたのだ。

まず花が散った。啞然とする優貴の前で、花びらが次々と不気味にも散っていく。やがて茎がお辞儀をした。天へ向けて咲き誇っていたその花は、光から目を背け地を見据えてしまったのだ。途端にその緑が枯れ始める。水分を搾り取られたかのように、より細く、乾いた音を立てて幹の壁が剥がれ落ちていく。その頃には既に全身の色は薄茶色で覆われている。突如変色したそれは、小さな生命の終わりを意味していた。

始まりから終わりまで、五秒足らずの物語。

言葉を発する暇もない。ようやく瞬きを一つ下ろす。

震える手でそっと、生命の名残を撫でた。

すると最後の名残さえも残滓となって剥がれ落ちた。蟬の抜け殻よりも脆く崩れ落ち、破片は風に吹かれて飛んでいく。

手の甲が、隣で同じように逞しく成長していた花に何気なく触れた。

体が震えた。

嫌な予感が脳裏を駆け巡った。

それは裏切らない。

優貴が触れたその花は、やはりたった五秒でその命を散らせた。全く同じ一寸劇。花が落ち、茎が曲がり、養分が抜け落ち、ミイラとなって果てる。

「……は……っ……」

へたり込んだ。

力が抜けて尻から地面に落ちる。

死だ。

自分が花を殺したのだ。

悪寒が全身を埋め尽くした。

——人間は、この世界では破滅をもたらす存在として恐れられて

いる。

数秒で命を散らした足元の花々。だがそれだけではない。いつぞやの記憶が蘇る。

ナチルはいつていた。花瓶に生けていた花々。それが枯れる所など初めて見た、と。

そして……時を同じくして、病にかかる者のいない世界で咳込むようになったナチル。

全てあの家で——自分が住み着いているあの家の中で起きた出来事ではないか。

息ができない。吐き気が込み上げてくる。

同時に体に息づく全身の細胞が、不気味に脈動したような錯覚に陥る。

神海優貴は——ものを壊し、殺す存在へと化けようとしている。

脳を支配する、あの煮え滾る悪魔の囁きに自分が抗えなくなったその時。

自分は生粋なる破壊者として自由気ままにこの世界を砕くのではないだろうか。

——帰らなくてはならない。

本当の家に。

今こそ心からそう思えた。

自分はこの世界にいてはならない。

ナチルの笑顔が浮かぶ。

あの笑顔を——曇らせる存在は、この世界に存在してはいけない。なぜこんな時に彼女の顔が浮かんだのか……。おそらく自分にとってこの世界で意味のあるものはナチルだけなのだろう。

——思考に没頭していたのが仇をなした。

辺りに違和感を覚えるには明らかに遅すぎた。

鳥が鳴く。

薄汚れた興奮と歓喜の歌声が、辺り一面から徐々に近づいていた。囲まれていた。怪鳥達が羽ばたくにつれ、雨で一切を流された真

っ 白な空気に濁りが生じていく。

駆け出す。

不覚だった。

ナチルから遠ざかろうとしたのが裏目にでた。体がパニックに包まれようとする反面、生き残るために思考がクリアになっていく。空気の流れと臭いに敏感になって自分の姿があった。前回に比べれば幾分かは冷静でいられた。幸か不幸か、先程判明した事実で一度衝撃を受けた心は、未知や恐怖、危機といったものに耐性を作っていたのかもしれない。

「何が、二週間おきだ」

全くアテにならない天気予報。こちらの世界は特に酷いようだ。走りながら無数の視線を捉えていた。

窓という窓。あちこちの窓から街人達が自分を見ているのを感じる。

その玄関に駆け寄ろうなどと愚かな考えは浮かばない。

彼等が遠巻きにこの光景を見ていることこそが答えだ。

一切の寄り道をせずに優貴は通りを駆け抜ける。いつかナチルに教わったように小道に入ろうとも考えたが、それをやってしまうとこの明かりも目印も何もない街の中では一瞬にして現在地を見失う恐れがあったのだ。走れる限りは走り、それでも無理が生じた場合は……脇道に飛び込む。

シンプルだが確実な作戦を立てた。

この街ではハゲタカに追われた場合、味方は誰もいなくなる。

自分一人で切り抜けなくてはならない。

遂に黒いシルエツトが前方に躍り出た。羽ばたきと金切り声を交互に繰り返し、二羽のハゲタカが

行く手を阻むかのように地面すれすれを這うように飛んでくる。

通りを全速力で一分ほど駆ければ家だ。残りの距離を考えるとまだ大通りを走りたい。

それでも。

前方を塞がれた以上は優貴に選択肢はなかった。

あらかじめ想定した通り、家と家の間に見える狭い道に駆け込もうとして――

絶対なる圧力を前に、なす術もなくその体が押し潰される。

「は……あッッ!!?」

地面に腹を押し当てられ、同時に肺から空気が全て搾り出された。背中に押し掛かる暴力的な重さに背骨が悲鳴をあげているのが分かった。痛みと共に絶望が全身を支配した。

頭上で喚くは一羽のハゲタカ。死臭と腐臭が同時に体内へと流れ込んでくる。虫唾が走るほどの生理的嫌悪感を前に一瞬意識が落ちかけた。

――捕われた。

いつの間に背後に迫っていたのか。前方に気を取られているその間に完全に背中を許してしまっていた。次いで獲物にありつけなかった二位三位のハゲタカ達が着地する。

威嚇と小競り合いが始まった。

口ばしで、声で、時には体をぶつけて三羽のハゲタカが獲物の所有権を争い始める。

優貴は体を必死に動かすも、万力で固定されたかのようにビクともしない。生きていられるだけでも運がいいのか。ハゲタカが、自分を握り潰さないような適度な力加減にしてくれているのは偶然以外何物でもないだろう。

それでも背中に掛かる圧力は増す。

「――いいッ」

言葉にならない。生命の絞り汁が口から飛び出る。暴れ回るハゲタカに組み伏せられ、五体満足でいられるはずもないのだ。この不毛な争いがいつまで続くのか。

残念ながら花を殺した自分の力も、この巨体には通じないらしい。本当に……ロクでもない力だ。

そういえば、この世界で死んだら――元の世界にいる自分はどう

なるのだろうか？

何となく――

駄目な気がした。

骨の軋み音がいよいよ限界にまで近づいてきた。

骨を折られたことはないが、もはやその瀬戸際に近づいていることは感じていた。息が吸えない。恐怖が訪れる。初めて知る。これまで当たり前のようにしていた呼吸ができなくなることは、こんなにも恐ろしいことなのだ。それを覆い隠してくれるのが暴力の権化である苦痛だ。呼吸困難を忘れさせてくれるほどの激痛を背中に与えてくれる。

酸素が脳へ行き渡らず意識を失いかけ――

痛みが頭を現世へと引き戻す。

無情なまでに蹴られ、蹴られ、また蹴られる。

だからであろうか。

機能が朽ちてきたその瞳が、一つの人影を暗闇の中に捉えても優貴は冷静でいられたのだ。

幻であると断言できたから。まずこんな所にいるはずのない人物。桃色と白のブラウス。褐色の長いスカート。

優貴が駆け込むはずだったその小道に、妙に見覚えのある特徴的な幻影が映った。

仄かに落ちる月明かりがその姿を照らす。

薄れ行く意識の中、その美しい頭髮は頭上に輝く月よりも眩く見えた。

幻。

その人影は、両手に何かを握り締めているようだ。

幻――

シェイクされる脳が、その手に握られる鉛色を認識する。

たのむから……幻であってほしい。

ナチルはスコップを両手で握り、機をうかがうように、こちらを凝視していた。

目が合った。

驚愕で開かれた瞳と、戦慄で満ち溢れた瞳が重なった。

しきりに体を揺すられている自分に詳しく分かるはずもないが、その目を見ただけでナチルの状態が分かってしまった。

怯え、震え、歯がカチカチと鳴っていて、泣き出しそうで――

「お前は……」

小競り合いを続けるハゲタカ達の興奮は増していた。新たに登場した獲物に気づく様子はない。

口ばしで、羽で、しきりに他の二羽を攻撃し、怯ませ、権威を手になしようにしている。

その時、僅かに、優貴に押し掛かる圧力が緩んだ。空気が肺に流れ込んでくる。

「何しにきたんだよ……」

その声は届くはずもない。鳥達の喧騒は、真下で聞かされる優貴には鼓膜を突き破るほどやかましく不快な雑音だ。

なぜ。

小道にいるあの変な少女は、まるでマラソンのランナーのように助走をつける体勢に移行しているのか。

そんなスコップ一つでどうする気なのか。

逃げるのは誰でもできる。だが戦うことはその百倍は勇気がある。だから……彼女はあるなにも真っ青になって怯えているのだ。

帰れ。

帰れ帰れ帰れ帰れ！！

空気の門は閉ざされ、再び優貴の喉は言葉を外へ吐き出すことは叶わなくなっていた。

意識は覚醒していた。

痛みよりも大切なことがあった。

ナチルは完全に恐怖に支配されていた。自分の背丈の四倍以上を誇る薄汚い怪鳥ヘスコップ一本で立ち向かうその様は、ただの生贄だ。

今すぐ回れ右して帰ればいいのに。

それなのに――

「やあああああああ!!」

へっぴり腰のまま――目を瞑って駆け出し――おそらく人を叩いたこともないであろうその華奢な腕でスコップを振り上げて――

そして転んだ。

捕われた優貴の眼前で。目と鼻の先で。

震える膝は走ることに耐え切れず、その腕はもはや二度武器を拾えるほど遅しくもなく。

「早く、帰れエエエエ!!!!」

喉を振り絞って、体内に残された力を全て肺に込めて、優貴は言葉をつき出した。同時に一際気持ちの悪い咳が痰と共に喉から絞り出る。

へたり込んでいた。

這いつくばった状態からは一步前進したものの。

それがナチルの限界だった。

腰が抜けたのか、両手両膝を地面に突き、糸が切れた人形のように呆けている。

再び目が合った。

ナチルが笑った。肩を、頬を震わせながら。

「……失敗……しちゃいました。ごめんなさい、優貴さん」

いつの間にかハゲタカの叫び声がやんでいた。

不吉な予感。不穏な空気。

二羽のハゲタカが同時にナチルに向かって飛び出し――お互いがお互いの体を弾き飛ばした。

怒りと欲望が、賞品であるナチルの前で交差して不毛な争いが勃発する。

優貴を捕えたハゲタカの両足に一層の力が込められた。全身の肉が更にきつく縛り付けられる。二羽の注意が逸れた隙に、この場を立ち去ろうとする意図が見て取れた。

一度空へと連れられたら、おそらく二度と地上には戻ってこれない。

慄然たる思いが駆け抜けた。その矛先は自分ではない。怪鳥達に貪られる一人の少女へ向けてだ。

自分が攫われたら二度とナチルを助けることはできない。

自分の死は彼女の死だ。

どうして……

なぜナチルはこの場にきてしまったのか。

どうして。どうして。

一羽のハゲタカが悲鳴に似た絶叫をあげて場を飛び退いた。その羽からは鮮血が滴っている。痛みに耐えかねるかのように羽毛を羽ばたかせ、赤く染まった羽を空に降らせた。

口ばしを禍々しい赤で彩らせ、勝者となったハゲタカは興奮冷めやらぬままにナチルへと向かう。生命の危機が麻痺した全身を叱咤し筋肉を動かしたのか。

四つん這いで、捕食される草食獣のように、本能のまま少女は逃げ出そうとする。

優貴の体が――地上から離される。

それを掴むハゲタカが歓喜の雄叫びを上げ、体が空へと運ばれて行く。

その頃には背中の中の重みは消えていた。

「ナチル!!!!」

優貴は鉤爪の中で必死にもがき、力を込めるが何の意味もない。

芋虫のように身をくねらせるのが関の山だ。地上を見下ろせるのがせめてもの救いだろうか。

ナチルの僅かな抵抗を前に狙いが逸れたのか、ハゲタカの足は空を掴み固く閉じられる。代わりに彼女に激突したのは巨大なる毛の塊だ。その細い体は軽々と弾き飛ばされ、受身も取れないままに数メートルもの距離を地面に擦り付けられる。優貴の眼下にて、それきりナチルは動かなくなった。

ハゲタカが勝利の咆哮で空を唸らせ、ゆつくりとナチルの元へ歩み寄るのが見えた。

ナチルは未だ動かない。

元気に笑い、無邪気に駆け、雨の中でも気丈に佇み、震えながらも武器を手にしたナチルが。

まるで……その生を終えたかのように。

隠れていればやり過ごせたのに。

勝てもしない戦いに、細腕一本で参戦し……呆気なく散っていく。誰のために。

彼女は誰のために、無謀な負け戦に身を投じた。

優貴の体は空へと遠ざかっていく。

ナチルの体に醜悪なる怪鳥が覆いかぶさろうとしている。うなじが逆立った。

頭の中で電子が粒となって弾けた。

両手で拘束具へ爪を立てる。

嘲るかのように頭上でハゲタカが笑った。

優貴の手の数倍を誇る巨大な足。一人の力如きでその戒めを破くことは叶わない。

——はずなのに。

掃き溜めの中から魔物が産声を上げたかのような、飛び切り喜色の悪い悲鳴が頭上から放たれた。

全身を執拗に締め付けていた圧巻が消え去る。

解放される。

高度は六、七メートルほどか。

咄嗟に身を丸めて、優貴は地面へ激突する衝撃を吸収しようとする。優しくとは言いが、それでも雨でぬかるんだ土は、幸い大したダメージもなくその身を受け止めてくれた。

空から枯葉のような粉が風に流れて落ちてくる。

見上げれば、そこには片足の指を数本失った怪鳥が一羽、激痛にのた打ち回りながらも地上へ着地していく様が見えたかもしれない。

駆ける。

既にハゲタカの数 は当初の数倍に膨れ上がっていた。大半が地上へ降り立ち、ナチルと、そしてたった今降ってきた新たな獲物への眼光を光らせている。

叫んだ。

何をすればいいのか、どうすればナチルを救えるのかも分からず、優貴は特攻するようにただ真正面から倒れているナチルへと駆けて行く。

一羽のハゲタカがそれを遙かに越える声量で気概を解き放ち、強固なる手錠をはめようと迫りくる。

優貴の体に触れた瞬間、その足が音もなく崩れ落ちた。

老人の萎びた足を思わせる毛一本ないその足は、付け根から剥がれ落ちる。

上空から、背中から、ハゲタカ達が一斉にこぞって襲い掛かる。

その数だけ悲鳴が木霊した。

足が、足が、口ばしが、また足が、細胞の活動が突然停止したかのように——死に絶える。

腐臭をまとわせ大空を汚してやまない鳥達が、次々と腐り果てていくその様は皮肉だ。

ようやく見えた。

異変を察知したのか、口ばしを赤く染めたあのハゲタカがナチルの体をその爪で固定し羽ばたこうとする最中——

「ナチル——！！！！」

格別の冗談だ。

この世界で既に幾度も奇妙なものを見てきた自分に訪れた、最終にて究極なる冗談。

既に自分がおかしくなり始めていることは自覚していた。

壊れているのはこの世界か。それとも自分の頭か。

優貴の声は——届いた。

その大空を稲妻が割って地上へと降り立つように。

海を割って道を切り開いた神話のように。

大地が……叫びに呼応するかのようにはジグザグに割れ、唸りを上げて地割れを引き起こしたのだ。

底の見えない深淵が、優貴の眼前から標的のハゲタカにまで突き進んでいく。

揺るがず振動の中でも飛び立てたことは流石というべきか。それでも獲物を捕まえたまま空へ逃れる余裕はなかったようだ。ハゲタカは逃避に専念したのか、一目散にナチルの傍から遠ざかっていく。地割れは……ナチルに到達する直前で止まり、同時に辺りを揺るがせていた振動もその動きを止めた。

考えを放棄する。どうせ自分が何事かを思おうと意味はない。

ナチルに駆け寄りその肩に触れようとして——思いとどまった。

上空では多くの鳥達が恨めしげな声を出して旋回している。それでも降りてこない所を見ると、動物特有の鼻で優貴に潜む異質なる何かを嗅ぎ当てたのかもしれない。

頬にそつと手が添えられる。

遅れて優貴の全身が震えた。

「優貴……さん……？」

眠たげなその瞳は、しかし確かに生気がこもっていた。

出血もない。吐息も正常だ。吹き飛ばされて頭を打ち、一時的に気を失っていたのだろう。

心から安堵する。

添えられたその手を無闇に振り払うわけにもいかず、優貴は成すがままにさせることにした。

理屈は分からないが、幸い……自分に触れてもナチルに変化が見られなかったためだ。

「助けにきてくれたんですね……ありがとうございます……」

「こっちの台詞だ。……といっても、お前はスコップ持って転んで終わったけどな」

「酷いです。これでも頑張ったんです……」

ナチルの震えは止まっていた。夜空に舞う多くのハゲタカをその視界に収めているであろうにも関わらず、穏やかに、母の温もりで眠る子供のように安らぎを得ている。

「ナチル、さ」

両手で上半身を抱き起こし、優貴は深く考えもせずに言葉を告げた。

「俺……元の世界では、皆より人生遅れちゃっているんだ。半年くらい前までは、共通した一本のレールがあってさ。皆でそこを歩いて……でもそれは途中で途切れてる。そこから先は自分で線路を見つけて歩いて行かなくちゃいけない。でも俺はそこで失敗した」
周りがどういおうと、友達が、先生が、両親がどうフォローしようとも。

一年遅れを取ってしまったことは事実なのた。

「ごめん、ナチル。実は半分八つ当たりしてた。受験も何もなく、ずっとレールが続いているナチルが少し羨ましかった。俺は元の世界で大したことをしてない。ナチルのように毎日元気に過ごせてない。だから本当は、お前に俺の私生活のうちに話せるようなことは何もないんだ」

もう一度、すまん、と頭を下げる。

再び視線を戻した時、緑の双眸は——僅かに揺らぐこともなく真っ直ぐ優貴を見つめていた。

「偉そうにしてたが、これが俺だ。ちよつと軽蔑したろ」

「どうしてそんなことをいうんですか」

自分を卑下し、そこで初めてナチルの瞳が悲しげに動いた。

「私は馬鹿ですから、難しいことはよく分かりません。でも、優貴さんがとても面白い人で、たまに意地悪ですけど、とても優しい人であることだけは知っていますよ？ それに……」

天から注がれる月明かりよりも優しく、地上で輝く一輪の花はささやかに煌いた。

「優貴さんはあんなにもステキな笑顔ができる方じゃないですか」

この世に生きる者は皆善人であるといわんばかりの笑顔。

彼女は紛れもなく、この世界を生きるに相応しい白き心を持っている。

何となく気恥ずかしくなって、捲くし立てるように懺悔を続ける。

「あともう一つ。……実は俺、今朝のことをまだ根に持っている」

「あははは。やっぱり、そうだと思います。『俺も悪かったと思っている』なんていって。でも絶対に私の方を見ようとしないうですもん」

「……何だ。思った以上にお前、小賢しい所があるな」

「これだけ長い間ご一緒しているのですから、他ならぬ優貴さんのことでしたら大体分かるようになってきましたよ」

胸を張られる。

……何だか悔しい。

と、ナチルが慌てて自分の額に両手を当て、罰点印のような防御を築き上げる。

優貴は――

反動をつけて弾く中指――要はデコピンだ――をするべく右手を振り上げたままだ。

完全に先手を取られていた。

半分勝ち誇ったように、半分楽しげに、ナチルが鼻を鳴らす。

……やっぱり悔しい。

名案が閃いたのはその時だ。負けず嫌いな脳が過去に遡り使えるネタを引っ張り出す。丁度そろそろ一回聞いておこうと思っていたのだ。

「そういえばナチル。この世界の名前、決まったのか？」

効果は抜群だったようだ。

クロスした防壁の下でほくそ笑んでいたナチルの顔が凍りつく。

さも何でもないかのように、それでも目だけは楽しみを隠せず、

優貴は返答を待つ。

だが意外にも少女の顔は蒼白――ではなく、僅かな羞恥を含んだ

スのない名前。

いかにもナチルが真剣に考えたような名前。

その瞬間優貴の心は弾けた。あまりに似合いすぎており、洪水のように生じたその波は一切の思考を吹き飛ばす。全てのしがらみを解き放ち、洗い流し、優貴は大声で笑い続けた。

優貴にナチルの顔は——見えていなかった。笑うのに夢中になっていたためだ。

ナチルは不貞腐れることもなく、優貴の顔を呆気にとられたように見つめ——やがてその表情が穏やかな微笑みに変わり、最後には優貴とは別の意味を持って楽しそうに笑った。

「ほわほわ、て何だよ？ 意味は。ニュアンスでしか伝わってこないぞ」

「いいんです。何となく温かな感じがするじゃないですか」

「……俺が今書いているヤツのタイトルにしようと楽しみに待ってたのに。こんなワケの分からない名前、つけられないぞ……」

「え？ 何ですか！？ どういうことですか！？」

「さ、行こうぜ。そろそろ帰ろう」

「はい。あの……優貴さん？」

ナチルの視線は優貴の背後。それも地面の上に向けられていた。

「お礼は何度でも申し上げますけど……あんまり、地面をいじめないで下さいね」

「……見てたのかよ」

岩を蹴り碎き、大地を割り、それでもナチルは自分に対し何ら変わらず接してくれている。

いいヤツだった。

優貴にはもう分かっている。

刻一刻とおかしくなっていく自分が。

——こうなる前に、とうに帰らなくてはならない存在だったのだ。「正直に言えば少し……怖いです。あ、優貴さんじゃないですよ？ 何ていうんでしょう、力そのものにか。優貴さんにそれを

与えた神様にどうか……」

ナチルは怯えていた。目の前の惨状ではない――

「神様は、この世界を壊してしまうつもりなのでしょうか」
愛しき箱庭の一片を踏み荒らされたことに。

二人は並んで歩く。

もうハゲタカの襲撃はなかった。

何が楽しいのか、ナチルは優貴の手を捕まえると、満面の笑みで両手を振って歩き出した。

非常に歩き辛い。

ブランコのように手を振り回すその姿はまるで幼稚園児だ。
なのに。

優貴はそれを振りほどく気になれず、仕方なく――そう、仕方なくそのままにしておく。

あつという間に家に着いてしまった。

「おかえりなさい、優貴さん！」

「……ん、ただいま」

何かが変わろうとしていた。

何かが始まろうとしていた。

そして――

世界が終わろうとしていた。

第七話

終章

ナチルの咳は悪化の一方を辿った。

熱はない。声も普通。特に頭が重たいわけでもないらしい。つまりは五体満足。

それでも咳をするその瞬間だけは、同時に苦しみを吐き出しているのがその顔からも分かった。

少しでも眠っていてほしくて、花瓶に水を与える役目は優貴が勝手に請け負うことにした。街の井戸から水を汲み上げ、三つの花瓶の中身と取り替えてやる。その際にはできるだけ直接花に触れないよう、紙を巻いて、まるで割れ物を扱うかのように慎重に行う。相変わらず毎晩夢を見る。現実世界の夢だ。

戻らなくてはならない。しかしその方法が分からない。

そもそも自分は——どうやってこのほわほわにやってきたのだろう？　きた道が分からなければ帰りようがない。焦りは日々と共に募っていく。ハゲタカとの交戦時に、地面に残された物々しい傷跡を見る度にそれは心の奥で眠る何かを刺激する。

そして、あの日以来変わったことがもう一つ。

「出る！　時間だ！」

けたたましく、荒々しい声。

いつもの仕事時間。ナチルが出かけ、自分が書き物に専念するはずだった時間。そこへ毎朝必ず街人が数人で家に押し寄せてくるようになった。その表情は——険しい。

更に付け加えるなら、皆が皆、スコップを持って武装していることもか。

「はいはい。……じゃ、ナチル行ってくる」

「何いつているんですか。私も行きます。あ、反論は受け付けませ

んからね」

神海優貴は恐れられた。

地を碎き、ハゲタカ達の群れから生き残った人間の存在は、翌日には瞬く間に街中に知れ渡っていたのだ。どんな話し合いが街で成されたのか、優貴に対し少しずつ柔らかくなりかけていた視線が手の平を返したかのように変わった。

優貴は納得していた。人の歴史と同じだ。未知への恐怖が敵意を生んだのだろう。そして誕生したのは奴隷が一人。鎖で？がれたり、遊び半分で殴られないだけまだマシな方だ。日暮れ時、見張りを数人残して仕事場から街人達が去った後、夜遅くまでスコップを手に延々と働かされるだけだ。

「……お前って、要領悪いよな」

ほわほわへきた当時ならばとうにベッドに潜り込んでいる時間。相変わらず疲労を感じない中で、優貴は永遠に等しい量の土を穴の中に放っていく。その声の先には、やはり自分と同じように一心不乱に地面と向き合う金髪のお下げの存在があった。

「はい？　どういふことですか？？」

よほど近くに寄らないと相手の顔さえ見れないほどの闇。それでも優貴にはナチルが目丸くしている様子がありありと伝わってきた。

「適当にあいつ等に話合わせていればよかったのにさ。面倒臭いヤツめ」

「はあ……」

優貴へ対する労働の強制。そしてその労働時間の総量。あの夜の翌朝、それが玄関で伝えられた時、真っ向からそれを拒否したのは――やはりというか、ナチルだった。

元々この世界において、ナチルが変わり者であることくらい優貴も気づいている。

だからであろうか、街人達は至極シンプルな答えをそこに付け加えたのだ。

お前もそいつの仲間か。

はい。

ならお前も同じだ。

二つ返事でナチルはそれを受け入れた。つい先日、街人達はあの雨の日にナチルに庇ってもらっておきながら、そのお礼がこの仕打ちなのだから呆れ返る。

「それより優貴さん！ ほら、この気持ち良い風！ んー……ーッ！」

「分かったから早く手を進めろ。これが終わってようやく今日のノルマ達成だ」

スコップを投げ出して両手を広げ、「んー」とかいいた始めたナチルに釘を刺す。時折咳き込んでいるのだが、それでも楽しげに会話をふってくるので幾分かは安心できる。休んでいる、と幾度となく繰り返した押し問答は面倒なので口にしなくなった。

「お前も……すまないな、シス。俺達のためにさ」

そして、トーンを落として話しかけたのは、この場に残る最後のメンバーだ。

それまで黙々と働いていたシスは、その言葉を受けた瞬間のみ手を止めた。そして首を横に振るうと、再び作業を再開する。

……ちなみに、シスの新しい同居人は、とうに「定時」で街人達と共に帰って行った。

遅すぎる報告なのは承知だった。

何日も前に優貴はジエンのことを話した。

自分のせいでジエンが帰らぬ人となったことを話した。

その時も……

やっぱりシスは、無言で首を振るだけだったのだ。

残念そうに。目を細め。

仕方ない。そんな声なき声が伝わってくるかのように、二つの団子は小さく揺れた。

お咎めがなかった。

うな垂れた優貴の頭にそつと手が乗せられ、それでその話はおしまいになってしまった。

少しずつ――街が変わってきている気がした。

ナチルと情を交わし。

利点一つないのに自分達を手伝ってくれるシス。

仲間。チームワーク。

無が支配していたほわほわに、新たな息吹きが吹き込まれる。

優貴の中に潜む魔物は着実と成長を遂げている。それでも自分でそれを意識し理解した今では、ナチルが命を落としかけたあの日のような、よほど特別な感情が湧き起こらなければ暴走することもないだろう。

月が昇り太陽が沈む。

太陽が昇って月が沈む。

日は繰り返す。

そしてある日、優貴は唐突に知る。

自分が今まで知らなかったこの世界における最後のルールを。

いかに美しく、温かく、繰り返される輪が存在しようとも、所詮輪は永遠。どこまでも果てなく続く道であり、無情に繰り返される輪廻であると。

「優貴さん！ 携帯電話の使い方、私に教えてくれませんか！？」

景色を撮影するための機能もついているんですよね！」

「……んー、そうだな。凄いやな」

「どのボタンを押せば撮影できるんですか??」

「うん？ んー……。……どれなんだろうな」

暖かい日差し。透き通るような空気。汗というものは鬱陶しいだけで邪魔にしか感じていなかった優貴だが、こんな環境でこそ、ガラにもなく汗をかいてみたいと思ってしまう。

いつもの日々だった。

変わらず三十人前後で無数に散らかされた土を、元の場合へとか

えしていく。

イジメに飽きたのか、それとも僅かにナチルに感謝をしているのか、優貴達は街人に交じって作業をしている。

今や見えない鎖で？がれた優貴には、この世界を探索する時間など皆無だ。それでもどこかで時間を捻出しなくてはならない。もはや日曜日さえも仕事に駆り出される優貴にとってそれは切実なる問題となっていた。漠然と時が流れていく。しかしそれではいけない。だが、そもそも自由を得たとして、この広大な世界のどこを探せば帰り道が見つかるというのだろう。

そんなことを考えていたせいだろうか。

ゴホゴホとしつつも全くその元気を損なったように感じさせないナチルの声に、適当に相槌を打っていた優貴の注意は明らかに散漫となっていた。

機械的に動かしていたスコップが、働き盛りである三十代ほどを思わせる男性の腕に当たる。揺れる電車内で人と人が軽くぶつかり合う程度の度合い。軽く頭を下げて会釈をすれば済むようなささいな出来事。

しかし。

差別が生まれた世界ではその重みは桁が一つ異なる――

「……何するんだ、オイ」

「あ……すいません」

同時に口をついて出た言葉は、その向かう矛先がまるで違う。

場を静めようとする言葉と。

場を荒げようとする言葉。

有無をいわさない一撃が優貴の腕に激突した。平らな面を向けられたとはいえ、鉄製の容赦ないスコップの一撃は確かな痛みを伴って体内に刻まれる。

倒れた優貴の体は柔らかな土のクッションに包まれた。

他ならぬ、自分で埋めようとしていた穴の上に転げ落ちたのだ。

「何てことするんですか！！」

暴力と、叫びと。

人々の手を止め、注視させるには十分すぎる要素が揃ってしまった。

ナチルが即座に制止の声と共に割って入る。

「そいつがわざとスコップをぶつけてきたから、お返しただけだ」

「優貴さんはそんなことしません！」

「邪魔だ、どけ！」

男はナチルを手で強引に押しのけると、更なる打撃を加えようとしてもいいのか、優貴の方へと近づいていく。武器片手のその姿はもはやただの悪漢だ。口を出さずそれを遠巻きに眺めている人々の顔は、笑っているわけではないが憂いている顔でもない。どこことなく白けた雰囲気。

ナチルの体が地面に投げ出されるのを目の当たりにし、少なからず優貴の体が邪悪なる歓喜に震える。……腹に力を込め、意識を強固に保ちそれを抑え込む。それでも――

今後の自分達の生活を守るためにも、軽い威嚇程度はぶつけておいた方がいいのかもしれない。

沸々としたものが内側から湧き出てくる。

純粹なる怒り。

それを瞬く間に静めたのは、優貴と男との間に差し込まれた小さな人影だ。

「シス――」

優貴の視界に映るのは少女の頭だ。その裏側に刻まれている表情を窺い知ることには叶わない。

それでもシスは両手を広げ、顔を上げて男の顔を真正面から見つめているようだった。

「……お前も、前からその人間に肩入れしているよな？」

「……」

シスは何もいわない。小さな体で、気丈にも立ち尽くすだけだ。

「その人間はこの世界に破滅をもたらす存在だ！ 本当だったら縄

で手足を拘束し家に閉じ込めてしかるべきだが、それを俺達は免除してやっているんだ。そんな目つきで睨まれる覚えはないぞ？」

「……」

「街中に大層な地割れを引き起こしやがって。そっちの修復にも人手を割かなくちゃならないから、うちも他のチームもメンツが入れ替わって大混乱なんだ。疫病神もいい所だぜ！」

「……」

男が一步を踏み出す。

まずい。

直感した優貴はシスを庇おうと、土塗れの体を起こして駆け出そうとする。

「何とかいえよ！！」

怒号と共に振り上げられたその手は、茶色の頭を容赦なく弾き飛ばす。その愛くるしい小さな体が宙を舞った。優貴の眼前に飛ばされたシスは、柔らかな土の中へと頭から飛び込む。

「シス！！」

抑える。抑える。込み上げてくる憤怒を必死に内へと閉じ込める。倒れ落ちた少女の傍らに駆け寄りその顔を覗き込もうとして――

「え？」

ゼンマイの切れた人形のように、優貴はぴたりとその動きが止まる。

「ん……」

奥歯に物が詰まったかのような物言いは手を上げた男のものだ。

シスの体には目立った外傷は見えない。現にその顔はいつもと変わらず、痛みの欠片も感じていないかのような、怒りも悲しみもないゼロの顔。

戸惑いを覚えたのは、その体の在り方だ。

砂のような、粒のような、一ミリにも満たない細かい破片が、金色の輝きを発しながら湯気のようにシスの体から立ち始め始めたのだ。それは天へ天へと昇っていき、ある一定の高さにまでくると霧

散して消え去る。

美しくも――儚い。

それはまるで、体内で息づいている命の欠片が少しずつ失われていくかのような、そんな尊ささえも連想してしまう。優貴の眼前で、それはやむことなく続く。シスの体から少しずつ、何かが空に溶けて消えていく消失劇。

「……ふん。……おい人間、次は気をつけろよ」

それを目に収めた男は、毒牙を抜かれたように、急に大人しくな
って背を向けて行ってしまう。

訳もわからず右往左往するのは優貴だ。

「おい、何だよ！ シスは一体どうしたんだ！？」

「シスさん……。もう……。お時間だったのですね……」

いつの間にかナチルが、服が汚れることなどお構いなしに膝をつき、シスの片手を優しく握り締めていた。その労わるような遠い目を見て、優貴の心が大きく波打つ。

「……シスに一体何が起こっているんだ……」

女神のような慈愛に満ちたナチルの眼差し。そして、横たわったまま一向に立ち上がろうとしないシス。その体内から絶え間なく昇っていく光。あらゆる符号が一つの事象を物語っていた。

「優貴さん。私達は、人間の方に比べると……。その……。非常に短命です」

あまりに唐突。

そつと語られたその言葉は、優貴の心臓をボールのように蹴飛ばすには十分な威力だった。

遠まわしながらも、ナチルが何をいいたいのか分かってしまったのだ。

自分は罪深い。

その紡がれた残酷なる真実を聞き――

目の前で逝こうとしている小さく無口な少女よりも、元気で活発でやかましく、それでも今はただ慈しみを持って目を落としている

少女のことを思ってしまったのだから。

「何だ……それ。シスは……一体、何年生きたっていうんだよ……」
「優貴さん」

顔を上げずに、ナチルはシスを見つめ続ける。それきり黙ってしまふのかと思われた。逡巡の理由は言葉を聞いた後で理解する。こんな時に話すべきことなのか、それを懸念したのだろう。

告げられる。

「私達は、三ヶ月程度で寿命を迎えます」
眩暈がした。

「精一杯生きて、精一杯働いて、この世界のために全うして私達は消えていきます。人間の方と違い、何も食わず、病気もせず、それでも永久に働き続けるという都合のいい体はやっぱり存在しないのでしょうね。それがこの短命という結果なのだと私は思ってます」
事実を。

真実を——突きつけられる。

「どうして……いつてくれなかったんだよ」

「……いっても……仕方ないじゃないですか。私達の寿命なんて……」

ナチルの声には憤りも哀しみも感じない。開き直っているようにも見えない。

人が——老人がその天寿を生き、その先に訪れる死に疑問を抱かないように、ナチルも——そしてシスも、ただ静かに、穏やかに、その最期の時を優しく包み込んでいる。

納得していないのは自分だけだ。

これがこの世界の中で繰り返されるシステム。
原動力を持たずに動き回る人形達の種明かし。

生まれて死に、生まれて死ぬ。優貴の世界と違うのは、彼等の生には如何なる色もつかないことだ。ある日ベッドの上に誕生し、働くことを至高の喜びと義務づけられ、毎日働いて、何の楽しみも交友もなく日々を過ごす。そして短い三ヶ月後、役目を果たし終えた

かのように——散る。

使い捨ての人形達。

幾日かが過ぎたら——シスが眠っていたベッドの上に「次の人」が誕生するのだろう。

恐怖とも嫌悪とも違う。

気が狂いそうな、体が分解してしまうかのような鳥肌が立った。弾かれたかのように優貴は顔を上げて、周りの街人達を確認する。誰に聞くまでもなく心の隅に置いていた疑問が一拳に爆発した。いない。

そういえばいつの間にかいなくなっている。

消えている。

山男のように、髭で覆われていたあの大男の姿が見えない。

優貴が雨の日に突き飛ばし、玄関にも何度か訪れた老人の姿も見えない。

特に探そうなどと思ってもいなかったが、そういえば昨日も一昨日も見えた記憶がない。

彼等は皆、優貴が思う以上に狭く短いレールの上を歩いていた。

そして、それが果てなき谷の底にまで続いていると分かって、辿っていったのだ——

「シスさん。本当にお疲れ様でした。今日までよく頑張ってくれましたね」

ナチルは取り乱さず、街人達も作業をこなしつつも、こちらが気になるのか何人かが時折振り返って様子を確認してくる。

これがこの世界における死。

ああ、つまり。

よくあること、なのだろう。

「優貴さん。シスさんを褒めてあげて下さい。私達は最期の時になっても体に異変をきたすことはありません。本人はそれでも何となしに気づくらしいのですが、周りからは全くそれは見えません。だから——最後の最後まで私達は働けるんです。それはきつと——凄

いことです」

何て……残酷なんだろう。

誰も疑問に思わない。

誰もこの世界の非道さを疑わない。

先から一人苦しんでいるのは、異端なる自分だけだ。

「シスさんは、優貴さんのこと大好きだったみたいですから——褒めてあげて下さい」

見上げる青の瞳が映し出しているのはナチルでも、広大なる空でもない。自分だった。こんな時でもその顔には能面が張り付いている。

ふと——その無表情が優貴の心に隙間をぬって入り込んできた。分かってしまった。シスが常日頃に浮かべていたその顔はこの世界において最も適切であったことに。

ロボット。

本当に自分は罪深い。こんな時なのに気づいてしまった。気づく必要もない、どうでもいいことを。素顔を表に出さない不思議な女の子。それだけで心に留めておければよかったのに。

延々と、不変の日々を過ごし、穴埋めの仕事を生き甲斐とさせられ、何も考えずに生きていく。

分かっていたのだ。

この世界に人間が存在しないことくらい。

金色なる光は少しずつ弱くなっていた。その時が迫っていることくらいは感じていた。

傍らにしゃがみ込む。

なのに言葉が出てこなかった。

褒めてあげなくては。三ヶ月間もこの小さな体で一生懸命にスコップを握って働き、村八分にされた自分とナチルの手伝いまでしてくれた心優しき少女に。

でも——

どう褒めればいいのか。

口から言葉が出てこないのは、本音がそれを覆い隠しているからだ。

憐れんでいる。

自分はまた上から見ている。

決まりきった生き方を強いられ、無感情に動く彼等を自分は心の奥では認めていないのだ。

だから——心から褒めることができない。

ナチルから訝しげに視線が寄せられる。きっと少し怒っていることだろう。

嘘の言葉でもいいから安心させてやらなくてはならない。

気力を振り起こし、搾り出すように腹から言葉を出す。

もはやその時点でおかしい。無理やり紡がれる言葉は虚偽以外何物でもないのだから。

その口が。

そっと摘まれた。

思考がゼロになる。

苦痛を吐き出そうとしたその唇を閉ざしたのは、地面に横たわり最期の時を迎えようとしているシスだ。右手の親指と人差し指だけで、そっと優貴の悪い口を閉ざす。

頬でも髪でもない。そこを閉ざしたのは偶然だろうか。呆氣に取られる優貴の前で、ずっと真横に結ばれていたシスの唇がそっと開かれる。長年太陽の光と雨水を糧としてきた花開く蕾のように。せせらぎのような、緩やかながらも優しい強さ。それでも、そこから紡がれる想いはない。言霊は、後を見守る者達に発せられることはない。

何のために。

彼女は一体何のために生きたのだろうか。

喜びを知らず、悲しみも知らず、何も残さず消え逝こうとしている。

「シス……！」

あんまりだ。この世界は何のために存在している。この世界の神様は一体何をやっている。

どうしてこんな——救いのない、小さく儚い命を作ったのだ!?

「……ユキ……」

鈴の音が優しく心を揺るがした。

場所を特定できず、思わず優貴は射抜くような速さでナチルの顔に目を向けた。

意図を理解したのだろう。首を大きく振って否定の意を示すナチル。

信じられない思いで優貴が音の発生場所に目を落とすと、そこではシスが眩しげにその瞳を閉ざそうとする所だった。

「おい、シス!」

「ユキ……ユキ……」

輝きは既に痛々しいものに変わろうとしていた。まるで、元気に火花を散らしていた線香花火が、地面に落ちるのを拒み、残りの力を振り絞って最後まで光を放とうとするかのように。

大福をつまむかのように両頬が掴まれる。

こねられる。

引っ張って弾かれる。

小さな唇から名前が紡がれた。

何度も。何度も。

可愛らしい声だった。小さく、風が吹けば飛んでいってしまいそうな声。

優貴の喉元に一挙に何かが込み上げてくる。それは口だけでなく、目頭にまで押し寄せた。

生きた証だった。

名前を持たず、お互いを名前で呼ぶこともないこの世界で。

彼女は手に入れたのだ。

ユキ、という名の名前を。

どうでもいいこと。面白くもない言葉。生きていく上で何の役に

も立たない単語。

それなのに——シスは、そのたった二文字を、愛しげに何度も何度でも連呼する。

その瞬間、その生に確かなる意味が宿った。

人が聞けば一笑に付すような取るに足らない小っぱけな出来事。

その小さい糸を、この無が蔓延る世界で、少女は掴み取ったのだ。

「よく……頑張ったな、シス。偉かったぞ。……ありがとうな、俺達に付き合ってくれて」

今度は自然と言葉が口をついて出た。きっと彼女は分かっている。なぜ、今自分が褒められたのか。この世界で自分とシスだけが知る別世界。見えない糸で結ばれる。

蜃気楼のようにその体が揺らぐ。幻と現実が溶け合ったかのような曖昧なる混濁。もはや光は、閉じた蛇口から小さく滴る水滴のように微細なるものとなっていた。

そして昇っていく。

最後の一滴が。

シスは笑った。満足げに。閉じた瞳は弓なりに弧を描き、緩んだ口元は柔らかく。

喋らずとも精一杯生き、レールの外にあった、誰も気にも留めなかった物を自分の手で掴み取った瞬間、彼女は手にすることができたのだ。太陽を。

弾けた。

シスの体が光の粒子に化け、大小様々に分解された美しき生の欠片達が、風に運ばれて空へと昇っていく。地面に残されたものは何もない。

そして。

世界に溶ける。

優貴も、ナチルも、……街人達もが青空を見上げていた。

束の間の静寂。

彼等は言葉なく仕事に戻る。そこへ——腹立たしい思いは浮かば

ない。

「あの子が誰かにペタペタ触ったりするなんて、あの日は私、内心とても驚きました」

青空はどこまでも澄んでいる。

爽やかな風が流れた。

「きっと、優貴さんのことを一目見て気に入ったのではないでしょうか。人間である、ということとを別としても」

「気に入られる理由なんてなかったぞ。別に飴をあげたわけでもないし」

「優貴さんは、お友達を作るのに、まず飴をあげたりするんですか？」

視線を落とす。

ナチルは寂しげに、それでも——僅かに満ち足りた顔で、瞳の上にそっと瞼を被せていた。

「そういうことなんだと……思います」

土の山に金属が心地よい音を立てて刺さる。土が土を覆い隠す。流れて行く。雲と共に。断続的に周りから繰り返される軽快な音が。

それを耳に入れながらも、優貴は堂々と穴の中に仰向けに大の字で寝転んだ。

「私達は、別の体と記憶を持って生まれ変わります。きっとシスさん……どこかで……」

スコップの音。土が被さる音。スコップの音……

鳴りやまないBGMは四方八方から飛び込んでくる。

土が被さる音。土が被さる音。土が被さる音。スコップの音……

世界はそれでも続いていた——

第八話

翌日、ドアを蹴破るかのようなノック音で目が覚めた。

珍しくナチルよりも早く玄関に駆け寄ることができたため、未だベッドの上で寝ぼけている相方に代わって玄関を開ける。

「お前、何をやった!!」

開口一番を前に胸倉を掴まれた優貴は困惑するしかない。日の入りを見れば大体の時間は分かる。まだ仕事に出るまで二時間はあるというのに、外には街人が群れを成して押し寄せてきていた。

自分より幾ばくか年上であろう、男の黒い瞳には困惑と、恐怖と、怒りが群雄割拠しているのが見て取れた。

何となく――

外の空気が――いつもと異なるような気がした。言葉で説明できない奇妙な違和感。

手を振り解いて土の上に靴を乗せる。

辺りを見渡した。

通りを二分するかのように地面が割れていた。底の見えない黒い深淵がノコギリの刃のように、深く、大地に刻まれている。天災ではない。それは意図的のしか思えないように、民家を避けて通りの真ん中だけを切り裂いていたのだ。延々と、優貴の目で追いきれないほど先までそれは続いている。

その視線の彼方に見知った風景がないことに気づいた。

街の背景となっているのは遠くで緑に萌える山々だ。薙ぎ倒された木々が道を塞がないよう、山で活動するチームも多く存在するとナチルから聞いていた。

山の尾根が半円状に綺麗に削り取られていた。一箇所だけではない。穴ぼこだらけのチーズのようだ。連なる山々がある限り、その惨状はどこまでも続いている。そして、泣き声さえ聞こえてきそうな山達の間に昇る太陽を見つけた時、引きつった頬が戻らなくなる

くらい歪んだ顔で優貴は固まった。

ホットケーキを大口で齧り取ったかのように。

太陽は歪に欠けていたのだ。

言葉が出ない。理解の及ばない芸術を見せられているかのような壊れた風景。

「お前がやったのか!!」

それは疑問ではなく詰問だった。こんな真似ができるのは——神海優貴しかない。

「優貴さん、どうかし——」

背後から届くナチルの声にさえも反応できない。する必要もなかったのだ。

彼女もそれを見たのだろう。言葉は最後まで紡がれることなく、途切れる。

怪鳥達を前に、自分が割った大地と瓜二つの傷跡。もはや誰が犯人なのか、街人達に指摘されるまでもなく優貴自身にも分かっていた。ナチルも当然同じ結論を持ったはずだ。

違った。

彼女にとってはそのような瑣末なことは問題にもならない。責任や憎悪、あまりに下らない俗なるしがらみの一切を彼方に追いやり、やがてたった一言、自分の愛した大地が、緑が、太陽が傷ついていることに対してナチルはありのままの感想を漏らした。

「酷い……」

ナチルはいつものナチルだった。

呟きを覆い隠すように、罵声と怒声が周囲から溢れ始める。

壊れた風景に目を奪われていた優貴は、その時ようやく気づくことができた。

街人達の変化に。

優貴が初日に目にした彼等の瞳は輝いていた。仕事を終えて夕日に見守られながら帰路に着く街人達の顔は無表情でことなく味気ない。それでも……その双眸は充実感と生き甲斐が見え隠れし、誰

も何も口にはしなかったが、彼等が尊い志を持って日々を生きていることは伝わってきた。

いつからだろう。

大切な作業道具を武器として携帯するようになったのは。

いつからだろう。

最初遠巻きな視線だけであつたそれが、罵倒にまで進化したのは。徒党を組み、団結し、意思の疎通を図り、敵から身を守る。

それは優貴の知る生き物と酷似していた。

——たちの悪い冗談のような景色。原因は悩む必要もなく推測が可能だ。

昨日の今日だ。

シスのことが原因で自分の心が乱れたとしか考えられない。

驚くほど冷静に看取ることができた。非情とも取れるほど心は波打たなかった。

それでも、やはり心の奥底、抑制の利かない彼方では嵐が吹き荒れていたのだろう。

自分のこととはいえ、眠っている時ばかりはどうしようもない。

その結果がこの壊れた風景となってあらわれたのではないだろうか。「ナチル。仕事に行ってくる」

飛び交う野次を雑音として聞き流し、優貴はそっとナチルに告げた。

彼女は、この景観を粉々に破壊した元凶である自分のことをどう思っているだろうか。

「優貴さん……」

引き止められた。

決して大きな声ではない。むしろ何かに遠慮するかのように、躊躇うかのように、迷いを含んだような張り詰めた声。

その先に続く言葉を……優貴は覚悟する。

「優貴さん。……あの……優貴さん……」

互いの視線は交差しない。ナチルがその瞳を向ける方向は、彼女

らしくもなく足元だ。

口籠るその言葉を待つ。背後では欠けた太陽がそれでも一日の役目を果たそうと昇っていく。足元では悪魔の微笑む口のように、ジグザグの罫線が果てしなく続いている。

答えは用意していない。

彼女の問いの内容はもう分かっている。

自分は何と返せばいいのか。

愛すべきものを汚された彼女は、如何なる言葉をもって自らを武装するのか。

「優貴さん……！」

遂にその瞳が優貴を捉えた。

決意を固めたような、それでもたゆたう波のように揺らぐ眼差しはただ逞しい。一つの情に染まらず、様々なものを内包したそれは、ナチルが冷静に心情を吐露しようとする様を表していた。

「この——」

体が揺らぐ。

周りの喧騒が一瞬にしてやんだ。

体内の力を全て失ったかのように突如としてナチルの体が前のめに崩れ落ちたのだ。

咄嗟に訪れたその光景を前に何かを考えている余裕はなかった。

「ナチル——ッ!？」

あらゆる思考が掻き消される。

手を伸ばす。

華奢なその体が地面に激突する前に、何とか腕に抱きかかえることに成功した。

「おい、ナチル！　おい!!！」

呼吸はしっかりしている。一体何が起こったのか。

自宅の前であつたのが幸いした。優貴はとにかく気を失った彼女の体を支え、家の中のベッドまで運ぼうとする。

人並みを掻き分けて進む最中——

正面で事の成り行きを見ていた老年の女性と何気なく目が合わさった。優貴の視線に気づいた途端、彼女は、何かまずいものでも見ってしまったかのように、あからさまにそっぽを向く。

老婆だけではなかった。気になって周りに目を向けると、皆が皆、何となしに気まずそうに、居心地の悪いような表情を浮かべている。そこに言葉はない。

脳天から足元まで電流が走り抜けた。

体が麻痺する。

どこかで見たことがあるようなその光景。

まるでそれは――

「……」

ナチルの体に……異変は見えない。

呼びかけても返事をしないナチルを背負い、優貴はそのまま家の中に入ってドアを閉ざした。

外で立ち尽くす幾十人は、誰も――何もいわなかった。軽い体。

飛んだり跳ねたり忙しない彼女の体はとても軽い。どこにあのようなパワーが宿っているのか心底疑問だ。ナチルは怒る……かどうかわからないが、もっと重い方がいいと思う。その方が優貴は安心できた。命は軽いより重い方が断然いい。

風船のように空へと舞い上がってしまうくらいなら、重石をつけてでも地上に残したい。

ベッドに寝かせ、そこにシーツをかけてやる。

ナチルの顔は安らかだった。

外であのような惨状が起こった以上、ここでのんびりしているわけにはいかない。スコップを手に、少しでも埋め合わせをしなくてはならない。

なのに優貴は、椅子に座ったまま動こうとしなかった。

窓の外を見ると、何人かの街人が見張りでもしているかのように家の周りでたむろしている。

辟易しながら、視線を窓から別の物に移そうとして――

机の上に置かれた花瓶に目が止まる。

枯れていた。

ジェンが残した忘れ形見。

自分の罪の象徴ともいえるべきそれは……瑞々しさを枯渇させ、薄っぺらい藁半紙のようになりながら朽ち果てていた。

「何だよ……」

やるせない思いが全身を埋め尽くす。机に肩肘をつき、手で視界を覆った。

失われていく。

何もかも。

「……死にてえ」

「駄目ですよ、そんなことをいつては」

穏やかに。そこだけ一切の俗なる異物が切り離されたかのように、ナチルはベッドの上から上半身を起こして笑っていた。

「優貴さん――」

見れば青白さのないその顔は健康体だ。特に異常は見当たらず……だからこそ優貴は恐ろしい。

何の前触れもなく、外からはそれが分からず、それでも蝕む毒。

「優貴さん――」

何度も名前を呟くナチルはどことなく寂しげだ。

自分は今、一体どんな表情をしているのだろう。こちらを見て、目を逸らして……それを繰り返すナチルはどことなく挙動不審だ。つまり……いつの間にか攻守が逆転していたらしい。

先程のように毅然としていれば気づかなかったのかもしれないのに、ナチルにとって隠しておきたかったことが露呈してしまったことを意味する。

ヘタだ。

「ナチルは……この世界に誕生して、どれくらい経ったんだ？」

「えーっと……ですねえ……」

切り込んだ核心でこちらの意図は十分に伝わったようだ。あらぬ方向を見据えるナチル。動じつつも、まったく意に介さない風を装うその様はこんな時でなければ微笑ましかったことだろう。

「……四〇五十日ほど、でしょうか。数えてなくて。……すいません」

「それは――」

「あの、ここまで運んで下さったの、優貴さんですよ！？　ありがとうございます。どうも最近体の調子がおかしくなる時があって。……でもまさか倒れるなんて思っていなかったので。びっくりさせてしまって、すいません！　あ、それでも私――」

――？

ぽつりと湧いた疑問。

倒れる、とはどういうことなのだろう？

病のないこの世界で「倒れる」とは、一体何を意味するのか。

シスは――それこそ眠るように、日頃の彼女と全く変わらぬままの姿で――消えていった。最後の最後まで仕事をこなし、疲労も病も一切その体に巣食っている様子はなかった。

その小さな体が光の粒で包まれ、本来目にすることの叶わない「命」が具現化したかのように、残された者へ見せつけるかのように一つ、また一つと輝きが失われていき――

そこまで追想し、震えが走った。

ナチルは元気に、捲くし立てるように喋っている。

いつものように明るく、それでもちよつと困ったように慌てふためいている。

「ナチル！！」

無意識のうちに飛び出たその言葉は切羽詰っていた。だからかもしれない。

ナチルは一瞬身を固くしつつも……優貴の顔を見て何かを察したのか、すぐに表情を和らげる。

「ナチルは……急に消えたり、しないよな？」

押しつけている。自分の願望を。相手の気持ちも考えずに。弱かった。だから自分などより、よほど強い彼女はそれをベールで包むのだ。

「優貴さんも。急にいなくなったりしないで下さいね」

ヘタなのに。ナチルの心に扉は存在しない。優貴からすれば、人間からすればその中身が丸分かりなのに。

逆にナチルは優貴の心の、辛い部分をしっかりと看破し、あろうことかそこに優しく手を重ねる。同時に……求めた。はっきりと、その口で。

彼女は確かに恐怖していたのだ。

その笑顔の裏で。

緑や風ではない。彼女は優貴を求めた。ハゲタカ達に襲われた晩に、無謀ともいえる所業で蔓延る死の真ん中に飛び込み、自らの使命とは無関係の事柄に手をつっ込んだように。

もうすぐ消えてしまうであろう自分に恐れを抱いているのではないだろう。

神海優貴が、自分の元からいなくなってしまうことを彼女は恐怖していた。

変わりつつあったのは街人達だけではない。ナチルもだ。

その笑みは誰に向けられているのか。この世界に訪れた人間？

同じ屋根の下に住む同居人？ それとも全く別の何か——？

優貴が元の世界に戻ろうとしていることなど、とうに彼女は気づいていたのだ。

「ごめんなさい、優貴さん。私、何だか先から足が動かないんです。だから今日は——」

「俺が代わりに二倍のスピードで仕事してくる。たまには寝てろよ」
「……すいません。ありがとうございます」

そういつて咳き込んだ。辛そうに。何度も何度も彼女は咳き込んだ。

その苦しみは現実だった。目を逸らすことさえもできない。だか

ら優貴は尋ねた。

「教えてくれ。俺が帰ってきて……ナチルがいなくなってたら、俺は絶対お前を許さない。だから答えてくれ。本当にまだ——平気なのか？」

沈黙が落ちた。

返答次第では、優貴はスコップを捨ててつもりだった。

「私は」

そして彼女は語った。ゆっくりと。時折咳き込みながらも静かに、一つ一つ。

「シスさんよりも前からこの世界にいます」

優貴の心に波は起こらない。何となく……それに近い答えが返ってくることは予測がついていたからだ。そしてそれはナチルも同じだったようだ。優貴がナチルの心のある程度見透かしていることは気づいていたのだろう。

「前もいいましたが、私達は最期の時が近づくと何となしにそれを感じる取るそうです。……優貴さん、まだ私は大丈夫みたいです。約束します。だから、安心して下さい」

胸が締め付けられた。

自暴自棄になって暴れまわってくれていた方がまだ気が楽だった。そうすれば、そこに宿る悲しみを幾分かは共有できる。しかし彼等は、ナチルは違った。

悟っている。誰も頼ろうとしない。

当たり前のサイクルのように。ステップの一環であることを、その魂に宿りつけられている。

二人の口から言葉がなくなった。
見つめ合う。

そもそも——自分にとってナチルはどのような存在なのだろう。
この世界で最初に会った住人？ 同じ屋根の下に住む同居人？
恋はしていない。

ただどいつの間にか好きになっていた。

誰だって好きになる。

眩しい笑顔で草原を駆け抜け、子供のようににはしゃぐ少女を誰が疎ましがらうか。裏表なく、ただ元気に日々を全力で生きる少女を嫌える人間など、どこにいるだろうか。

ナチルもきつと自分を好いてくれている。

特別なことは何もしていない。ナチルに対してはデコピンをした記憶しかない。

いつの間にか仲よくなっていた。でも……そんなものなのだろう。

「いつてくる。大人しく寝てろよ」

「はい。いつてらっしゃい、優貴さん！ ……あ、どうしましょう優貴さん！ 何だか私達、まるで新婚さんみたいじゃありませんか！？」

「……本当に食っちゃもうぞコノヤロウ」

とても楽しそうに。とても嬉しそうに。ナチルは自分を見送ろうとしている。足が動かないからであろう、ベッドの上から上半身を起こし、こちらが溜息をつきたくなるくらい勢いよく手を振っている。

前までとは正反対の立場。見送る側が見送られる側に回った。

そこまで考えて、優貴は重大（自分にとっては）なことを思い出す。

玄関を開けた姿で立ち止まる。いうべきか。いわないべきか。いつてしまえばナチルもそれに気づいてしまう。だがいわなければアレが勝手に侵される可能性がでてくる。

背後で首を傾げているナチルをよそに、優貴は逡巡した後結論を出した。

ナチルを信じることにしたのだ。

「いいかナチル。あの棚の中に大量の紙が入っている。……俺が今まで書いてたヤツだ」

言葉を区切る。もう後戻りはできない。できる限り迫力がともるよう、眼力の限りを込めてナチルの瞳を睨みつけた。

「絶対見るなよ？ 絶対だぞ。絶対ッ対だからな」

「は？ ……えと……は、はい」

わけも分からずといった面持ちのナチル。

何度もしつこく念を押す。素直な彼女のことだ。繰り返した分だけこちらの本気が分かってくれていると信じたい。

落ち着いた所で、今度こそ扉から出ようと一歩を踏み出す。

瞬時に、自分が別世界に放り出されたような不安感に包まれた。

内と外。ナチルのいる世界とない世界。

しばらくナチルは一人になる。もし何かあっても誰も気づかない。とめどなく流れ込んでくる悪寒は、優貴の足に迷いを与えた。

振り返る。

どうせナチルには、怪鳥に襲われた時に自分の恥ずかしい顔を何度も見られているのだ。構わない。今更羞恥心の一つ見せたところで大して変わらない……

「ナチル」

「はい？」

あらん限りの笑顔があった。——なるほど、新婚とは面白いとえかもしれない。こんな顔で見送りをされたら、世のお父さんは会社で辛いことがあっても耐えていけるのだろう。

「俺が帰ってくるまで、勝手にどこかへ行くなよ？ 絶対だからな！」

一体自分はどんな顔をしていたのか——

ナチルは一瞬きよんとして顔を失う。

「はい。分かりました！ いってらっしゃい、お父さん！」

楽しそうな笑顔から。

幸せそうな笑顔へ顔を綻ばせる少女。

最後の呼び名はごっこ遊びのつもりか、羞恥の欠片もなくナチルは呼んだ。

背を向ける。振り返れない。どんな顔をしていいのかわからないからだ。

これでようやく仕事へ行く決心ができた。

皮肉な話だ。

受験に失敗して以来、こんなにも一つのことに夢中になったのは初めてだった。

それが夢や恋といった青春の延長上ならまだしも――

自分が、燃え尽きるかのように全力を出しているのが穴埋めという名の地味な作業なのだから。

優貴が仕事を開始してからしばらくすると街人達が到着した。すぐにノルマをいい渡される。優貴はそれに一も二もなく頷く。

膨大な量だった。

反発を予想していたのか、街人はその優貴の反応に拍子抜けした様子だった。何を勘違いしたのか勝ち誇ったようなふてぶてしい笑いを浮かべている男も何人かいたような気がする。だが、もはやその時には優貴の意識から街人達は完全に消え去っていた。

自分の出せる限りのスピードで土をすくっては放っていた。

鬼気迫る。

空気が張り詰めた。笑っていた者が皆真顔になった。

日頃、優貴の速さに見慣れている街人達でさえ、そのいつもと違う雰囲気と、五割り増しの速さに改めて目を丸くする。

憎んだり、憎み返されたり。

小突いたり、小突き返されたり。

そのような瑣末で下らないものは、もはやこの場には近づくことさえも許されない。

いいがかりをつけて仕事量を増やしてやろうと企んでいた昨日の男も、高速で作業に取り組む人間の姿を前に何も仕掛けることができずにいた。そしてそんな塵芥のような虚しい考えは、優貴を見ているうちに、五分を越えた時には既に霧散している。

街人が使命感を持って仕事に取り組むのなら。

優貴のそれは信念だった。

土と格闘する。一心不乱に熱を注ぐ。一分一秒でも早く穴を埋める。

本当なら今すぐにでもナチルの様子を見に行きたかった。だがそんなことをしてはあの少女が悲しむのは目に見えている。ナチルが動けないのなら自分が代わりに二倍働けばいい。それで整合性は取れるだろう。

鉄を突き立てる。

放る。

突き立てる。

放る。

何人かの街人達が、白々しいといわんばかりに鼻を鳴らした。景観を壊した犯人が何を必死になっているフリをしているのかと。わざとらしい。嘘臭い。

歯を食い縛る。衰えない力を常にフルで発揮する。スコップをきつくきつく握り締める。

優貴に見えるのは土と穴とスコップだけだ。

欠けた太陽が恨めしく頭上から見下ろしてくる中、何かに駆り立てられるかのように、優貴は生の全てを作業に注いだ。

やがて夕日が世界を琥珀色に照らし、街人がその日の仕事を終えて帰路につく。

一人スコップに夢中になっている優貴はそんなものは視界にさえ入らない。

一人が去り、続いて一人が去り、大勢が優貴に一瞥もくれずに去って行く。今日という一日を謳歌したことに誇りと充実を持って丘を行く。

出遅れたのか、固まって帰路に着く集団を追いかけるように、最後に残った数人が駆けて行く。

——駆けようとして。

ふ、と。

何となく。

二人の若い女性が優貴の方を振り返った。
世界を壊す宿敵を。

当然優貴はそんなことには気づかない。

ナチルのために必死に、朝から続いた作業を全力で、血涙を注ぐかの如く繰り返している。

なぜ振り返ってしまったのか、二人も後に密かに首を傾げることとなる。

声をかけるわけでもない。手伝うなどもっての他だ。何より、相手は悪だ。

それでも。

必死に一つの物事に取り組むその男の姿を見て。

彼女達は説明のつかない何かに一時目を奪われた。

すぐに我に返り、何かから逃げるかのように丘を駆けて行く。

集団へと……戻っていく。

優貴は働き続けた。

作業が終わったのはそれから三時間後のことだった。

「お前、何やってるの!!!?」

「はい!!!?」

玄関を開けて開口一番に出てきた言葉は新婚生活ごっこにはあるまじきものだった。

本当に何をやっているのだろう。

床に散らばったのは文字で埋め尽くされた紙、紙、紙。クレヨンで家の床に落書きをしまった幼子のように、ナチルは床に膝をつきながらカルタのように紙を並べていたのだ。

「お帰りなさい優貴さん! あ、これ、すっごく面白いですよ!

! これってもしかして、この世界のことを書いたお話ですか!?!」

「……見るなっただろうが!!!」

肩で風を切り、優貴はナチルの傍まできて屈むと特大のデコピンを食らわせた。断末魔のような叫び声上がるがそれは無視する。

完全に裏目に出てしまった。今朝刺した釘はナチルへ抑制をはかるどころか、どうやら彼女の好奇心をつくだけで終わっていたらしい。スコップの速さに負けないくらいの速度で、優貴は一枚一枚紙を回収していく。

「ああ、駄目です、せっかく並べたのに……！ あ、そっちは私がジーンときた台詞特集でまとめているから駄目です！ そっちは――！」

「見るなっていったじゃん俺！ お前は俺の母ちゃんかよ！」

「ごめんなさい！ でも、ずっと暇だったんです！ あ、そうだ。私、携帯電話の使い方、結構分かってきましたよ。今日お昼頃までずっと練習していたんです！」

歯痒い思いで床から書類を全て拾い上げると、重ねて机の上で音を鳴らし、揃える。

ナチルを責めたいが、暇潰し一つないこの世界を考えると、迂闊だったのはやはり自分の方だろう。

「優貴さん、元の世界でもお話を書いてらしたんですか？ それ途中で終わっていましたけど、まだ続きはないんですか！？」

「……本は好きだけど書き物は始めてだ」

溜息を吐くと棚の中に書類を放り込み、観念したかのようにナチルの前に座り込む。

「この世界にきて、最初はただ日記を書いてただけだ。けどそれじゃあすぐに終わって暇になっちゃうだろう？ 家からも出してもらえなかったし。だから……ちよっと色々付け加えてスケールの大きい日記を作ってみただけだ」

「私、妖精ですか！？ 私、可憐ですか！？」

「……たった今、その二つは削除することが決めた」

「えーーーーー！！！」

「そんなことより！ ……体は大丈夫なのか？ ナチル」

元気で満ち溢れた少女。病の方も、彼女にとりついてもさぞかし居心地が悪いに違いない。それでも――体の外と内が必ずしも同じ

であるかという、決してその二つはイコールにはならない。

トーンを落とした優貴の声から感情が伝わったのか、ナチルは爛々と輝く太陽を引っ込め——仄かに煌く月を連想させる落ち着いた笑顔を浮かべた。

「はい。大丈夫です。……あ、優貴さん。実は少しだけ足に力が戻ってきまして——」

「駄目だ……！」

反射的に。

声を荒げてしまう。

くしゃりと髪を潰す優貴の前に、困ったようにナチルは笑った。

「まだ私、何もいってません」

「自分も働きに行く。とかいうんだろ？」

「凄いです！ 優貴さんも、私のことは何でも分かってきましたね」
「駄目だ。そんな体でどうするんだよ。……寝てくれよ、お願いだから……」

付け加えた最後の嘆願が消え去りそうな声だったのは、自分の立場を振り返ったからだ。

神海優貴は、本来ナチルの行動を束縛する権利など何も持たない。できるのは、友人としてお願いすることだけなのだ。

ナチルは——静かに口を開いた。

「優貴さん。私達にとってお仕事の意味が、人間の方のそれとは少し異なることは——もうご存知ですよね？」

「……ああ」

「困らせちゃってごめんなさい。でも私、このままだと落ち着かないんです。……いいえ、正直にいうと、スコップを手に入っていないと、生きている意味すらなくなってしまうんです」

床を見つめる優貴の上から優しい声が落ちた。両手をそっと握られる。

「優貴さん——」

声も、仕草も、温もりも、きつと眼差しも、全てが柔らかい。

だからこそ、その言葉は残酷に響いた。

「動けない者は、この世界には必要ないんです」
顔を上げた。

「私はこの世界が大好きです。だから、私の体が動く限りこの世界のために何かをしてあげたいんです。それは私にとってかけがえのない幸せ。綺麗なものを、少しでも治してあげたい」

ナチルは慈愛で満ちていた。それを曇らせているのは自分であることを知った。

「私は、幸せになりたいです」

世界を違えようと、そこに息づく者達の願いは同じだった。優貴は幸せになりたい。ナチルも幸せになりたい。皆、皆幸せになりたい。

「優貴さん。どちらが先に消えてしまうにしろ、その時は——お互い必ず笑い合うことにしませんか？ 勝手にいなくなられるのはとても悲しいですけど、きちんと最後のお別れを交わし、将来のために、二人が納得して訪れるお別れなら私は……それを綺麗な思い出として仕舞えますから」

「——話、逸れまくってるぞ」

「あえ!？」

……ナチルの幸せは、最後までほわほわのために尽くすこと。それはきつと、この世界に誕生した者全ての意識として存在している。体が不自由になっている彼女を思うことは、行く道の妨げとしかならないのだ。

ならばこの世界において情とは？ 幾度となくナチルを思い行動し、空回りしたことを思い返す。価値観の異なる人間が、ナチルのためと称して行うことは所詮ただの思い上がりなのか。なら自分は彼女のために一体何ができる？

自分にできるのは壊すことだけだ。

何一つ造ることのできない哀しい存在。

「……とにかく今日はもう……眠ってくれよ。明日足がきちんと動

くのだったら……一緒に行こう」

目を合わせず、そう呟くのが精一杯だった。

「明日——ですか。私、今からいこうかと思っていたんですけど」
「はぁ!？」

本気だった。柔らかく、温和で、眉を八の字に寄せて笑うその顔には、外見からは想像もつかないほどの強い意思が見えた。水筒の中身をぶつけられたあの雨の日を彷彿とさせる。本当にどこまでも柔らかい。だからこそ——柔らかすぎて、斬ることも砕くこともできないのだ。

「ナチル——」

「う……そです！　嘘ですよ優貴さん！　だからそんな顔をしないで下さい！」

果たして自分はどんな顔をしていいのか。ナチルは慌てて、取り繕うかのように表情を変える。

彼女は本当に、体を少し持ち直したのだろう。咳はほとんど収まり、僅かではあるが歩ける。

——病がない世界において、治癒は存在するのだろうか。

なぜだか優貴には、目の前で起こる、本来ならば「救い」と呼ばれるものに嫌な予感を覚えずにはいられなかった。

ベッドに潜ると、外からは世界を洗う慎重深い音色が聞こえてきた。

雨だ。

明日にはやんでいるのだろうか。

猜疑に満ちた優貴の五感は、ありとあらゆる物から不吉を感じ取る。

優貴は眠る。

それがほわほわにおける最後の夜となった——

第九話

夢、夢、夢。

いつものように夢を見ている。

霞がかったようにその視界はおぼろげだ。

代わり映えのしない内容。何となく予備校で勉強をして、時間になったらバイトに行き、帰り、適当に本やテレビを見て終わる日々。空を見上げようなど一切思わず。

月を見て美しいなど思うはずもない。

霞は埋め尽くす。

優貴の目を、心を、魂を――

目が覚めてしまった。あたりは常闇に包まれている。

最初に心に浮かんだのは疑問だ。ほわほわにきて以来、夜中に起きてしまうようなことは一度たりともなかったのに、どうして朝になる前に意識が覚醒してしまったのだろう。

耳朶を震わせるのは激しく世界を埋め尽くす雨音。眠る前から降っていたそれは、その勢いを更に増しているようだ、もしかして睡眠を妨げた原因だろうか。

相方はきちんと眠れているのか、気になって横を向いてナチルの姿を確認する。

窓から差し込む薄暗い明かりだけが頼りだ。

もぬけの殻だった。

その事実に気づいた優貴はベッドから跳ね起きる。

「ナチル……いるのか、ナチル!？」

闇の中に呼びかけるもそれは虚しく木霊するだけだ。ナチルが寝ていたはずのベッドからは既に温もりは消えていた。無機質な冷たい感触が手を伝わって心に響く。凍りつく。真冬の風を上回る冷気が優貴の血液を完全に塞ぎ止めた。

震える。

事実を認めたくないという思い。

何度目だろう。天に昇るようにして消えていったシスの姿が脳裏に思い浮かぶ。

自分の吐息が妙に大きく部屋に響き、走ったわけでもないのに矢継ぎに、運動を繰り返す機械のように口から吐き出た。

そんなはずはない。

黙ってどこかへいくのはやめてくれと、ナチルが優貴に対し要望したばかりではないか！

「あ！」

駆け出す。行く先は、かんぬきの掛かった玄関だ。

そうだ。ナチルは何といていた？

彼女は――

「……開いてる……」

彼女は、はっきりと願いを口にしていたのだ！

眠る前にそれを願い、そして自分を氣遣って慌てて意思を押し殺したのだ！

扉を解き放つ。

途端、怨敵を攻撃するかの如く、空から舞い降りていた雨粒達が突風と共に優貴の顔を容赦なく打ち抜いた。呪詛のように風の唸りが耳に飛び込んでくる。

はつきりとした時刻は分からないが、少なくともまだ夜明けは遠いようだ。

鉛色の空には――葉っぱの葉脈を思わせるようにヒビ塗れになった真円の月が浮かんでいた。指でつついたら砕け散ってしまいそうだ。眠る前にはなかった現象だが、もはや驚きはない。

一步を踏み出したら後は早かった。ぬかるんだ土が優貴の靴底にぬめり込む。

世界が壊れていく。

それでも守りたいものがあつた。

嵐だ。

そう思ったら風がやみ、突然雹が降り注いだ。

地面が大きく揺らぐ。すると闇の中、遙か遠くで火柱が天へと昇るのが見えた。

教科書やテレビで幾度となく見たその猛り狂うかのような火山の噴火は、紅と黄が入り乱れた自然界における最大級の花火だ。

服は肌へばり付き、駆ける優貴の枷となる。風が水が大地が、あれだけ美しく輝いていた自然達が手の平を返したかのように牙を向け始めた。

彼等の守る女王は優貴の予想通りそこにいた。穿たれた無数のクレーターを前に、小っぱけな人影がたった一人で力なく動いている。十分おきにその素顔を変える天候は、今は風のない強雨だ。靴の中にまでたつぷり水の染み込んだ足で優貴は最後の丘を下る。

少女はゆつくりと、スコップで僅かな量の土をすくい、一息つくど、全身をバネにするかのように身を引き、反動をつけてそれを放る。作業スピードは格段に遅く、その量は格段に少なく、日が暮れるどころか、丸一日経っても成果は知れているであろう虚しさを予見させる動き。明らかにおかしい。街人達の動きが優貴に比べ遅いのは知っているが、今のナチルはそれ以下だ。

それを見て優しくなどできるはずがなかった。

「ナチル!!!」

雨音を切り裂くように、優貴の鋭い声は薄暗い草原に響き渡った。びしょ濡れになりながら背を向く少女の表情は分からない。それでも、動力が切れた人形のようにその手の動きが止まった。

歩いて行く。

その歩を詰める。

可愛らしいその服は、雨で洗い流された泥が染みとなり見るも無残に汚れている。

振り返った。

諦念で満ちた顔が闇の中に儚く浮かんだ。

「……えっと……ごめんなさい、優貴さん。朝までには家に戻って、何事もなかったかのようにするつもりだったんですけど——」

「どうして！ 何やっているんだよ！ どうしてこんな雨の中まで！」

「やっぱり……駄目ですね……。少し回復したと思ったんですけど……この手足では、満足に働くことができないみたいです」

スコップが地面に落ちた。

ナチルは優貴を見ない。自分の手を見つめ、寂しそうに微笑んだ。
「……何だかおかしいんです。私の体。私は沢山の方の最期を見てきました。皆、最後まで必死になって働いて、頑張って頑張って、そして……その時を迎えるんです。こんな、私のように、部分的に手足が動かなくなるなんて……おかしいんです」

悔しかった。

自分がこの世界にきて、ナチルと共に笑いながら日々を過ごし、それでも結局、彼女の生き方に何の変化ももたらすことができなかったことに。

「優貴さん。私はもう——」

小さな声なのに。それでも届いてしまう。きっとそれは意思の力が強いからだ。

「消えてしまわなくてはならない存在のようです。少し作業をしてみても、それがはっきりと分かりました。手足が満足に動かないのなら、私と別の方を交代しなくては——」

「どうして、そんなことをいうんだよ！！ それじゃあナチルの人生はどうなるんだ！！」

「私はこの世界のために生きていますから。沢山ご奉仕もできました。後はもう、優貴さんと、きちんとお別れを交わし、次の方にある家を譲るだけです」

次の方——

その言葉は優貴の心を深く切り刻んだ。どうしてそんないい方が

できるのだろう。

ナチルの、シスの、ジエンの考えは分かっていたつもりだった。なのに……優貴は永遠に慣れることはできそうにない。絶対に、馴染んでほしくない言葉だった。

「もう百日は生きたのに、どうして私の体はこの世界から離れようとしなんでしょう……。体はおかしくなって、まともに仕事一つできず、だけど終わりを迎えることができない」

死にたがっている。

ナチルは最後までこの世界のために生きようとしている。

それが幸せなのた。

……意識的の動作か。

……無意識なる動作か。

その細い喉に添えられた、優貴の手は誰の意思によるものだろう。震えを止めるかのように、その暖かくか弱い首に巻きつけられた両手はどんな意図なのだろう。

「そうですね……」

まだ彼女の声は出た。優貴がその意思を固めずに浮かせているからだ。それでも、ナチルは臆するどころか、ある種の納得のような頷きを返した。

「理由は分かりませんが、私が死ぬことができないのなら……もしかしたら優貴さんは、そんな私をこの世界から消すために神様が使われたのかもしれないね……」

意思が溶ける。

降り注ぐ雨は神海優貴を流し、溶かし、別の何かへと変えていく。今自分が行っている行動の真意が、あの邪悪なる意思であるという確証が持てない。封じ込めたつもりでいた。肥大化するそれは、我慢さえすればすんでの所で抑えられると思っていた。

心を覗く。

既に邪悪は消えていた。跡形もなく去っていた。

ナチルを殺したくない。

それでも殺すことが救いならば――

雷鳴が轟いた。

閃光と共に夜空を彩るのは紅。彼方で火花が散った。唸る大地と轟音は、再びどこかの火山が爆発したことを息づく者全てに伝えていた。

きつと天災を引き起こしているのは自分だ。

だが邪悪など心の中をいくら見渡しても存在が見当たらない。

なぜなら既にそれは――

心を離れ、優貴の体の隅々にまで行き渡っていたのだから。

理性が囁く。

ナチルを壊すために自分が存在するのならば。

世界を壊すのはやり過ぎだ、と。

雨は降り続ける。

涙のように。

「壊れているのは……ナチルだけじゃないんだ。……俺もなんだよ……」

未だ両手に力を込めることはできない。

ナチルは首に巻かれた戒めには微細なる注意も寄せず、優しげに言葉を紡いだ。

「苦しいんですか？」

「怖いんだ。ナチルを……殺したい、殺したい、と願う自分が。どんどん欲求が膨れていくんだよ。狂ってる！ もう俺も、とつくに壊れてしまっている……！ 何なんだよ……この手。これ、俺が望んだのか!？」

「……私は構いませんよ……？ 優貴さんのことは大好きですから。私なんかで優貴さんの心を静めることができるのでしたら本望です」
ナチルはとうに、優貴の底に眠っていた黒い影に気づいていたのかもしれない。告白に驚くこともなく、むしろいたわる様に、優貴の欲望を受け止めようとする。
ゆっくりと。

十本の指に力がこもり始めた。

蛙が鳴いたような声が……

目の前の美しい少女から漏れる。

ナチルは瞼を閉ざした。

優貴の頭はもう罪悪感に包まれることはない。ありとあらゆるお膳立てが整っていた。死を望む少女。死を与えたい自分。互いの願いが一致している今、何を躊躇うことがあるだろうか。

——だからこそ優貴は気づけなかった——ことを行う前、少女の肩が僅かに震えていたことに。

自分は所詮、ただの死神でしかない。ナチルのいう通り、彼女を殺すためだけにこの世界に存在している。救いになる破壊があるのなら、自分はそれに飛びつく他ないのだ。

やがて。

優貴は何も考えなくなる。

少女は最期まで綺麗だった。

苦しみを我慢しているのだろうか。呻くことも抵抗することもせず、満足げに微笑む口と閉じた瞳は、世界からの解放を待ちわびている。

優貴の手に、より一層の力が込められる。

膨らませた袋を意味もなく潰すように、指先一本一本に死の意思が宿る。

搾り出すような、苦痛を吐き出すような咳がナチルから漏れた。

それでも瞳は閉ざされたままだ。

もう少し。

もう少し。

無感情にそれを行っていた優貴に、些細な後悔がよぎる。

——座ってソレを行えばよかった。

なぜなら。

既にナチルは自らの体を二本の足で支えることも難しくなったのか、ふらつくように、足が夢遊病者のように動き始めたのだ。

滑稽な舞踏は、少女の生における最後の演舞。

きっと彼女は——もう少しで——消える。

足の動きは一層激しくなっていた。

苦しさを首より上では見せない。代わりに下であられる。

その時。

優貴とナチルしかいないこの場に。

それ以外の何かが、水分をたらふく含んだ草の上に落ちる乾いた音が響いた。

第三者の登場により優貴は意識を引き戻される。ナチルはそんな瑣末な音は耳にも入らない。

少女のすぐ横に——それは落ちていた。

「……」

冷たい両手が、少女の首筋から離れた。

「ゲホオッ！！！？……ゲホッ！！　コホッ！！」

途端崩れ落ちるナチル。地に尻をつけ、何度も何度も生を手にしようと咳き込む。空っぽになった肺が一拳に酸素を求めた。

十字架を見た吸血鬼のように。

闇が光を直視したかのように。

優貴は、肩を震わせて、後ずさる。

ナチルは息を整えながら、その視線の先にある物に気づき目を落とした。

濡れていた。

その笑顔は。

開かれた携帯電話の待ち受け画面には、眩しい笑顔を浮かべる六人の男女がいた。

神海優貴は、はちきれんばかりの笑顔で輝いていた。

液晶画面には空から落ちる水滴が容赦なく降り注ぎ続ける。

別世界の優貴を塗り潰すかのように、水の彼方に消し去ろうといわんばかりに、雨は飛び交う。

泣きたくなった。

心が復活してしまった。

元の神海優貴は、今の神海優貴を見てどう思うだろう。
何が救いだ。

自分がやっていることは、結局ただの人殺しではないか。
心は少女を殺せといっている。

もうできなかった。

しゃがみ込む。

生きても周りを壊すことしか知らない。唯一の意義である殺しも
できない。

「半端にもほどがあるだろ……ちくしょう……」

空が激しく瞬いた。雷鳴が天で唸り声を上げていた。大地は苦悶
の叫びを轟かせた。

フラッシュに照らされ鮮明に現れたナチルの顔は。

無だった。

闇の帳が落ちる。

世界は優貴の心の鏡だ。あらゆる悪天候が空を支配し、そのとば
つちりは地に及ぶ。

ナチルを消し……

自分も消える。

それがきつと、ほわほわにおける一番の平和だ。

後ろ向きなこの考えを、もう実行に移さないといけない。

「優貴さん！」

再び鈍色の空が光る。

啞然とした。

劇の舞台の幕が降り、僅かな間の後に開いた先に存在する景色の
ように――

雷に照らされたナチルの顔は真逆に、いつもの無垢なる笑顔に戻
っていたのだ。

元気な呼び声。

精力的な雰囲気。

心底の心配をしてしまう。

まさか、本当にナチルが壊れてしまったのか――

「今からピクニックに行きましょう！」

いった。

寸分違わず。

あの時と同じ声で。

優貴はナチルに近づいていく。輝きがなかりうとも、その顔のシワの一つ一つさえが見えるほど近くにまで。

同時にそれは、自分の顔がナチルに見られることも意味していた。
「優貴さん……。とうとうナチルがおかしくなってしまった、とか思っていますか？」

「……ああ」

「そんな……！」

返事を返せない。会話の流れに乗ることもできない。

双方の望みが破綻した今、なぜ彼女は笑顔を浮かべていられるのだ。

ここで起きた一連の殺人未遂から、一体彼女は何を得たというのだ。

彼女は自らの仕事に誇りを持っている。それができないなら、容易く死を選べるほどに。そんな少女が、いとも簡単に死を手放すとは思えない……

「お前……大丈夫か……？」

「……優貴さん……真顔でいわれると、私ちよつと辛いものがあります……」

ナチルは横に落ちていた携帯を拾い上げて立ち上がると――

「あ――れれれ――？」

風に吹かれて飛んでいく落ち葉のようにその軽い体を一回転させて、力を失ったようにへたり込んでしまった。

そこに――茶化すような言葉はかける気にもならない。

引きつったような笑みを浮かべるナチルの顔が、全てを物語って

いたからだ。

「動けないのか？」

「……はい。というより……立てないみたいです」

「どうするんだよ、ピクニック」

「えーと……」

ロクでもないことを考えていることは間違いないだろう。

そしてきつと、子供が考えつく兎戯のようなことだ。

正常な思考を持つ人ならば、豪雨の日にピクニックに行くなどいい出さない。

半ば投げやりに、半ば適当に。

優貴は体を動かす。

ナチルの考えが全く読めない。ならばもはや、それは考えるだけ無駄となろう。

殺し損ない、殺され損なった二人だ。何が起ころうと恐怖も驚愕もきつと起こらない。

何となく、空っぽになってしまった自分が分かる。遠いどこかの自分が自分を見つめている。

既視感。

ああ。

遂に、現実の世界と夢の世界が繋がったわけだ。

「でも、これはおかしいだろ」

「すいません。……ありがとうございます。何だかこそばゆいです」
優貴の両腕の中には、折り畳むような格好で、宙に浮いたナチルの体が収まっていた。

平たくいえばお姫様抱っこだ。

「どうしておんぶじゃ駄目なんだよ。こんな所誰かに見られたらバカみたいじゃないか」

もはや恥ずかしいとも何とも思わない。それでも、生じた疑問を口にするとなぜかナチルは落ち着かない様子でもぞもぞと身じろいだ。

「それは、その！ あの手——押しつけちゃうじゃないですか——」

「はあ？ そんなの恥ずかしがるタマかよ、ナチルが」

「優貴さん。私これでも花も恥らう乙女ですよ？」
軽い。

何と軽い命だろう。

落としたらコナゴナに碎け散ってしまう硝子細工のよう。

地面はぬかるんだ泥塗れ。服も髪も、全てが容量満杯までに水分を吸い上げ、その体は鉛のように重い。豪雨は果てしなく、瞼に付いた水滴をナチルに拭ってもらうような有様だ。

濡れ鼠はゆっくりと歩き出した。

ピクニツクの始まりだった。

最終話

「あ、見て下さい優貴さん！ あの花とっても綺麗ですよ！！」

「優貴さん優貴さん！ ほらほら！ 丘が果てしなく続いているように気持ちよくありませんか！？」

「凄い！ 川が光を浴びて反射していますよ優貴さん！！」

数秒おきに耳元で鳴り続ける騒ぎ声は、優貴の心に静寂なる安寧を与えるには程遠い。一体何が楽しいのか、あっちへこっちへと指を指しては瞳を輝かせて捲くし立てる。

晴れた。

なぜか朝日が昇った。

時刻は午前三時をさしていた。火薬の籠っていない大砲で半身を打ち抜かれたような、奇妙な芸術を思わせる太陽が暖かな日差しを世界に降り注いでいた。

優貴はゆっくりと丘を登って行く。

ナチルの指すがままに行くと、気づけば知った道に出ていた。

辺りを埋め尽くす緑は、人の手から離れた独自の空間を作り上げている。

あの日通った森林だ。雨が上がったせいか、瑞々しい草のにおいで辺りは満ちている。

見上げる空は果てしなく青い。

自分がこの世界にきて、一体どれだけの月日が経ったのだろう。

だがそれはもう終わりに近づいている。

何かが、色々なものが、もしくは全てが、終わろうとしている。

「そういえば優貴さん。あの書いていらした物語のタイトルを私まだ聞いていませんでした」

「いきなりだな。……ナチルにつけてもらおうとしたけど失敗したからな。まだ決まっていらない」

「え！？ 私……？ ……まさかと思えますけど——」

「あまりに意味が分からなさすぎて却下したぞ」

ナチルは石像のように固まる。

……自嘲する。この世界で自分が生み出した物は、家に残した数十枚の紙切れだけなのだから。

あ、と思った時にはもう遅い。迂闊だった。

形作った自分の顔は、作ったそばからナチルに見られてしまう位置に存在していたのだ。

「死んで、別の存在となって生まれ変わって、また死んで、別の存在となって生まれ変わる。私も、ジェンさんも、シスさんもその在り方は永遠に変わることはありません」

一体何の話だろうか、優貴は訝しげにナチルに視線を寄せる。何か大切なものを、宝物をそつと友達に見せる子供のような、小さな温もりがその顔にはあった。

「それでもいい切れます。前の私も、その前の私も、その前も！こんな風に誰かと一緒にピクニックに行って、笑い合って、時々かわれるなんてこと、今までありませんでした！　こうやって一緒に道を行くだけであの日の思い出がどんどん心の中で湧いて出てくるなんて、優貴さんがいかに私の中で大きな存在なのかを今改めて思い知っています」

湧いて出たのは思い出だけではないようだ。冗長に、ナチルは捲くし立てていく。それは優貴の心に積み重なっていった。

「私、優貴さんが大好きです！　シスさんも、ジェンさんもきつとそうでした！　優貴さんは何も持たない私達に光を与えてくれたんです」

「……お前達三人限定だろ。そりゃ、近くにいれば仲よくもなるさ」「いいえ。何だか最近――皆、変わりました」

いつの間に話に気を取られていたのか、あやうく躓きそうになり慌てて優貴はナチルを強く抱く。

「あ……何だか嬉しいです。今ギョッと掴まりました」「そりゃ転びそうになったからな」

ナチルは歩いてきた道を振り返った。背後ではゆっくりと景色が流れていることだろう。

「街の皆さんも変わりました……。内容は、優貴さんに辛く当たるだけなので正直、あまり心地よいものではありませんけど、それでも以前のように機械的に日々を過ごすことがなくなりました」

——それは、優貴もいつか考えたことであつた。

「何だか、まるで歯車を一つズラされたような。それで皆、否応なしに、ものを考える必要性が出てきて、お互いでお話したり相談したりしながら問題を解決して——」

「……美味しいリングの味を覚えてしまったら、あとは墮落するだけだろ。少なくとも、以前はこの世界のためを思って働き続け、疑問のない毎日を送っていたのに、その日々が終わってしまうんだ」

「でもきつと、その分楽しさや嬉しさを覚えていくと思うんです。それって、素晴らしいことだと思いませんか？ だから私思うんです。この世界の神様は、私達を憂いていた。けれど一度設計した舞台は簡単には崩せない。そこで、神様の使者を使わせて、内からゆっくりと変えていこうとした」

「前から思っていたがお前は神様を信じすぎだ。もつと疑えよ。どうして神様が善人だって決めつけるんだ。いっておくけどな、俺の世界の神様はそんな上等なモンじゃないぞ」

小川を横目に進む。

魚が見えないのは時間帯の問題だろうか。取って食おうかと思うくらい水の中を泳いでいたのに、今は一匹たりともその姿がない。

太陽に照らされた森の中も、以前と比べると不自然な透明感で覆われていた。

上手く表現できない。息づく生命が存在しないような。静かなのではない。皆が息を殺しているのでもない。気配が、物音が、胎児を失った母のように、それ等が失われているのだ。

「覚えていますか？ 前ここを通った時は、その道端には沢山スミレが咲いていたんですよ？」

「……そうだっけ」

「あんなに綺麗なお花を作った方が、悪い方のはずありませんよ。自然を愛する心を持っているならば、その心の中にはきつと綺麗なお花畑があります」

どこことなく寂寥感を覚える木々の間を抜けて行く。

緑の葉達は、うな垂れるかのように佇んでいるように感じる。青く瑞々しくとは程遠い。本来、木々の一本一本が生い茂って森になるはずのそれが、まるで森を作るために仕方なくそこに木々が集まったかのようだ。

無機質で——乾いている。

それでも、怖くて自ら触れることはできない。

「……そろそろ話してくれよ。どうしてこんな所まで俺を連れてきたんだ？」

「優貴さんとお話したかったからです」

一抹の曇りもなく、ナチルはいい放った。その言葉に照れてそっぽを向くのは優貴の方だ。

「他にもあるんだろ？ いい加減話させて」

「それと同じくらい大切なことが——あ、ほら優貴さん！ 頑張って下さい、もう少しですよ！」

泥塗れの靴を動かし、ナチルに枝や葉が当たらないように気遣い、ゆっくりと、ゆっくりと上り続けたその終着点が遂に姿をあらわそうとしている。

抜けた。

木々の織り成す最後のアーチをくぐった先に見えたものは。

光と緑。

安堵する自分がいる。

変わっていなかった。

そこだけは……変わらぬ姿のまま残っていた。

開かれた丘だった。

ナチルと寝転んだ緑の絨毯は、雨露を受けて至る所で光を反射し、

輝きを見せていた。

「ひゃあーーーーー!!! きれーーーーー!!!」
「うおっ!？」

ナチルが優貴の腕から宙へとダイブする。危ない、と優貴が制止する間もなく、ナチルは水気をたっぷり含んだ天然のクッションへと飛び込むと、両手両足を伸ばして転がり始めた。

すぐにその顔と服に、水滴と、土と草木がこびりついていく。

「花も恥らう乙女ね……」

サイコロを思わせる不可思議な動きを停止させたナチルは仰向けに転がる。

両手を虚空に向けて伸ばし、彫像のように固まった。

優貴はその隣にそっと腰を下ろす。

「川も、草木も、花も、優貴さんは一度きただけなのに全部覚えていてくれたんですね」

優貴の視線は果てなく続く丘だ。ナチルはきつと――空を眺めている。

「ここにくる途中、優貴さんの目はキョロキョロしていました。何度も通っている私からすれば、優貴さんがどんな花を探しているのかも分かってしまいました。……やっぱり優貴さんは優しい方です。ちよつと意地悪な所もありますけど」

本当に……小賢しい。一人はしゃぐフリをしながらも、しっかりと抑えるべき所は抑えていたというのか。一本取られたようで悔しく、あえて返事をせずに押し黙る。

「この美しい大地を守って下さい。優貴さんの世界と、ほわほわにおける死の概念は違うのだと思います。木の枝で熟した実が腐り、やがて土の上に落ち、それはよき土の肥料として飲み込まれて、その養分を吸い上げた木は一年後に新たな実を枝に幾つも幾つも実らせる。私は……消えません。この景観を守るために再び生まれ変わるんです。だから優貴さん。ほわほわでは、死は悲しむべきことでも、ましてや悪ではないんです」

よく晴れた日に、丘を眺め、雲を見送り――

本当に気持ちいい。

何と――素晴らしき世界だろうか。

「自然を守るために、綺麗な景色を壊さないために――私はもう消えなくてはならないんです」

ナチルは、その身も、その声も。

「優貴さん。私を、殺して下さい」

空に溶かしてしまうかのように全てを風に託した。

……それでも、お互いの視線は交差しない。

ナチルはうつとりと空を見つめ――

優貴は半ば意地で丘を見つめ続ける。

「私みたいな症状は例がないので、たとえば高い崖から飛び降りれば私も消えることができるのかもしれないですけど……そんなの嫌じゃないですか。その……消える時は、私の大切な方に見送られて――逝きたいんです」

「ナチルは何のために生きた……」

小難しい問いを、呟くように、独り言のように、優貴も風に流す。
「毎朝決まった時間に起きて、働いて、帰って眠って、それを百日繰り返して――ナチルの生にどんな意味があったっていうんだ……」

「何いつているんですか、優貴さん」

一際大きい、それは生涯を全うした人間の、悔恨の一欠けらさえ見当たらない澄んだ声。

「私は幸せ者です！ 優貴さんと一緒に生きることができました！
ピクニックにいったって、お話して、いじわるされて、こんな気持ち、こんな感情初めてでした。私は元々変わり者でしたけど、優貴さんが現れてすぐに、とっくにおかしくなっちゃってしまっていたんです。スコップ一本で鳥達の中に飛び出していくなんで、今考えてもぞつとしますよ！」

「だから！ それにどんな意味があるんだよ！ 結局俺はナチルに何も――」

「沢山の楽しい思い出が蘇ってくるんです。これ、私の宝物ですよ！ それにですね、優貴さん。あの——これ、いうつもりなかったんですけど。本当はいわない方が格好よかったんですけど、やっぱり正直にいっちゃいますね」

丘を見るのはやめていた。優貴の視界は黒だ。まるで遺言のようなそれを隣で聞いているうちに、居た堪れなくなつて、いつの間にか俯いてしまっていた。それでもナチルの言葉は続く。どこまでも明るく、楽しげで、何ら変わらぬ日々がこれからもずっと続いていくかのように。

「前々からちょこっとだけ予感があったんです。でも、ここにくるまで優貴さんにずっと抱きかかえられて、一緒に森林を上っている時に——確信してしまいました。ちょっただけなんです、本当にちょっただけなんですけど、私——」

「……」

「——優貴さんと、ずっとこのまま一緒にいたいな、て。……あの、本当にちょっただけです！ 別に死ぬのが嫌になったとか、そんなことじゃないんです！ 心置きなく死ぬるよう、この世界にはしがらみが存在しなかった。でも私は、自分でそれを作って——見つけてしまった」

「ナチル」

優貴は遂に振り向いてしまう。

ナチルの声は徐々に徐々に変化していた。

明るく、元気で、楽しそうで——それなのに。その奥に、裏側に押し殺した何かが存在している。

空に捧げられた両手は、いつの間にか彼女の視界を覆う障害物となっていた。

あの単純で無垢で裏表ない少女が、いつの間にここまで——

やはり、それは——似ている——

「ついさっきまで全く分かりませんでした。優貴さんにギュッとされた時かもしれません。その気持ちに気づいた時、私何となく死ね

ない理由が分かってしまったんです。死ねないんじゃないくて、きつと私が死にたくないからなのだと。私、この世界で罪を犯しました。優貴さんの腕に抱かれた時から、何だか少し苦しいんです。罰を、神様が私に罰を与えたんだと思います」

「何だよ……それ……」

「優貴さん。やっぱり私、もう正常じゃないんでしょうか。おかしいです。ほわほわが大好きなのに、優貴さんと一緒にいたくて、死にたいのに死にたくない。我侬で、矛盾してます……」

「まるで……人間みたいだな。我侬で矛盾してて、世界で一番、変な生き物」

「え？」

ナチルが優貴の瞳を正面から捉えた。――単純に、寝転ぶナチルが視界を閉ざしていたその腕をどかしたら、そこには太陽を隠し、代わりに優貴の顔があったというだけだ。

「だってそうだろう？ おかしくなんかない。先からナチルがいつていることは、俺達人間と何ら変わらないことじゃないか。欲塗れで、自分勝手に」

押し寄せる波に堪えるように――

彼女は笑った。

「私、悪い子になってしまいました」

そして物音がやんだ。

虫の鳴き声も風のせせらぎもない。二人の会話が途切れ、麗らかな春の日差しを思わせる丘の上は一切の静寂に包まれる。

まさにそれは優貴の心の裏返しだった。

……と。

理解してしまう。

もう今の自分ならば……ソレができてしまうことを。

全身が粟立つ。両手が歓喜で震えた。

彼女がなぜここに自分を連れてきたのか、優貴にはもう分かっていた。

ナチルも最後に確かめたかったのかもしれない。優貴の心にどれほどの量の花が咲いているのか。

支離滅裂なことを述べるのなら。

今、横手に広がっている丘の景色はナチルだった。

目の下にいる人影もナチル。その空も、大地も、風もナチル。

願ひ。望み。……一心同体。

こうして喋っているナチルを軽んじ、蔑ろにすることが目的ではない。

ナチルはそれ等と同等に軽く、そして重いのだ。

——元の世界にも存在する答えのない問題。重い病におかされ、回復の見込みのない病人を楽にさせてやるべきか否か。中身は違えど質は同じだ。

ナチルは——その肩を微かに揺らせている。

手がゆっくりと動く。

迫るそれを見守るナチル。

静かに、蠅が止まるほどの速度で、この世界で最も闇に近い手の平がか細い喉へと向かう。

いつそ一思いに、誰かが見ればそう叫んでしまうほどの残酷さ。たまりかねてか、ナチルの瞳はあからさまに強く、きつく結ばれた。

「……そのまま目を瞑ってろ」

中睦まじい恋人のように、優貴は愛しげに囁き、ナチルは頷きを返す。

どしゃぶりの時にしたそれとは決定的に異なっていた。

理解の及ばぬ常識を押しつけられるのとは違う。

守るのだ。

ナチルの全てを——

神海優貴は悟る。

自分がいつの間にか恋をしていたことに。

そして散らすのだ。

自らの手で。

ジェンに土下座する理由が更に追加される。

優貴の手はナチルの首を逸れ、その小さな額にそっと当てられた。

「優貴さ……あ……」

疑問を口にするまでもなく、ナチルは気づく。

媒介とした優貴の手を通じ、自分の中に流れ込んでくる何かに。

それは願いだった。

優貴が、ナチルの死を願った瞬間だった。

生粋の破壊者は、刃物を持つ必要はない。相手の頭や心臓を貫く必要もない。

願う。思う。

世界を破壊したように、優貴はナチルの消滅を願った――

「優貴さんの手の平。何だか……ぽかぽかしてとても暖かいです。気持ちいい……」

「んー、そうか？ ま、そのまま眠っても構わないぞ。置いて帰るから」

「酷いですよ優貴さん。あー……でも本当に暖かい。あったかいな
ー……」

「お前の頭も温かいよなあ……」

「あ。ありがとうございます」

「……褒めてないって」
ゆっくりと。

光のつぶてがナチルの体から浮かび上がってくる。

少女はいわれるままに目を瞑っている。

満足げに。とても気持ちよさそうに。

一つ、二つ、三つ……。球体は美しく、眩く、正にナチルを構成する欠片だ。

シャボン玉のように、気ままにのんびりと、青空へ昇り始めた。

「ナチルー」

「はい？」

「この世界を滅ぼしちゃったらゴメンな。ジエンとシスが死んだ時だって酷かったんだ。悪いけど俺……お前が死んだら、この世界を憎みまくと思う」

「——優貴さん」

しよぼくれたような情けない声。ナチルの、腹の上で組まれていた手が持ち上がる。無造作に優貴の頬を、鼻を、目をなぞっていく。
「……何やってんだよ」

「えいっ」

痒くなるような優しい衝撃。

発生源は優貴の額だ。

「——よく分からないけど、デコピンをしたいのなら見本を見せてやるけど？」

「いやああああ————！！！！ やめて下さい——————！！」

額の上に乗せた手の形を変形させる前にナチルから全力で白旗を振られる。

呼吸を整えるのにそこから幾ばくかの間を必要としたようだ。

——何をやっているのか。

「ほわほわを壊したら承知しませんからね、優貴さん。絶対にやめて下さいよ。これは私との約束です」

「善処はする」

重く。

鉄の枷よりも遥かに響く重量を持つ塊が心に落ちる。

死に行く人間との約束。

さらっと、笑顔で何を約束させるのか。

デコピンの報復だとしたらあんまりだ。

「あとは——えっと……あ、そうそう！」

案外ナチルは欲深かったようだ。彼女の心に広がる花の種類は、手足の指を全て使っても数え切れないらしい。

「ほわほわ、絶対に採用して下さいね」

「何だよ、まだ根に持っていたのか。……そもそも何なんだよ、ほわわわって。意味が分からないじゃないか。ニュアンスでつけられなくても困るんだよ」

「でも、この世界を一言で表すならやっぱりほわほわですよ」

「悪いけど、人間世界じゃ受け入れられないな」

金色の泡は既にナチルの全身から浮かび上がっていた。顔も、胸も、手も足も、生命がゆっくりと、広大な空をたゆたうように、気ままに昇っていく。

「あ」

それを見送って――

優貴の頭に一つの言葉が浮かんた。

「なあ、ナチ――」

振り返って、その言葉を失う。

泣いていた。

笑顔のまま、それでも肩を小刻みに震わせて、ナチルは閉じた瞼の隙間から涙を耳へと零していた。

「優貴さん。私、ずっと優貴さんと一緒にいたいです……」

その声を受け、優貴はナチルの額から自分の手を――

「……そっか」

どけない。

分かっている。

これはこの世界において、レールを外れた者が神に送る最後の懺悔なのだ。

「優貴さんは私と一緒にいて楽しいですか？　これから一緒にいてくれますか？」

「何いっているんだよ。お前、俺に惚れるわけないっていったじゃないか。今更ずるいんだよ」

「……？　何か勘違いしてますか優貴さん？　私別に、今も優貴さんに惚れてなんていませんけど？　ただこれからも一緒に――」
最後のデコピンを放つ。

死にかけの少女に特大のトドメを刺した。

期待した通りのけたたましい断末魔。

絵に描いたような小春日和の丘に、不釣り合いなる叫びが木霊する。
そして――

笑った。

おかしくて、あまりにバカバカしくて、最後まで何やっているのかと自問自答して。

ナチルは涙を零しながら口を大きく開いて笑い。

優貴はそれを越えるくらい、腹から声を出して笑った。

黄金の輝きはとうにピークを過ぎ、もはやその勢いは切なく、痛々しい残滓となってあらわれる。

「優貴さん優貴さん、これが最後です。最後をお願い、いいですか？」

「どうせ拒否権はないんだろ。何だよ？」

「――目、開けていいですか？」

ナチルの下半身は既に光と融合していた。先端から、溶けるように体が瞬き、粒子のように分解され、昇っていく。

侵食速度は速い。

頭に到達するまで、二分とかからないだろう。

「いいよ」

眠り姫の瞼がそっと開かれる。

定番通りの流れでそれを行えなかったのは残念だ。

ナチルは自らの足元に目を向けるようなことはしなかった。

宙に溶けていく輝きさえも一顧だにしない。

真っ直ぐ。

穴が開くほど。

ナチルは優貴の顔だけを見つめていた。

「いい笑顔ですね、優貴さん。その顔とてもステキです。その顔大好きです」

あの携帯の待ち受け画面の顔はどのようなものだっただろうか。

無理はしていない。

なぜだろう、もうすぐナチルが消えてしまうというのに、どうして自然に笑顔を浮かべることができているのか。

それに負けないくらい向日葵が手元で咲いた。

「私だけの笑顔ですね！　今まで見た中で、一番の優貴さんです！」
太鼓判を押されてしまった。

この少女は自分に何かしただろうか。

イライラしたり、不快な思いをしたり——感情のままに殺しそうになったり。

一緒に買い物に行ったわけでもない。食事だって、カラオケだって、遊園地だって行ったわけでもない。

ただ、そこにいただけだ。

いつも隣にいただけだ。

たった、それだけで——

ああ。本当に笑える。

「世界は美しいんですよ。そしてその世界には、優貴さんも含まれています」

「ナチル。お前って実は凄いヤツ？」

光が少女を運んでいく。足が消え、スカートが空に溶け、ブラウスにまでその聖なる侵食は進む。

消える。

ナチルが消えていく。

「優貴さん」

その声に反応したのは優貴だけではなかった。

主の言葉に応じてその進行を中断したかのように、ナチルの肉体を攫っていく光達は歩みを止める。

「考えてみたんですけど、最後に首だけが残ってしまうのってグロテスクじゃないですか。だから——」

茶目っ気を見せたのか。

素なのか。

最後の最後まで変な心配をする少女だった。

「もう、行きますね」

特大の涙を溢れさせ、空へと羽ばたこうとするナチル。もはや空と地を結ぶ糸は絆だけだ。

断ち切るのではない。

その見えない心さえも世界に解き放つのだ。

「ナチル」

だったらついでに、これも持っていてもらおう。

このどうしようもない青臭い気持ちも。

街人達が良きリングの味を覚えた中で、自分はどうかやらハズレのリングを引いたようだ。

「俺、ナチルのこと好きだぞ。実は俺が惚れてた」
笑顔。

先程二人で笑い合った時の顔とはまた別の何か。可笑しさから作られる顔の綻びではない。

見る側の方が思わず恥ずかしくなってしまうような――

頭の中に永久に残しておきたいと思うほどの、幸せそうな顔だった。

「ありがとうございます!!」

ナチルの全てが光に包まれる。

可愛い顔が、綺麗な首が、自身の生の象徴でもあったその両腕が。命の欠片へとその姿を変える。

彼女が心より愛したその風にそっと抱擁され――

幾度となく褒め称えた太陽に見守られ――

ナチルは世界の一部となる。

地に残すものは何もない。

名残惜しむように。

優貴に別れを告げるかのように。

ふわふわと。

世界へ還っていく。

草木に、川に、大地に、風に、空に、優貴に。

愛した者全てに見守られ、看取られ。

ナチルは生涯を終えた。

「ありがとう……て。それだけかよ、お前……」

最後の煌きが空から消え、優貴は溜息交じりにどっかりとあぐらをかく。

「つまり俺は、またフラれたのか」

中指で空気を弾いた。

その答えを返す者は、もうどこにもいなかった。

そして空間に亀裂が入った。

この空が全て硝子でできているかのように。

ピシリ、と。パキ、と。

存在が碎ける儚い音が世界の全てから響き渡った。

割れた鏡のように。

青空には黒い罫線が縦横無尽に、歪な蜘蛛の巣のようにその触手を伸ばしていった。

緑の丘が一斉に茶に染まる。

瞬時に草木が死に絶えた。

「……」

優貴は静かに、何もいわずにその演奏を他人事のように聴く。

その格好はナチルが消えた時から微動だにせず、あぐらをかいて空を見上げ、ぼんやりと二人の日々の続きを行っていた。

一秒ごとに何か死んでいた。一秒ごとに不快な音が鳴り響いた。でたらめに切り取られた空の一部が剥がれ落ちる。その奥に覗かせるのは深淵だ。深く黒い闇。

綺麗だった世界が。

あれだけ少女が愛した世界が。

守り手をなくした瞬間、陵辱されていく。

それは優貴の意思であり、同時に優貴の意識外のことであった。

既に細胞単位で邪なものに塗り替えられている優貴には何もできない。

だから何もしようとしない。

無駄な労力を使わず、そして薄情だった。

眼下の丘が陥没する。いつもの仕事場の比ではない。小さな新円から始まったそれは、瞬く間に直径数キロメートルにまで穴を広げる。……今度はもう修復はできそうにない。割れた空同様、その穴の先に見えるのは永遠なる闇だ。

けたたましい鳴き声に誘われて遠くの山を見ると、その上空では不恰好に踊る黒いシルエット。怪鳥達が数十羽、気が狂ったかのようにダンスを繰り広げていた。羽と足をばたつかせ、まるで道のない空を歩こうとでもいわんばかりの体勢だ。

一羽のハゲタカに更なる異変が起きた。突如その羽が消え失せたのだ。まるで、自由にパーツを取り外しできる玩具のように、左右で羽ばたいていた仰々しい翼のシルエットだけがぽっかりと抜け落ちる。

世界の理はまだ生きていたらしい。

重力に従い、ハゲタカが奇怪な叫び声を残して不出来なコントのように落下していく。

あまりに出来栄えが酷すぎて優貴は到底笑えない。

一羽だけではない。伝染するようにそれは広がり、うるさかった鳥達の叫び声は瞬く間に縮小されていく。完全に消え去るのに時間はかからなかった。

終わっていく。

ナチルを失った悲しみの対価は世界一つだ。

これは自分の復讐なのかもしれない。

こんな訳の分からない世界を造り、ナチル達を縛り付けた創造主に対しての。

ナチルとの約束を破ることに心が沈む一方で、破壊の快楽を確かに感じる。どうやら自分の心に広がっていた花はどれもこれも毒を

持っていたらしい。

緑は消え去り、空は濁り、生き物は死に絶える。
そして最後に。

太陽がすどん、と落下した。

笑う間もなく世界は闇に包まれた――

無音。

無声。

無臭。

無色。

世界を造る全ての彩りが彼方へと消え去った。
なのに。

神海優貴という存在だけは未だそこに在る。

あぐらをかいて座った体勢は世界の終わりから変わらず。……自
分の手の平を見つめる。

血の通った肉が、光の閉ざされた世界でもその視界に映し出され
た。

世界はからっぽになった。

人の世界からやってきた、破壊をもたらす存在は波となり、ほわ
ほわを飲み込んだ。

それが引いた頃には全てが飲み込まれている。
がらんだの砂浜が残されるだけだ。

「ナチル」

呟きに答える者はいない。

風さえも、僅かな物音さえも失われた世界。
無だ。

同時にかつてないほどの無力感に襲われる。

ナチルと笑いあった日々も、シスやジェンと出会えた僅かな時間
も、完全なる無を前には、まるで夢を見ていたかのような幻となっ
て頭の中で消えていく。

勉強と、バイトと、代わり映えがない日々に戻っていく。残されたものはその程度だ。

存在が——希薄になっていく。

意識が薄れ始めた。まるで眠りにつくかのように。

世界を洗い流し、役目を終えた人間に退場を促すかのような合図

「……？」

不明瞭な頭に小さな刺激が落ちる。声のない何かに呼ばれた気がして優貴は頭を上げた。

優貴の視線は空（？）へ飛ぶ。

最初は見間違えかと思った。真っ暗な世界でそこだけ形成に失敗したかのように、見上げる先には点——というか、小さな染みのようなものが浮かんでいたのだ。

それは深い緑色に見える。咄嗟に身構えてしまった優貴の頭上で、もはや存在しているかさえもあやふやな重力に従って真っ直ぐに落ちてくる。まるで意思が宿っているかのように、正確に優貴の頭を目掛けてくるそれを見て、回避のために腰を浮かそうとし——

細長い緑の先端に宿る優しい橙と、純真なる白を見て魂が抜けたように硬直してしまう。

花の束だった。

それも見覚えのある。

避ける必要はなくなった。危惧した殺傷能力などあまりに皆無であるそれは、上空から狙い済ましていたかのように、広げた優貴の手元に収まる。

間違いない。

「ジェン……？」

ナチルのために、優貴の言葉に従い、きっと必死で山を野を駆け巡り摘んできたのであろう、あの時の可憐な花々だった。今度は枯れることはない。水一つない優貴の手の中で、精一杯の生を象徴するかのように不思議な瑞々しきで満ちている。

「ジェン!？」

漆黒の闇に呼びかける優貴の声に、答えはない。
空を見上げる。

これが本当にジェンの残した物なら、まだ他に何かメッセージがあるかと思ったのだ。

ジェンはなぜ……棘一つない花を自分に寄越したのだ？

その時、更なる衝撃で頭に激流が渦巻く。

優貴にとっては世界の破滅音などより遥かに心を震わせる音。

「ユキ」

今度こそ本当に意識が飛びかけた。

鳥肌は皮膚の全てを埋め尽くした。

「ユキ」

「シス？ シスなのか!？」

忘れるはずがない。瞼を閉じれば今でも鮮明に思い描くことができる。自分とナチルで、静かにシスを看取ったあの穴を。横たわる彼女が、最後の最後で手にした、あまりに無意味な言葉の羅列。世界に仇をなす怨敵の名前。

一切の感情を乗せず、覚えたばかりの単語を連呼するかのように、その二文字は果てなき世界の隅々にまで響き渡った。

優貴の呼びかけには一切応じない。壊れたロボットのように同じ言葉が繰り返されるだけだ。だが優貴は知っている。それがあの少女にとって最上級の親密なる情の表現であることに。頬を引っ張られ、髪の毛を食べられ、その果てに得た言葉。何一つしてやれなかったのに、それでも彼女は名前を呼んでくれたのだ。

ジェンがこの場にいるわけではない。

シスがこの場にいるわけでもない。

波は確かに世界の全てを攫った。そして無機質なものを全部洗いさってしまった。

でも。

砂浜には、ほんの僅か。小さな貝殻の欠片が残されていたのだ。

本当にささいな物。価値があるわけでもない。値がつくわけでもない。もっと綺麗な物は、探せばいくらでも手に入る。

でも代わりは何物にもつとまらない。

花に込められた想いは。

名前に乗せられた想いは永久に色褪せない。

無なる世界に花と音が落ちる。

「優貴さん」

光が溢れた。

黒が一拳に白に塗り替えられた。

めしいにはなることはない。白一色だというのに、優貴にはなぜか優しい景色として映る。

何もない。何も存在しない。ただ色が変わっただけ。それなのに

世界が綺麗な空気に包まれた気がした。

「これがお前の残したもののなか？」

シスの小さな呼び声に交じるようにして、ナチルの自分への呼び声、笑い声、悲鳴、楽しかった全ての記憶が世界に溢れ始める。

それは混沌ではなかった。四方八方で大勢の声が一拳に奏でられたにも関わらず、爽やかで、透明感に溢れていて、雑音には程遠い、声が声に連なる一つのハーモニーと化していた。

ようやく知った。

彼等の想いを。

ジエンは自分を恨んでなどいなかった。

手元に寄せられた花々からは、甘酸っぱく、胸が苦しくなるような香りで満ちていた。

シスは宝物を手にかけていた。

泣くことしか知らない生まれたばかりの赤ん坊が大声で生を謳歌するように、繰り返し木霊する一つの名前は、シスが主張する精一杯の生の証だった。

ナチルは――

全てのものに命を与えた。

「ナチ——っ？」

立ち上がった優貴は、貧血でも起こしたかのようによろめく。いつの間にか頭は命令を受け付けなくなっていた。平衡感覚がなくなる。千鳥足でふらつき、堪らず地に手をついてしまった。

意識が——遠い何かに飲み込まれていく。

恐怖を感じた。

ジエンでもシスでもナチルでもない。

全く別の何かが、優貴を遠いどこかへ引きずり込もうとしていた。そうしたら……この世界はどうなる？

三人が残してくれた輝き。しかしそれを正しき形に導く者がいなければ、光は……やがて消えてしまうことだろう。

その考えを肯定するかのように、ナチルの残した純白が黒い斑点で滲み出す。

無限なる暗黒の前には、いくら他の色を垂らそうともやがては漆黒に吸収されてしまうのだといわんばかりに。

そんなこと許せるはずがなかった。

三人が生きた証が、確かに存在しているのだ。

優貴は——立った。

拳を握り、自分の頭を殴りつけた。

渦巻きの濁流が、僅かに緩和する。

このままでいいわけがなかった。

自分に比べ、三ヶ月足らずしか生きられないあの三人は、何と高尚で強く逞しく生きたことだろう。確かにきっかけを与えたのは自分だったかもしれない。でも、その先で各々の掴んだものは紛れもなく本人達の意思の力によるものだ。

何かをしてやりたい。

何ができる？

友として、大好きな彼等のために、その残した宝石を守ってやりたい。

「ちくしょう」

どうして自分はほわほわにおける侵略者なのだろう。
どうしてもものを破壊することしかできないのだろう。

願ったのは自分だ。しかし常に優貴を後押ししていたあの闇には、
誰かによる破壊の意思が存在していた。誰かがこの世界が滅びるこ
とを夢見たのだ。だがほわほわには無しかない。永遠の時が輪のよ
うに繰り返される。人々は毎日同じ行動を行う。

だから——それは自分に宿った？

取りついた？

ほわほわを滅ぼすために？

いきり立ったくせに何もできない。世界を破壊する力を持つのに
草木一本救えない。

完全無欠なる悪の存在。

「優貴さん」

偶然か。

必然か。

「世界は美しいんですよ。そしてその世界には、優貴さんも含まれ
ています」

光の中を飛び交う無限に連なる言霊が、一つの想いを乗せてそっ
と優貴の耳横を通り過ぎて行った。

彼女はきつと今この瞬間をどこかで見ている。皆が、自分を見守
っている。

約束をあつさり破った自分を怒っているか、不甲斐ない自分に嘆
いているか。

ナチルの笑顔を信じたい。

彼女の、最後に浮かべた笑顔の元となったのは——優貴の笑顔だ。
ならば、ナチルを信じることは、つまり自分を信じること。

「ナチル……！」

一步を踏み出した。

強固な割れ物にヒビが入るような、歪な音が届いた。

早速——白い世界が僅かに翳った。

優貴の一步はナチルの世界を壊した。

「クソッ!!」

何も掴めない。

掴んだそばから壊れていく。

ほわほわに残された小さな光。

白と音と花。

黒い斑点は、外壁に宿る染みや錆びのように、小さく、それでも確実に白を埋め尽くしていく。

何もしなくてもやがては消え逝く。自分が何かしようとすればもっと早く消える。

消えたらどうなるのか。

きつとまた——始まるのだろう。

無味乾燥な世界が。喜びも悲しみも知らず、日々手足を往復させるだけの世界。

神様はまたあの世界を造るのだろう。ナチル達が手に入れた物など最初からなかったかのように。ぐるぐるぐるると回る無の世界。厄介なものが芽生え始めたら、いや、芽生えなくても気まぐれで世界を壊すのかもしれない。そしてまた作るのだろう。世界の中も、外も、繰り返される。

それは正しいのか。

世界を構築するには、ロボットは必要不可欠。

——彼女の咲かせた向日葵が浮かんだ。

「正しいわけ——ないだろうが——!」

拳を足元に思い切り叩きつける。

破壊。破壊。破壊。

耳をつんざく爆音が天と地を埋め尽くした。ナチルの白い世界が、切れかけた電球のように白黒し始める。

破壊を信じ。

自分を、ナチルの言葉を信じた結果。

小さな白が心の隙間にそっと入り込んだ気がした。
やっと分かった。

今はっきりと、体の隅々まで行き渡ってしまった狂気の使用用途を知る。

神様は一つだけ過ちを犯した。

狂気は外だけではない。内にも通じてしまう。

友の名前を呼び、好きな人への恋心に胸を躍らせ、額を指で叩き合うような日々を、それを全部なかったことにしようとする創造主など、神海優貴は認めることは絶対にできない。

「壊してやる……」

もう一度拳を叩きつける。今度は目の前の空間にだ。

ガラスを一挙に十枚砕いたかのような、破滅ある爽快感。透明な世界に絶対なる暴力を叩き込む。砕け、割れ、崩れ、千切れ、爆ぜる。シスとナチルの声が綺麗なコーラスを奏でる中に、無作法に自分の欲望を投げ入れる。山が割れたのか、大地が爆発したのか、真っ白なボールに包まれた外側では常に何かが死んでいた。

「こんな世界、ぶっ壊してやる！！」

流し込む。未だどこかの世界からきたお迎えは優貴の意識を引っ張り出そうとするが、それを無視し脳を、心を滾らせる。その反響は外部へ即座にあらわれた。

壊し尽くす。

この世界を、自分の意思で。

ほわほわがなくなろうとしている。

神様とやらは、砂浜に打ち上げられた貝殻さえも捨て行こうとしている。

だからそれを壊す。

破壊を破壊する。

振れた運命を、メビウスの輪をちょん切る。

その先にあるのが再生であることを信じて。

大丈夫。

世界は美しい。

それはきつと、彼等が逞しいからだ。

雑草がコンクリートを割って、太陽の下にその顔を出すように。ほわほわに生まれた光は、たとえその姿形を変えようが、種になろうが細胞の一欠けらになろうが、残ってさえいればきつとそれは芽吹く。彼等の意思はそれだけ強くあの丘で輝いていたのだ。

「失わせるものかよ。絶対に残してやるからな！」

姿形ないものと闘っていた。

時の流れか、科学の世界の小難しい自然現象か、運命か、それとも本当にどこかで神様が念じてでもいるのか。そこには確かに、優貴を通じて世界をゼロにしようとする意思が存在した。それでは駄目なのだ。千分の一でも、百万分の一でもいい。

ゼロにしてはいけない。

見せつけるかのように、手の中にあつた花卉が千切れ、茎が折れ曲がった。

シスの声にラジオのノイズのようなものが走り、壊れかけた電子音のような響きとなった。

消えていく。

ナチルの残した白い輝きはショート寸前の配線のように、火花のように命を散らし始める。闇の侵攻がこの真っ白な世界に宿る魂を弱体化させているのは明白だった。爽やかな声のBGMは既に大半が途切れ、失われ、雑音のような不快な音になろうとしている。

壊す。全てを無に返そうとするその残酷なる意思にこそ、優貴は死を与える！

地面を踏み碎いてやろうと、優貴は足を持ち上げた。

——だが両足は消えていた。

声を発する間もなく今度は両腕が砂嵐のように消え去っていく。痛みはない。

コンピューターの中のバグが取り除かれるかのように、至極当たり前のよう存在が消され始めた。

世界は、その構築を操作しようとする存在を全力で排除にかかった。

胴と、首と頭だけが不恰好に宙に浮く。

全てが失われていく。

なかったことになってしまう。

間に合わない。

自分が消えたら、この世界の破壊はプログラム通りに行われて終わってしまう。

……体の消失と比例し、意識にかかる靄の量が刻一刻と増していく。

いよいよ、この世界から追い出される時がきたようだ。

「ゆ……さん」

ノイズは繰り返される。力尽きるその瞬間まで。

シスの声は既に消え去っていた。

幾百と自分呼んだナチルの明るい声は、もはや無残な残骸と化していた。

「……さん」

なのに——優貴は振り返ってしまった。

願望か、それともいよいよ頭がどうにかなくなってしまったのか。

機械のような声に混じり、たった一言、本当にあの少女が自分を呼んだ気がしたのだ。

空から——

雪のような物が、可憐に舞い降りてくる。

——優貴の胴体が消えた。

それは本のページのようだった。

白紙にビッシリと埋め尽くされた鉛筆の跡。

「何で……」

絶句する。

それはナチルが絶賛していた、優貴が書き続けたこの世界の記憶だった。なぜ今ここにあるのか、これは彼女からの贈り物なのだろう。

うか。

だが、風船が破裂するように。

それが一枚一枚、暴力的な破碎音と共に跡形もなく無に返っていく。

「!」

まるで、自分が過ごした日々が目の前で次々と壊されていくような。

屈辱と憤怒。

ナチルではない。世界の意思は全てを消し去ろうとしているのだ。なぜここに、ページが舞い降りた？

ナチルは一体何を伝えようとした――？

――考えているうちに呆気なく優貴の首が消えた。

この未完成なる本には、幾万もの文字が記されている。その中からナチルが伝えようとしたものを探し出せというのだろうか？ もはや顔しか残されていないこの状態で？ 残り僅かな時間で！？

ナチルの白い世界は再び闇に閉ざされようとしていた。燃え尽きる一瞬。無垢なる色が最後に輝きを放ち――

「……わ……わ……」

雑音を残して消え去る。

光が完全になくなった。

漆黒に閉ざされた。

優貴は――

最後に微かに聞こえた、その意味を成さない言葉を脳に刻み込む。それは名前だった。

彼女がつけた、自分がばっさり切り捨てた名前。

なぜそれが、今この瞬間に落とされたのか。

未完成の物語。認められなかった名前。それを組み合わせた時、不確定なる一つの回答を得た。

優貴は最後の最後でようやく自分が真に戦うべき相手を見た。敬服する。それを教えてくれた少女に。

彼女は――生の終わりに、いや、消えても尚、世界を想い、ほわほわを愛した。

攻撃。暴力や破壊、罵詈雑言。そんな下らないことのために、ナチルは決して動かないだろう。

誰かが傷つくことなど彼女は絶対によしとしないだろう。

ナチルは世界を讃え、それが故にたった一つのことを、他愛もないように最も大切なことを伝えたかったのだ。

タイトルのない本など、世界では本として認められない。存在が許されない。

どれだけナチルが頑張ろうとも、どれだけナチルが健気に働こうとも、存在しない物には価値をつけられない。いくら彼女が多く物を手にしようとも、なかったことになる。

どこに分岐があったのか分からない。最初からそんなものはなかったのかもしれない。

それでも、自分があの三人につけた名前は、彼等の人生に新たな道を示したのだと信じたい。

傲慢だろうか。

街の一人一人に名前をつけていたら、そこで新たな物語が始まっていたと思うのはめでたい考えだろうか。

呼び名を持たない命に名を与える。

それが彼女の望んだことではないだろうか。

――まさしく破壊だ。

鉄で作られたレールを、千切って、まとめて、遙か彼方へと蹴飛ばすのだ。

「……ほわほわじゃ、意味が分からないだろ」

一にして全なる破壊。

優貴は最後に壊す。

名無しという名の世界を。

「今日からお前は、ふわふわだ」
止まった。

音が、空気が——何かの鼓動がその時確かに止まった。
生命は死を恐れる。
有は無を恐れるのだ。

「や——」

それなのに。

——始まった。

鼓動は再び、留まるところ知らないかのように脈を打ち始めた。
既に世界からはナチルの気配は消えていた。

花と、音と、白の世界は。

一転して裏返し、漆黒へと溶けていた。

口をだらしなく開き、瞳からは希望の生気が失われる。

絶望だった。

食らい尽くす。

世界をゼロにするついでといわんばかりに——

闇が優貴の頭に覆いかぶさった。

意識が溶けた。

○・一章

そんな夢を見た。
全部夢だった。

「おい優貴！」

四月、××大学——

正門付近で揉みくちにされながら手渡された——というより押し渡された幾十枚ものチラシを、優貴はベンチに腰かけて適当に捲

る。

気さくな声で呼びかけてきたのは、年齢は同じながらも一学年上の親友だ。

「何だよ、そんな物捨てちまえて！ お前も入るだろ、俺達のいるサークル！ オールラウンドで、季節毎ごとにイベントこなしてさ。楽しいぜ！？ 何よりお前がくれば、ようやく俺達六レンジャーが完璧に揃うしよ！」

「んーんー？ ……んーんー…ん？」

耳に入る言葉に返事は返さない。部活やサークルの勧誘チラシを興味なさげに優貴は流していく。だが二十枚ほど捲り、ようやく優貴の手が止まった。

「虹色ガーデニング……」

「おいおい待て待て、優貴！ これどう見たって花とか園芸の類だろ？ 名前も何だか女の子っぽいし、そもそも男いないんじゃないのか？ このサークル」

「……いいかもな」

「優貴ーん！ 何だよおい、まだ郁子^{いくこ}のこと気にしてるのか！？ いったじゃん！ あいつはただ、最低最悪な男にたまたま引っかけちゃっただけなんだよ。もうとつくに別れたし、郁子、優貴のこと気に——」

「あ、おい。これでもいいかもしれないぞ？」

「……何だよ、この固そうなで面白みのないレイアウト——。文学に柵は存在しない。紙の翼で世界へ羽ばたこう、物書きサークル『一筆入魂』……」

「……迷うなあ……。両方入っちゃうか」

「俺達のサークルはどうした！？ 何で最初から除外されているんだよ！」

口にくそ出さないが、目の前の親友を大切に思う優貴の心は変わらない。これから先もずっとだ。

——一時期、皆に背を向けて翳ってしまったことはあったものの、

再び振り返ってみれば、呆気ないくらいに皆は最上の笑顔で出迎えてくれた。

「頼むよ優貴ー。入ってくれよー。いいじゃん、また俺達一緒にさー。……何かお前、目を離すとどこかへ行っちゃいそうなんだもんよ。前もいきなりスペインに一人で旅行行ったり、オランダ行ったり、行くんなら俺達も連れていけよなあ。寂しいじゃんよ」

「分かった、悪かったよ、今度は皆で一緒に行こうぜ。……ちよつと一人で色々見てみたかったからさ。それに、きても皆退屈だったと思うぜ？」

「何で？ 何見てたの」

「自然」

柔らかな優貴の笑顔を前に、彼は首を傾げるしかなかった。至極当然のように、きっぱりといい切る優貴を前に、茶化すことも頷くこともできない。

——一人、受験に失敗した優貴が塞ぎこんだことは当然知っていた。

優貴が徐々に五人から遠ざかっていこうとしていることに気づき、どうしたものかと五人は散々悩み抜いた月日があった。

それがある日、スイッチが入れ替わったかのようにあっさり復活したのだ。

モンゴルに行ってきたとかで、ひょうたん型の水筒を土産に。

五年來の付き合いになる彼でさえも、その時の優貴の顔は忘れられない——

「お前さあ……去年、夏前くらいからやっぱ何かあっただろ。絶対あったろ？ もういい加減教えてくれよー。友達だろ？」

「ないよ。勉強してバイトして寝てただけだって。あと旅行」
実際何もなかったのだ。

世界が破滅する夢を見て、目を覚ました先に広がっていたのは自分の部屋。

地球、日本、東京、××区。

季節は一ヶ月経っていた。

だがそれだけだった。

その日の朝、緊張で胸が破裂しそうになりながらも両親と顔を合わせたが、何の変化もない。予備校も、バイト先も、どこに行っても誰も自分を疑問に思わず、逆に、そわそわした態度を不審がられたのは優貴の方だったくらいだ。

つまり空白の一ヶ月間は、自分は「いつも通り」に過ごしていたのだろう。

夢で見ていた通りに。

そして――眠ろうと、どれだけ眠ろうと、もう向こうの世界へ戻ることはできなかった。

それがショックでないかといわれれば嘘になる。

ナチルに会えないのが寂しいかといわれれば……頷く。

どれだけ自然が豊かであろうが、この世界のどこを行こうとも、もはや彼女には会えないのだから。

でも――

「旅行ってどこだよ？ あの前にもどこか行ったのか？ お土産もらってないぞ俺」

「おう。ちよっと自分探しの旅にな」

そういつて胸をどんと叩く。相手が反応に困るのを承知でだ。

結局あの世界が何だったのかは分からずじまいだ。本当に丸一ヶ月、誰にも気づかれずに病気にでもかかっていたのかもしれない。全ては夢の中の出来事だったのだから。

それとも。

SOSだったのだろうか。機械のような世界を治療するために、どこかの誰かが優貴の心を、意識を招いたのだろうか。

世界が存在する場所は、予測程度ならばつけている。

握った拳には、胸の中の温かな鼓動が元氣よく伝わってきた。

……温かな風が吹く。

心地よい春風だ。

ズボンのポケットで携帯のバイブレーションが作動した。
開く。

画面を覗き込まれる。

「ん、メールか？ ……って何だ、迷惑メールかよ」
件名は「%¥*#>…」とワケの分からない羅列。

本文は、その意味不明な記号が更に、数百文字に渡って続いていた。

——不気味である。

「うっわ。優貴お前、これある意味凄えぞ……。ここまで迷惑極まりない超迷惑メールなんて、俺きたことないぜ」

「まったくだよな。俺も、毎回返信に困ってる」

「え、バカ！ お前、この手のは返信しちゃいけないだって！」

優貴の顔に浮かぶ表情は、その言葉とは真逆のもの。

メールには画像ファイルが添付されているようだ。

隣で上がる悲鳴をよそに、優貴は躊躇わずにそれを開く。

——世界は、確かにあの時、終わった。

月並みない方をするなら、それは始まりだった。

リングが木から落ち、土に還ってしまった。

「何で開くのよ！！ ……あれ？ え？ 何だ、この画像」

それはゼロではない。

確実なる一だ。

訪れる暗黒は。

新たな夜明けの始まり。

時が経てば再びリングは赤く熟される。

「すっげ！ これどこの国だよ？ 日本じゃなくね？ 綺麗だなおい！」

「お。お前とはいい友達になれそうだな」

「おい優貴！ 俺達友達じゃなかったのかよ！！？」

果てのない緑の丘が続いていた。

悩み一つない青空が無限に広がっていた。

漲る太陽の輝きはあの時よりも力強く見える。

風が吹いていたのか、草木が一斉に、気持ちよさそうに首を傾けていた。

画面の中に映るその絵からは、全ての命が活き活きと世界を満喫している声が伝わってきた。

「きれ〜〜だな、うん」

「優貴、お前少し変になった？」

しばしメールの返信を見送る。

ベンチに深く腰をかけて空を見上げた。

手を伸ばす。

掴めるはずもない空を掴みたくなる。

握る。

その瞬間、二つの世界は一つに繋がった。

完

最終話（後書き）

ここまで読んで下さった方、本当にどうもありがとうございました。取り立てて大きな出来事があるわけでもなく、小さな日々の積み重ねのような話ですが、時間潰し程度になっただけなら幸いです。

次回作はまだまだプロット段階；

ですがそう遠くないうちに新しい物が書ければと思っています。それでは。

ここまでお付き合い下さり、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2123k/>

ふわふわ

2010年10月8日14時50分発行